

# 資料編



# 1. 長崎市文化財一覧

長崎市文化財一覧 (平成27年3月31日現在)				＜国選定重要文化的景観＞(1)	
<b>＜国 宝＞(3)</b> 指定年月日 S28. 3. 31 崇福寺大雄宝殿 " 崇福寺第一峰門 " 大浦天主堂		H18. 6. 9 長崎奉行所関係資料 H20. 6. 9 大野教会堂 H22. 12. 24 清水寺本堂 H23. 11. 29 出津教会堂 H26. 9. 18 聖福寺4棟 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             大雄宝殿              天王殿              鐘楼              山門           </div>		選定年月日 H24. 9. 19 長崎市外海の石積集落景観	
<b>＜国指定重要文化財＞(31)</b> S25. 8. 29 崇福寺三門(楼門) " 崇福寺鐘鼓楼 " 崇福寺護法堂(開帝堂又観音堂) " 興福寺本堂(大雄宝殿) " 太刀銘国安 S27. 7. 19 珠冠のまぬある S35. 2. 9 眼鏡橋 S36. 6. 7 旧グラバー住宅 " 旧唐人屋敷門 S41. 6. 11 旧リンガー(弟)住宅 S44. 6. 20 旧本田家住宅 S47. 5. 15 旧オルト住宅 " 旧羅典神学校 " 崇福寺媽姐門 S55. 6. 6 フィリップ・フランツ・フォン シーボルト関係資料 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             シーボルト妻子像              螺鈿合子              シーボルト書状              シーボルト処方箋              シーボルト名刺              ポンペ書状他           </div>		<b>＜国指定重要無形民俗文化財＞(1)</b> S54. 2. 3 長崎くんちの奉納踊		<b>国選定 計 3</b> <b>国宝・国指定・認定・選定 合計 52</b>	
<b>＜国指定重要文化財＞(31)</b> S25. 8. 29 崇福寺三門(楼門) " 崇福寺鐘鼓楼 " 崇福寺護法堂(開帝堂又観音堂) " 興福寺本堂(大雄宝殿) " 太刀銘国安 S27. 7. 19 珠冠のまぬある S35. 2. 9 眼鏡橋 S36. 6. 7 旧グラバー住宅 " 旧唐人屋敷門 S41. 6. 11 旧リンガー(弟)住宅 S44. 6. 20 旧本田家住宅 S47. 5. 15 旧オルト住宅 " 旧羅典神学校 " 崇福寺媽姐門 S55. 6. 6 フィリップ・フランツ・フォン シーボルト関係資料 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             シーボルト妻子像              螺鈿合子              シーボルト書状              シーボルト処方箋              シーボルト名刺              ポンペ書状他           </div>		<b>＜国指定史跡＞(8)</b> T11. 10. 12 出島和蘭商館跡 " シーボルト宅跡 " 高島秋帆旧宅 S44. 4. 12 小菅修船場跡 S53. 12. 21 曲崎古墳群 S61. 1. 31 長崎台場跡魚見岳台場跡 (H26. 3. 18 (追加) " 四郎ヶ島台場跡) H24. 9. 19 大浦天主堂境内 H26. 10. 6 高島炭鉱跡 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             高島北溪井坑跡              中ノ島炭坑跡              端島炭坑跡           </div>		<b>＜国指定有形文化財＞(34)</b> 指定年月日 S31. 4. 6 職人尽 " 東海の墓 S33. 6. 5 天井絵 S34. 1. 9 興福寺山門 S35. 3. 22 冷泉為恭筆法然上人行状絵 S35. 3. 22 中島聖堂遺構大学門 S35. 7. 13 崇福寺の聯額 " 崇福寺本堂の仏像群 " 崇福寺の梵鐘 " 銅版画「セビアの聖母」 " 銅版画「聖家族」 S37. 3. 28 興福寺媽姐堂 " 興福寺鐘鼓楼 " 興福寺三江会所門 S39. 3. 16 西勝寺文書 「きりしたんころび証文」 S42. 9. 8 刀・対州住長幸 S44. 1. 31 出津のブラケット「無原罪の聖母」 S44. 4. 21 刀・肥前国忠吉 S45. 1. 16 ブラケット「ピエタ」 " 木彫レリーフ「聖母子」ほか キリシタン遺物 57 点 S46. 2. 5 木版画筆彩「煉獄の靈魂の救い」 S57. 1. 25 銅造弥勒菩薩半跏思惟像 S57. 7. 22 伊王島灯台旧吏員退息所 S63. 9. 30 永島キク刀自絵像 H13. 2. 26 芒塚句碑(3基) " 青方文書 H15. 3. 25 聖福寺の涅槃図 " 春徳寺の涅槃図 H18. 3. 3 景華園遺跡出土の一括遺物 18 点 H19. 3. 2 菩提寺の木造薬師如来坐像 H21. 4. 3 皓臺寺 山門・仁王門・大仏殿 H23. 3. 4 旧長崎大司教館	
<b>＜国指定重要文化財＞(31)</b> S25. 8. 29 崇福寺三門(楼門) " 崇福寺鐘鼓楼 " 崇福寺護法堂(開帝堂又観音堂) " 興福寺本堂(大雄宝殿) " 太刀銘国安 S27. 7. 19 珠冠のまぬある S35. 2. 9 眼鏡橋 S36. 6. 7 旧グラバー住宅 " 旧唐人屋敷門 S41. 6. 11 旧リンガー(弟)住宅 S44. 6. 20 旧本田家住宅 S47. 5. 15 旧オルト住宅 " 旧羅典神学校 " 崇福寺媽姐門 S55. 6. 6 フィリップ・フランツ・フォン シーボルト関係資料 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             シーボルト妻子像              螺鈿合子              シーボルト書状              シーボルト処方箋              シーボルト名刺              ポンペ書状他           </div>		<b>＜国指定天然記念物＞(2)</b> T12. 3. 7 オオウナギ生息地 S26. 6. 9 キイツチトリモチ自生北限地		<b>国指定 計 45</b>	
<b>＜国指定重要文化財＞(31)</b> S25. 8. 29 崇福寺三門(楼門) " 崇福寺鐘鼓楼 " 崇福寺護法堂(開帝堂又観音堂) " 興福寺本堂(大雄宝殿) " 太刀銘国安 S27. 7. 19 珠冠のまぬある S35. 2. 9 眼鏡橋 S36. 6. 7 旧グラバー住宅 " 旧唐人屋敷門 S41. 6. 11 旧リンガー(弟)住宅 S44. 6. 20 旧本田家住宅 S47. 5. 15 旧オルト住宅 " 旧羅典神学校 " 崇福寺媽姐門 S55. 6. 6 フィリップ・フランツ・フォン シーボルト関係資料 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             シーボルト妻子像              螺鈿合子              シーボルト書状              シーボルト処方箋              シーボルト名刺              ポンペ書状他           </div>		<b>＜国認定重要美術品＞(4)</b> S10. 8. 3 紙本著色唐蘭館内の図 " 紙本著色南蛮人來朝図屏風一雙 " 紙本著色シーボルト瀉血手術図 S10. 12. 13 紙本墨書ボ・ドウの書状(一通)		<b>国認定 計 4</b>	
<b>＜国指定重要文化財＞(31)</b> S25. 8. 29 崇福寺三門(楼門) " 崇福寺鐘鼓楼 " 崇福寺護法堂(開帝堂又観音堂) " 興福寺本堂(大雄宝殿) " 太刀銘国安 S27. 7. 19 珠冠のまぬある S35. 2. 9 眼鏡橋 S36. 6. 7 旧グラバー住宅 " 旧唐人屋敷門 S41. 6. 11 旧リンガー(弟)住宅 S44. 6. 20 旧本田家住宅 S47. 5. 15 旧オルト住宅 " 旧羅典神学校 " 崇福寺媽姐門 S55. 6. 6 フィリップ・フランツ・フォン シーボルト関係資料 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;">             シーボルト妻子像              螺鈿合子              シーボルト書状              シーボルト処方箋              シーボルト名刺              ポンペ書状他           </div>		<b>＜国選定重要伝統的建造物群保存地区＞(2)</b> 選定年月日 H 3. 4. 30 長崎市東山手伝統的建造物群保存地区 " 長崎南山手伝統的建造物群保存地区			

H24. 2. 24 長崎皓台寺の大仏 (毘盧舎那仏坐像及び基台)	S58. 8. 30 琴海のカネコシダ群落 〃 琴海のヒイラギ	H12. 4. 28 福建会館(正門・天后堂)
H27. 2. 19 皓台寺文書	H 6. 2. 28 脇岬のビーチロック 〃 野母崎の変はんれい岩露出地	H15. 5. 1 万屋町傘鉾垂一式
<b>〈 県指定有形民俗文化財 〉 ( 1 )</b>	<b>県指定 計 68</b>	H17. 1. 4 観音寺の梵鐘 〃 正瑞寺地藏銅像 〃 羅漢渡海図及び同図賛寄書
S59. 9. 18 諏訪神社の能関係資料 (能面・能衣装・雑具)	<b>〈 市指定有形文化財 〉 (52)</b>	H17. 8. 22 石版「キリシタン暦」 〃 中国製キリスト教木版画 〃 メダイ「サルバトル・ムンデ イ(世の救い主)」 〃 俊寛僧都墓碑 〃 圓福寺の梵鐘 〃 即非禪師書憩香山岩謁 〃 野母村絵踏帳 〃 深堀家系図・深堀系図証文記
<b>〈 県指定無形文化財 〉 ( 2 )</b>	S43. 11. 20 崇福寺大釜 〃 興福寺の瑠璃燈	H19. 5. 1 大波止の鉄玉 〃 養国寺の梵鐘
S53. 8. 22 長崎の明清楽	S46. 10. 21 中島川石橋群(4橋)	<b>〈 市指定有形民俗文化財 〉 ( 6 )</b>
H22. 3. 5 長崎刺繍	S47. 3. 16 即非禪師書火化の偈	S52. 7. 20 戸石の六地藏塔 〃 現川焼関係瀬古の石祠石仏
<b>〈 県指定無形民俗文化財 〉 ( 5 )</b>	S47. 6. 10 即非禪師書規条六則 〃 即非禪師書落成の偈 〃 即非禪師書中天紅日麗 〃 黄檗開祖国師三幅対 〃 黄檗三禪師次韻 〃 木庵禪師書三幅対 〃 即非禪師書雲連分紫山 古橋(中川橋)	S56. 3. 30 仁田尾供養塔残欠群
S35. 7. 13 野母の盆踊	S49. 3. 8 魚の町の傘鉾飾 〃 桶屋町傘鉾飾及び十二支刺繍 〃 諏訪町傘鉾垂及び下絵 青銅塔	H17. 3. 16 香焼の鯛網漁関係資料 〃 大聖寺跡の墓碑群 〃 観音寺の民俗関係資料 (H20. 4. 30 鑿子・太鼓追加指定)
S39. 3. 16 龍踊	S50. 3. 10 本河内宝篋印塔 〃 喜多元規筆慈岳和尚法像 〃 喜多元規筆東瀾和尚法像 〃 崇福寺蔵仏舍利塔並びに舍利殿	<b>〈 市指定無形民俗文化財 〉 ( 7 )</b>
S40. 5. 31 長崎くんち奉納音曲 (竹ノ芸囃子、シャギリ、角力踊道中囃子)	S50. 12. 5 一の瀬無縁塔 〃 茂木道無縁塔	S43. 11. 20 中尾獅子浮立と唐子踊
S43. 4. 23 間の瀬狂言	S51. 7. 20 清水寺の梵鐘 〃 発心寺の梵鐘	S49. 3. 8 竹ノ芸
H26. 3. 25 長崎くんち奉納音曲(シャギリ)	S51. 12. 15 皓臺寺の梵鐘 〃 円成寺の梵鐘 〃 聖福寺の梵鐘 〃 春徳寺の梵鐘	S50. 6. 26 飯香浦地藏まつり飾りそうめん 〃 太田尾地藏まつり飾りそうめん 〃 平山の大名行列
<b>〈 県指定史跡 〉 (13)</b>	S53. 3. 20 古川町天満宮の鳥居	S50. 12. 5 北浦の俵かたげ及び獅子踊
S31. 4. 6 日本二十六聖人殉教地	S53. 12. 20 本河内高部貯水池内石橋	S52. 3. 25 滑石竜踊
S35. 3. 22 花月	S54. 5. 10 末次船絵馬	<b>〈 市指定史跡 〉 (41)</b>
S35. 7. 13 崇福寺媽祖堂 〃 ケンペル、ツェンペリー記念碑 〃 長崎金星観測碑・観測台	S55. 1. 19 聖福寺惜字亭 〃 聖福寺石門	S43. 11. 20 潜伏時代のキリシタン墓碑
S36. 11. 24 興福寺寺域	H1. 9. 4 東山手洋風住宅群(7棟)	S45. 10. 7 一の瀬口
S38. 5. 8 現川焼陶窯跡 田中宗悦の墓石1基・窯観音1基(堂を含む)	H10. 4. 30 式見乙宮神社の絵馬 〃 深堀神社の鳥居(旧幸天宮石神門) 〃 渡鳥塚(句碑)	S46. 7. 24 崇福寺三塔
S38. 10. 30 戸町番所跡四、五、六、 七番石標柱		S47. 6. 10 即老和尚閣維處
S39. 10. 16 鉅鹿家魏之談兄弟の墓(1基)		S48. 3. 10 東望山砲台跡
S41. 4. 18 トードス・オス・サントス跡 (セミナリヨコレジヨを含む)		S48. 7. 27 西川如見の墓
S42. 2. 3 ド・ロ神父遺跡 (救助院跡・いわし網工場跡)		S48. 11. 5 高木家墓地
S43. 4. 23 烽火山のかま跡		S48. 11. 5 高島家墓地 〃 後藤家墓地
S47. 2. 4 国際海底電線小ヶ倉陸揚庫		S48. 12. 28 唐人墓地 祭場所石壇
<b>〈 県指定名勝 〉 ( 1 )</b>		S49. 3. 8 深堀鍋島家墓地 〃 五官の墓
S39. 10. 16 滝の観音		
<b>〈 県指定天然記念物 〉 (12)</b>		
S25. 4. 10 大徳寺の大クス		
S35. 3. 22 脇岬ノアサガオ群落 〃 弁天山樹叢		
S38. 7. 23 長崎市小ヶ倉の褶曲地層		
S41. 4. 18 デジマノキ		
S53. 3. 31 三重海岸変成鉱物の産地		
S53. 8. 22 川原大池樹林		
S54. 7. 27 茂木植物化石層		

S49. 10. 15	旧唐人屋敷内土神堂・観音堂・天后堂	S53. 3. 20	網場天満神社の社叢 " 太田尾の大クス	H15. 3. 18	三菱重工業長崎造船所 ハンマーヘッド型起重機
S50. 12. 5	松平図書頭墓地 " 荒木宗太郎墓地	S54. 5. 10	宮摺山ン神の社叢	H17. 11. 10	橋口家住宅主屋 " 橋口家住宅倉庫
S51. 7. 20	中の茶屋	H10. 4. 30	式見のエノキ	H19. 10. 22	長崎大学瓊林会館 (旧長崎高等商業学校研究館)
S52. 3. 25	阿蘭陀通詞中山家墓地 " 浦上村瀨庄屋志賀家墓地	H16. 6. 3	長崎公園のトックリノキ	"	長崎大学経済学部倉庫 (旧長崎高等商業学校倉庫)
S52. 7. 20	唐通事林・官梅家墓地	H17. 8. 22	伊王島キイレツチトリモチ群生地 " 岩立神社のエノキ " 豊前坊社のエノキ " 藤田尾のヤブツバキ " 川原住吉神社のクスノキ	"	料亭 富貴楼
S53. 8. 1	福濟寺の唐僧墓地 " 福濟寺の唐通事頼川(陳)家墓地	H18. 1. 4	戸根溪谷ヒスイ	H19. 12. 5	長崎大学(旧長崎高等商業学校) 拱橋 " 東山手十三番館住宅主屋 " 東山手十三番館住宅倉庫 " 小野原本店店舗兼主屋 " 小野原本店附属屋
S53. 12. 20	唐僧玉岡の墓 " 仏師范道生の墓	H22. 5. 17	牧島のハマナツメ群落		
S55. 9. 10	興福寺の唐僧墓地	<b>市指定 計 131</b>			
S60. 9. 20	本木昌造の墓	<b>合計 251</b>			
H11. 4. 30	皓臺寺の向井家墓地	<b>選択文化財</b>			
H12. 4. 28	阿蘭陀通詞加福家墓地	(平成 27 年 3 月 31 日現在)			
H16. 6. 3	グラバー家墓地	<b>&lt; 記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 &gt; (26)</b>			
H17. 1. 4	枯松神社 " 鷹ノ巣石鍋製作所跡 " ド・ロ神父 大平作業場跡 " 唐人海難者改葬供養塔	選択年月日			
H17. 3. 16	外海キリシタン関係伝承地	S 53. 3. 25	明清楽	<b>&lt; 登録記念物 (遺跡関係) &gt; (4)</b>	
H17. 8. 22	神浦氏墓地 " 外海深入の辻傍示石 " 北溪井坑跡 " 香焼遠見番所跡	<b>&lt; 記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財 &gt; (4)</b>			
H18. 1. 10	上野(彦馬)家墓地 " 皓臺寺の唐通事呉家墓地 " 唐通事頼川家初代墓地	S 45. 6. 8	竜踊	H25. 8. 1	長崎原爆遺跡(旧城山国民学校校舎)
H25. 2. 27	心田庵	S 47. 8. 5	野母の盆踊	"	長崎原爆遺跡(浦上天主堂旧鐘楼)
<b>&lt; 市指定名勝 &gt; (1)</b>		H15. 2. 20	竹ン芸	"	長崎原爆遺跡(旧長崎医科大学門柱)
H17. 8. 22	伊王島灯台公園	H27. 3. 2	手熊・柿泊のモットモ	"	長崎原爆遺跡(山王神社二の鳥居)
<b>&lt; 市指定天然記念物 &gt; (24)</b>		<b>合計 5</b>			
S44. 2. 15	山王神社の大クス " 観善寺の大クス	<b>登録文化財</b>			
S44. 6. 15	矢上八幡神社の大クス	(平成 27 年 3 月 31 日現在)			
S45. 7. 18	滑石大神宮社叢	<b>&lt; 登録有形文化財 &gt; (29)</b>			
S46. 3. 15	岩屋神社のスギ群	登録年月日			
S48. 7. 27	竈神社の大クス	H 9. 7. 15	宮地嶽八幡神社陶器製鳥居	<b>&lt; 登録記念物 (名勝関係) &gt; (1)</b>	
S49. 6. 18	西山神社の寒桜 " 松森神社のクスノキ群	H 9. 11. 5	佐藤家住宅主屋 " 佐藤家住宅木造別棟 " 佐藤家住宅木造附属屋 " 佐藤家住宅石造倉庫A " 佐藤家住宅石造倉庫B	H20. 7. 28	平和公園
S50. 6. 26	野島樹叢	H10. 10. 9	江崎べっ甲店	<b>合計 34</b>	
S50. 6. 26	大音寺のクロガネモチ	H10. 12. 11	池上家住宅		
S51. 7. 20	大音寺のイチョウ " 深堀陣屋跡のアコウ	H12. 12. 4	馬込教会		
		H14. 2. 14	日見トンネル(一基)		

## 2. 歴史文化遺産等の調査結果

本構想の策定にあたって、これまでに長崎県や長崎市が実施した歴史文化遺産の所在調査等の資料(第2章 1.(3)未指定文化財等の調査 表 2-2 参照)を基に把握した長崎市の歴史文化遺産の件数は、約 2200 件であった(指定・登録文化財を含む)。

これらの歴史文化遺産は、長崎市の貴重な財産として後世に伝えていくための保護を推進し、より多くの市民をはじめとする人々に知っていただくために積極的な活用を図っていくことが望まれるものである。また、これらのなかには、今後新たな文化財として指定や登録を目指す必要があるものも含まれる。

そのため、これらの歴史文化遺産について以下の内容を整理した長崎市歴史文化遺産一覧表と分布図を作成し、データベースとして活用できるようにまとめた。

表資-1:長崎市歴史文化遺産一覧表に記載した内容

項目		概要	
1	分類	<ul style="list-style-type: none"> <li>指定文化財の分類や、指定基準を参考に歴史文化遺産を以下の 3 段階で分類。</li> <li>分類 1:有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物等</li> <li>分類 2:分類 1 を細分化。有形文化財(建造物、美術工芸品)、記念物(史跡、名勝、天然記念物)等</li> <li>分類 3:分類 2 を細分化。建造物(宗教、住居、学校、文化施設・・・)等</li> </ul>	
2	名称	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴史文化遺産の名称については、出典資料に使用されている名称を基本的に使用し、指定・登録文化財については指定・登録名称を用いた。</li> </ul>	
3	所在地	地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内の 9 つの地域のうち、歴史文化遺産が所在する地域を記載。</li> </ul>
		住所	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴史文化遺産が所在する住所を記載。</li> </ul>
		分布図	<ul style="list-style-type: none"> <li>地形図上に歴史文化遺産の位置を表示した分布図を作成。無形文化財関係等で位置が表示できないものもあるため、一覧表には分布図で表示したものがわかるようにした。</li> </ul>
4	該当する関連文化財群のテーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>本構想で設定した 26 の関連文化財群のテーマのうち、該当するものを記載。複数のテーマに該当する場合は、複数のテーマを記載。</li> </ul>	
5	概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>各歴史文化遺産の概要について、出典資料の記載内容を抜粋して記載。</li> </ul>	
6	建立(設立)年	<ul style="list-style-type: none"> <li>建立又は設立した時期が判明しているものについては、年代等を記載。</li> </ul>	
7	指定・登録年	<ul style="list-style-type: none"> <li>指定・登録文化財については、指定年月日を記載。</li> </ul>	
8	出典	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴史文化遺産が掲載されている既往資料を記載。</li> </ul>	

### 3. 関連文化財群のテーマの概要

第2章で設定した関連文化財群の各テーマの概要を整理する。

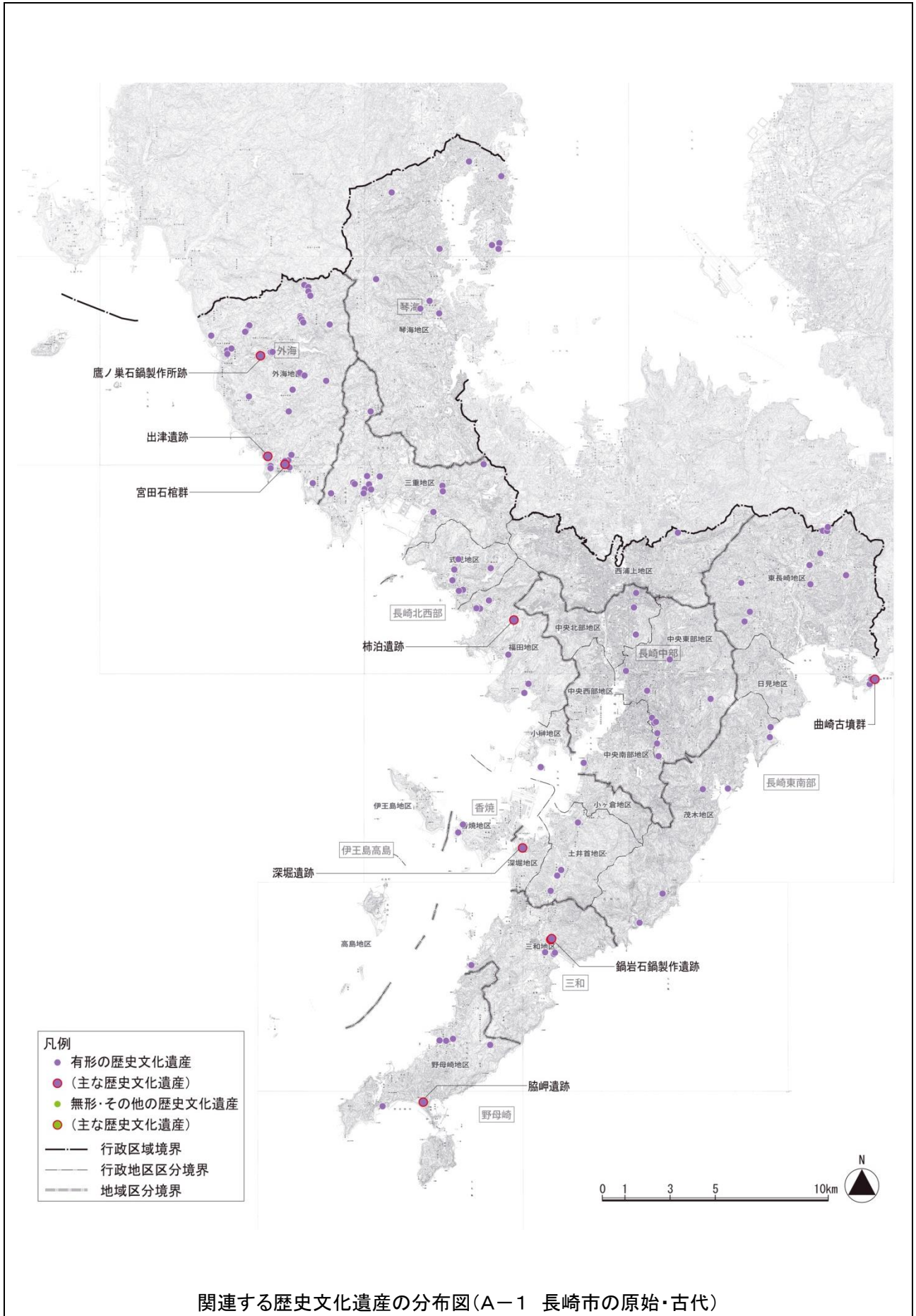
表資-2: 関連文化財群の一覧

長崎市の歴史文化の特性	テーマ	頁
A 自然環境との共生	A-1 長崎市の原始・古代	資 6
B 各藩領・地域の文化	B-1 大村藩領の文化	資 8
	B-2 佐賀藩深堀領とその周辺の文化	資 10
	B-3 佐賀藩諫早領の文化	資 12
	B-4 天領茂木・橘湾沿岸の文化	資 14
C 幕府直轄領長崎の都市構造と町人文化	C-1 長崎氏の城と町	資 16
	C-2 近世都市長崎とその伝統	資 18
	C-3 寺社群と中島川石橋群	資 22
D みなと長崎ー海外との窓口	D-1 西洋文化の唯一の窓口	資 25
	D-2 長崎の中国文化	資 29
	D-3 海防施設と関連遺跡	資 33
	D-4 長崎居留地と国際航路	資 35
E 全国と繋がる街道	E-1 長崎街道	資 39
	E-2 浦上街道	資 42
	E-3 茂木街道	資 44
	E-4 御崎道	資 46
F キリスト教文化の拠点	F-1 長崎のキリスト教文化	資 48
	F-2 ド・ロ神父のまちづくり	資 50
G 近代化の先進地	G-1 近代化の黎明	資 52
	G-2 近代造船遺産	資 56
	G-3 近代石炭産業遺産	資 58
	G-4 近代長崎の都市インフラ	資 61
H 平和都市長崎	H-1 長崎の被爆継承と平和祈念	資 64
I 交流で培われた長崎の芸術・芸能、工芸、生活文化	I-1 海外交流とゆかりの深い芸術や工芸技術	資 66
	I-2 長崎の伝統芸能・行事・生活文化	資 69
	I-3 長崎独特の食文化	資 71

## A 自然環境との共生

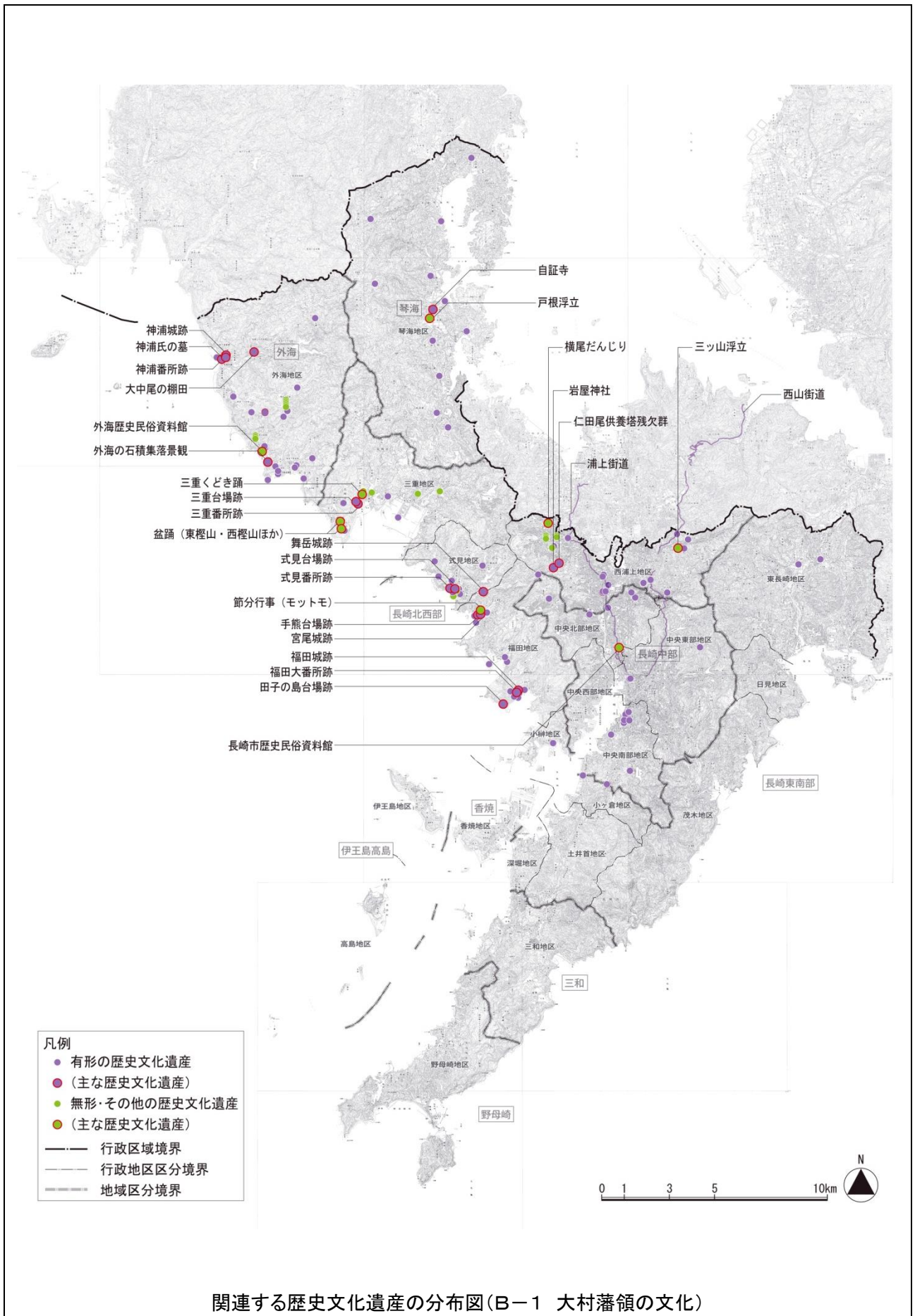
テーマ	A-1 長崎市の原始・古代	
概要	<p>西彼杵半島南部及び長崎半島の沿岸地域は、各地で浜堤が発達しており、縄文前期から人々の営みの痕跡が見られる。深堀遺跡や出津遺跡、脇岬遺跡などでは貝塚が形成され、平地に乏しい地形的制約のもと弥生時代以降も豊富な海洋資源に依存した生活を営んでいたと考えられる。これらの遺跡の分布は現在の海浜部の漁業集落と重なっており、今日までの継続した土地利用が確認される。また、大陸や南島地域との交流を示す資料の出土もあり、古くから海上交通による広範囲なネットワークを有していたと考えられる。橘湾奥の牧島では、岬状の礫丘に積石塚群集墳である曲崎古墳群が形成されており、天草灘沿岸において海を生活の舞台とする人々の墳墓という見方もある。</p> <p>一方、西彼杵半島・長崎半島の山間においては、古代から中世にかけて滑石鉱脈を利用した石鍋製作地が形成され、ここから石鍋が生産・出荷され全国各地に流通した。</p> <p>このように原始・古代においては海浜部や山間における資源を巧みに利用し、自然と共生していた人々の営みを見出すことができる。</p> <p>●沿岸部に展開した海と密接に関わる縄文・弥生時代の人々の暮らし</p> <p>長崎市の原始・古代は、農耕を行うための広い平野部に恵まれなかったため、海と密接に関わる生活が長く継続された。縄文時代前期(今からおおよそ 6000~7000 年前)には漁撈活動を中心とした生活を営むようになってきた。出津川の河口部に形成された出津遺跡(外海地区)や長崎半島先端部に位置する脇岬遺跡(野母崎地区)、長崎港の入り口に位置する深堀遺跡(深堀地区)は砂丘・浜堤に立地しており、これらの遺跡からは海浜部集団の生活の様相を示す漁労活動に係る遺物が出土している。</p> <p>●古代から見られる大陸や南島地域との交流</p> <p>弥生時代は、稲作技術の導入により日本での水稲耕作が始まり、定着していった時代であるが、長崎県地域では農耕生活を基盤に置くことができず、縄文時代から継続された漁労に比重を置きながら、航路の水先案内や交易活動など、風土に適合した海民的な性格を帯びていったと考えられている。弥生時代の遺物として鉄器の副葬品や中国の貨幣(貨布)などが出土しており、海を渡って大陸との交渉が行われていたことも考えられる。また、古墳時代の墳墓が確認されている深堀遺跡や五島灘に面した宮田石棺群(外海地区)、曲崎古墳群(東長崎地区)などは、海上交易・漁労生産の上で重要な位置を占めた集団の墳墓群と考えられており、これらの古墳群は海岸線の多い長崎市ならではの古墳の在り方を示している。</p> <p>●滑石鉱脈を利用した石鍋づくり</p> <p>滑石製石鍋は、古代末期から中世末にかけて使用された調理具である。西彼杵半島は石鍋の一大生産地であったことが広く知られ、長崎市内では外海地区を中心に石鍋製作所跡が残っており、山中には石鍋粗形の残る岩壁や多数の石鍋未製品(製作途中の石鍋)が破損した状態で散在している。九州では博多・大宰府から多くの石鍋の出土例が報告されており、西彼杵半島で製作された石鍋は、地理的な条件から海路を使って博多・大宰府をはじめ全国各地に搬出されたことが推定されている。</p>	
歴史文化遺産等 関連する主な 有形	<p>埋蔵文化財包蔵地：深堀遺跡、出津遺跡、柿泊遺跡、脇岬遺跡、宮田石棺群、曲崎古墳群、鷹ノ巣石鍋製作所跡、鍋岩石鍋製作遺跡 等</p> <p>各遺跡から発見された出土品</p>	





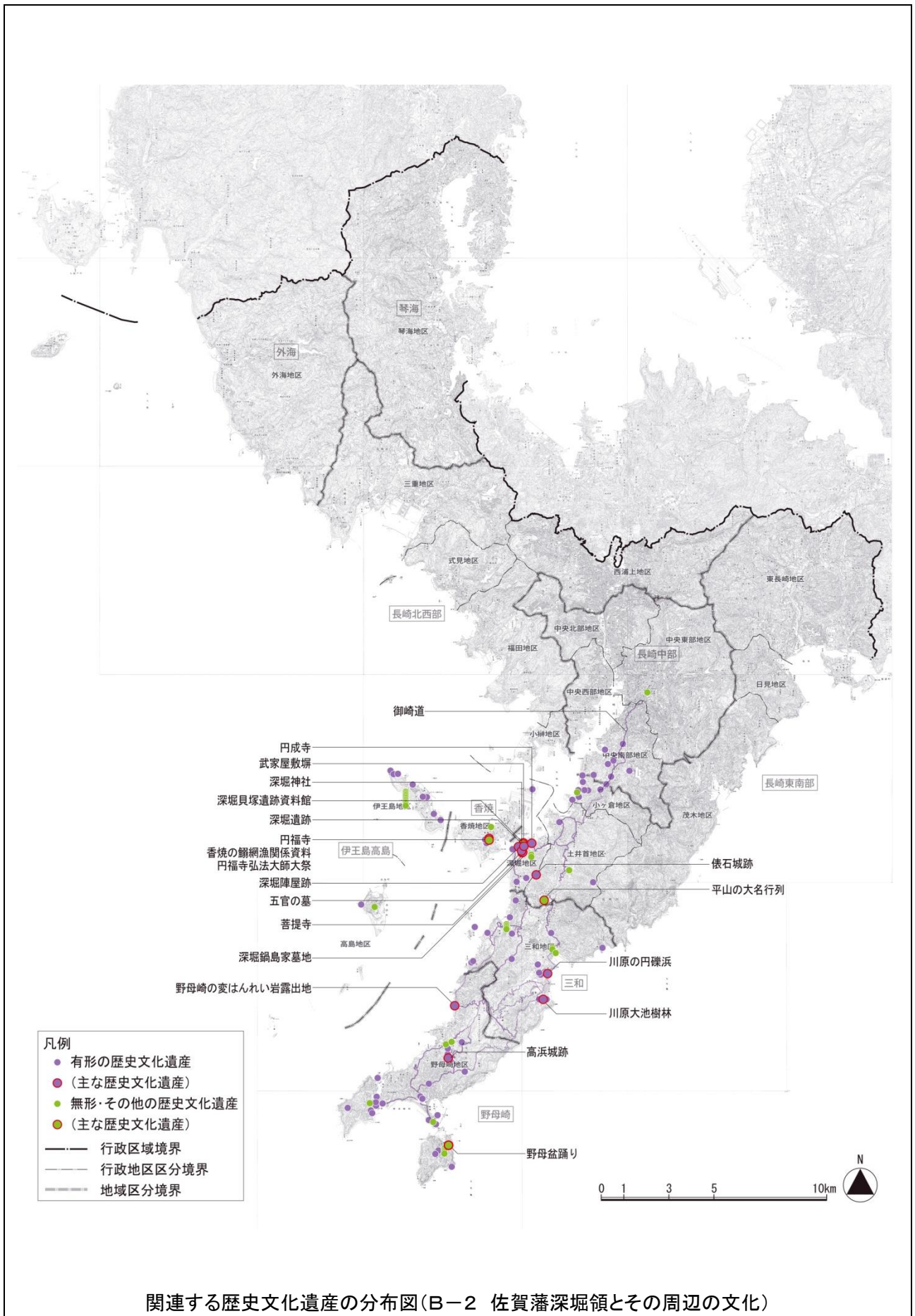
## B 各藩領・地域の文化

テーマ	B-1 大村藩領の文化
概要	<p>西彼杵半島の南部地域は、中世には神浦氏や櫛氏、福田氏など、海浜部の浦々より地方豪族が割拠したが、戦国時代に大村氏の支配下となり、江戸時代にはそのほとんどが大村藩領となった。このうち、出津や黒崎、檜山などでは、佐賀藩領の飛地が局地的に分布し、土地支配のうえでは複雑な様相を呈していた。また、大村藩が長崎警備の一端を担っていたことから、外海側では番所や台場も設置された。平地に乏しい厳しい自然環境を工夫して営んだ生活文化がうかがえる。</p> <p><b>●地方豪族の割拠と山城</b></p> <p>戦国時代に大村氏の支配下となるまでの西彼杵半島の南部地域は、神浦氏や櫛氏、福田氏など地方豪族が割拠し、防衛施設として各地に城塞が築城された。その一つの神浦城は、永和年間(1375～79)に在地領主である大串小次郎丹治俊長(その地名により神浦氏と称した)が築城した。宮尾城・舞岳城・福田城は、文治2年(1186)に鎌倉幕府から生手(老手)・手熊両村の地頭職を安堵された平兼貞(後に福田氏と改称)の一族が築城に関わったとされている。</p> <p>これらの城塞の特徴としては、領地の中の深い入江(港)周辺の標高の高い位置に立地し、城塞から集落と海域を見下ろすことができるものが多く、海と関わりの深い活動を行っていたことがうかがえる。また、近世以降も角力灘沿岸域は海上交通の要所であり、長崎港と日本各地を結ぶ航路の中継地として機能した集落(港)が浦々に点在していた。浦々を結ぶ航路は、戦後に陸上交通が整備されるまで、人や物などを運ぶ主要な道であった。</p> <p>なお、福田は長崎が開港される以前の永禄8年(1565)より、ポルトガル船を受け入れる港として機能した。</p> <p><b>●西彼杵半島の文化的景観や伝統行事</b></p> <p>西彼杵半島には、緩斜面地に開拓された棚田や段々畑、暴風を防ぐ結晶片岩を使った石積みの家屋や石積法面や石積塀のある集落など、過酷な自然条件の中で築き上げられた文化的景観が展開する。海岸線にも、急峻な断層崖地域に、岬と入江が交互に出入りした角力灘海岸部の漁業集落や、琴海の東側は波静かな大村湾、形上湾のリアス式海岸などの特徴的な文化的景観や景勝地が展開している。また、長崎市域で盛んなペーロンや浮立のほか、節分行事「モットモ」など、地域独特の伝統行事もみられる。</p> <p><b>●大村藩の長崎警備</b></p> <p>寛永16年(1639)、幕府はキリスト教の普及を根本から断つため、ポルトガル船の来航を全面的に禁止することを達し、各藩に遠見番所を設置させるなどして、沿岸の警備を強化した。</p> <p>大村藩では寛永13年(1636)、諸藩に先駆けて長崎港内の戸町と外海の福田・三重・神浦・瀬戸・中浦・面高の7箇所に番所を設けていたが、正保元年(1644)には式見・黒崎・池島・松島・江島・平島・崎戸・大島・吹切の9箇所に番所の増設を行い、非常時の長崎市中及び構内の警備を担当した。このほか、非常連絡のための烽火台も設置された。</p> <p>長崎港外の異国船航路の警備は各藩が担当したことから、大村藩には多くの番所や台場が設置された。幕末の日本近海への外国船の多数出沒を受け、嘉永元年(1848)より櫛村への台場設置をはじめとして、同3年(1850)神浦村、三重村、福田村手熊にも台場を設置した。さらに安政2年(1853)には福田浦に田子島台場が築かれた。現在、三重や、福田などの各地区の海岸部には番所跡や台場跡が多く残っている。</p>
関連する主な歴史文化遺産等	<p><b>有形</b></p> <p>中近世遺跡：神浦城跡、神浦氏の墓、宮尾城跡、舞岳城跡、福田城跡、仁田尾供養塔残欠群 等</p> <p>寺社：自証寺、岩屋神社 等</p> <p>番所跡：福田大番所跡、三重番所跡、式見番所跡、神浦番所跡、黒崎番所跡 等</p> <p>台場跡：田子の島台場跡、三重台場跡、式見台場跡、手熊台場跡 等</p> <p>文化的景観：外海の石積集落景観【国選定重要文化的景観】、大中尾の棚田</p>
	<p><b>無形</b></p> <p>西彼杵半島の伝統行事：節分行事(モットモ、手熊・柿泊・福田)、三重くどき踊、盆踊(東檜山・西檜山ほか)、三ツ山浮立、横尾だんじり、戸根浮立、ヒーヒラロ、ペーロン 等</p>
	<p><b>その他</b></p> <p>関連資料所蔵・展示館：外海歴史民俗資料館、長崎市歴史民俗資料館 等</p>



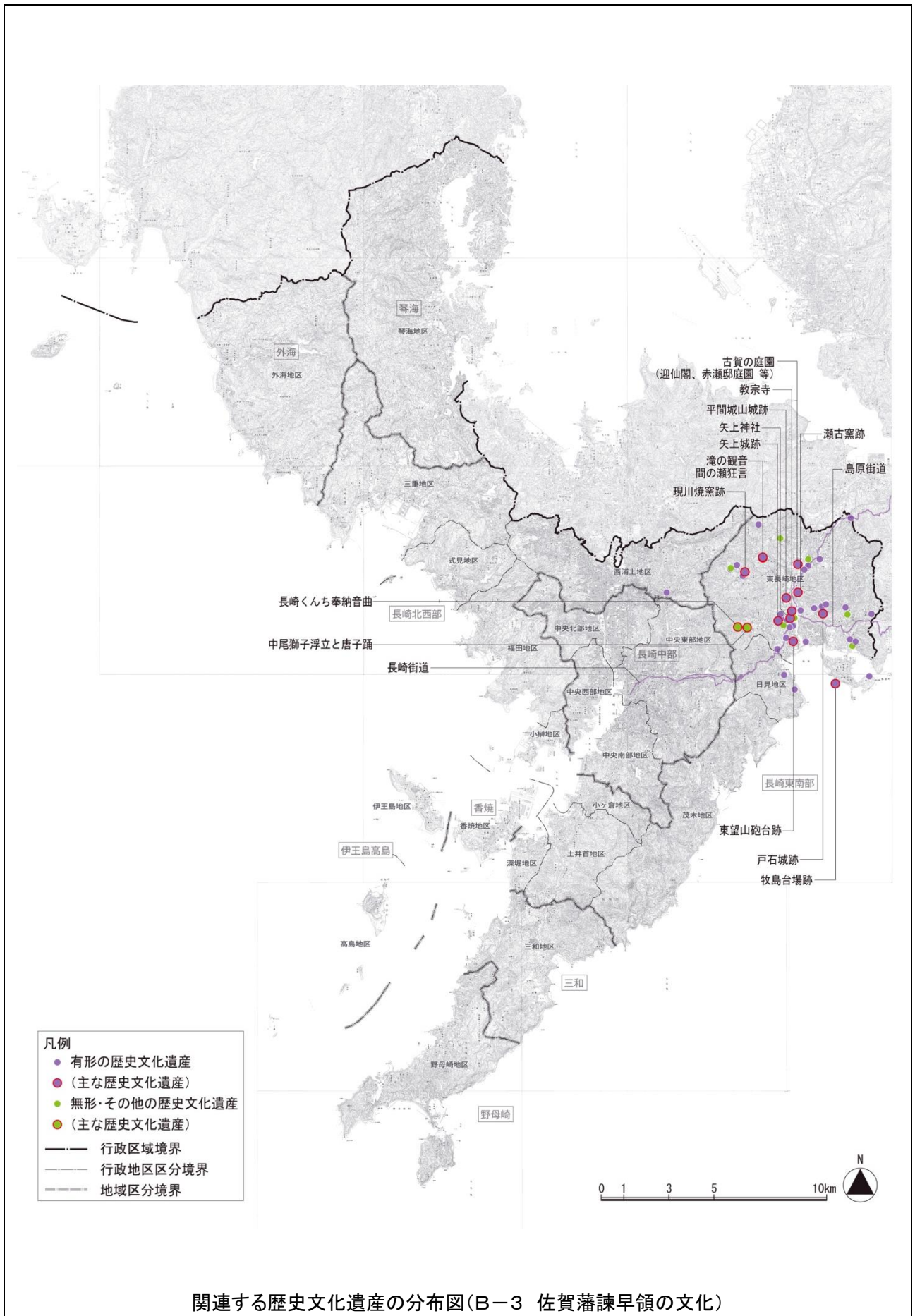
関連する歴史文化遺産の分布図(B-1 大村藩領の文化)

テーマ	B-2 佐賀藩深堀領とその周辺の文化	
概要	<p>長崎港の入り口に位置する深堀は、鎌倉後期に上総国(千葉県)から下向し、やがて長崎半島のほぼ全域を支配するようになった深堀氏が本拠とした。半島各地には深堀氏の支配の下、各々の丘陵地に山城が築かれた。江戸時代には佐賀鍋島藩の支配下に置かれた。中心地の深堀には、中世から続く山城や、菩提寺、墓地等が残るほか、陣屋跡、武家屋敷の面影をとどめる石塀が並ぶ町並みが一部残されている。また、海外との交流の跡を示す唐人町の地名や唐人墓地も所在している。領内香焼地区は近世には鰯網漁が盛んで、防州方面との交流が盛んであった。また、今日においても漁業活動の拠点として典型的な漁業集落が形成されている野母崎、樺島、脇岬などは豊臣秀吉が深堀氏から没収した後、江戸時代には幕府直轄領とされていた。このほか、地質学上貴重な天然記念物が複数分布しており、近年では恐竜化石の発見でも注目を集めている。三方を海に囲まれ、海を主たる生活の舞台とした人々の生活文化が見られる。</p> <p>●中世深堀氏の支配 深堀氏は上総国伊南荘深堀(千葉県いすみ市深堀)を本貫地とする御家人であったが、建長7年(1255)に深堀能仲が備前国彼杵荘戸町浦の地頭職を得て、その数代後、鎌倉後期に深堀の地に移住してきた。その後、建武新政期や室町時代にかけて勢力を強め、戸町氏をはじめとする周囲の在地領主の抵抗を排除し、長崎半島一帯に領土を拡大していった。また、長崎湾周辺の島嶼部や外海地方などにも勢力を延ばし、海上交通や漁場をおさえていた。長崎半島内には、俵石城跡をはじめ各地に高浜城跡などの中世山城が残り、このほか大聖寺の墓碑群などの中世豪族の墓碑なども点在しており、中世における人々の活動の跡を見ることができる。</p> <p>●深堀鍋島家と深堀武家町 深堀家は、18代純賢の時に鍋島氏に臣従して佐賀藩の家老格となり、19代茂賢が鍋島姓を得て佐賀藩家臣深堀鍋島家となった。 深堀鍋島家の当主は深堀村(深堀本村)に陣屋を構えて、佐賀本藩家老の職務と深堀領の支配、そして佐賀藩と福岡藩が担当していた長崎警備の最前線を担っており、主に長崎港口に置かれた台場や遠見番所で警備を行った。陣屋の周りには家臣団が居住し、陣屋を中心とする城下町は武士集団が住民の多くを占めた。また、家臣団には佐賀藩の家風を受けて勉学が奨励され、羽白館(謹申堂)が設けられた。 現在の深堀の町には、佐賀鍋島藩時代の様子を伝える様々な寺社や遺跡等が残るほか、漁業神として漁港などで信仰される「えびす像」が町内各地に残っており、それらを活かしたまちづくりも進められている。</p> <p>●深堀周辺及び島嶼部の文化 深堀周辺の蚊焼地区では、江戸時代に始まったと伝わる伝統工芸の蚊焼鍛冶が現在も引き継がれている。 香焼島や伊王島、高島などの島嶼部では、古くから漁業が盛んに行われていた。特に、香焼島には、弘法大師の伝説が残る香焼山円福寺をはじめ、航海安全祈願の寺院・神社や、防州方面からの来漁者から寄進された石造物などが残り、他地域との交流の跡を偲ぶことができる。西彼杵半島西岸と同じく、長崎港や日本各地を結ぶ航路の中継地が点在し、近世の海上交通面においても重要な地域であった。 このほか、鎖国時代、異国船の出入りを監視する重要な場として遠見番所や台場などが設けられた。</p> <p>●長崎半島域の地質的特性 海蝕崖の険しい海岸線が続く海岸線には、4億8千万年前の地層である変はんれい岩が露出する。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>中近世遺跡：深堀遺跡、俵石城跡、高浜城跡、深堀陣屋跡、武家屋敷塀、深堀神社、菩提寺、深堀鍋島家墓地【市指定史跡】、五官の墓【市指定史跡】等          寺社：深堀神社、菩提寺、円成寺、円福寺等          漁業関連資料：香焼の鰯網関係資料【市指定有形民俗文化財】等          深堀家に関連する絵図・文書等：深堀古絵図、深堀系図証文記、深堀義士関係文書等</p>
無形		<p>郷土芸能・年中行事：野母盆踊り【県指定無形民俗文化財】、平山の大名行列【市指定無形民俗文化財】、ペーロン、円福寺弘法大師大祭等          伝統技術：蚊焼鍛冶</p>
その他		<p>天然記念物：野母崎の変はんれい岩露出地【県指定天然記念物】、川原の円礫浜、川原大池樹林【県指定天然記念物】等          関連資料所蔵・展示館：深堀貝塚遺跡資料館等</p>



関連する歴史文化遺産の分布図(B-2 佐賀藩深堀領とその周辺の文化)

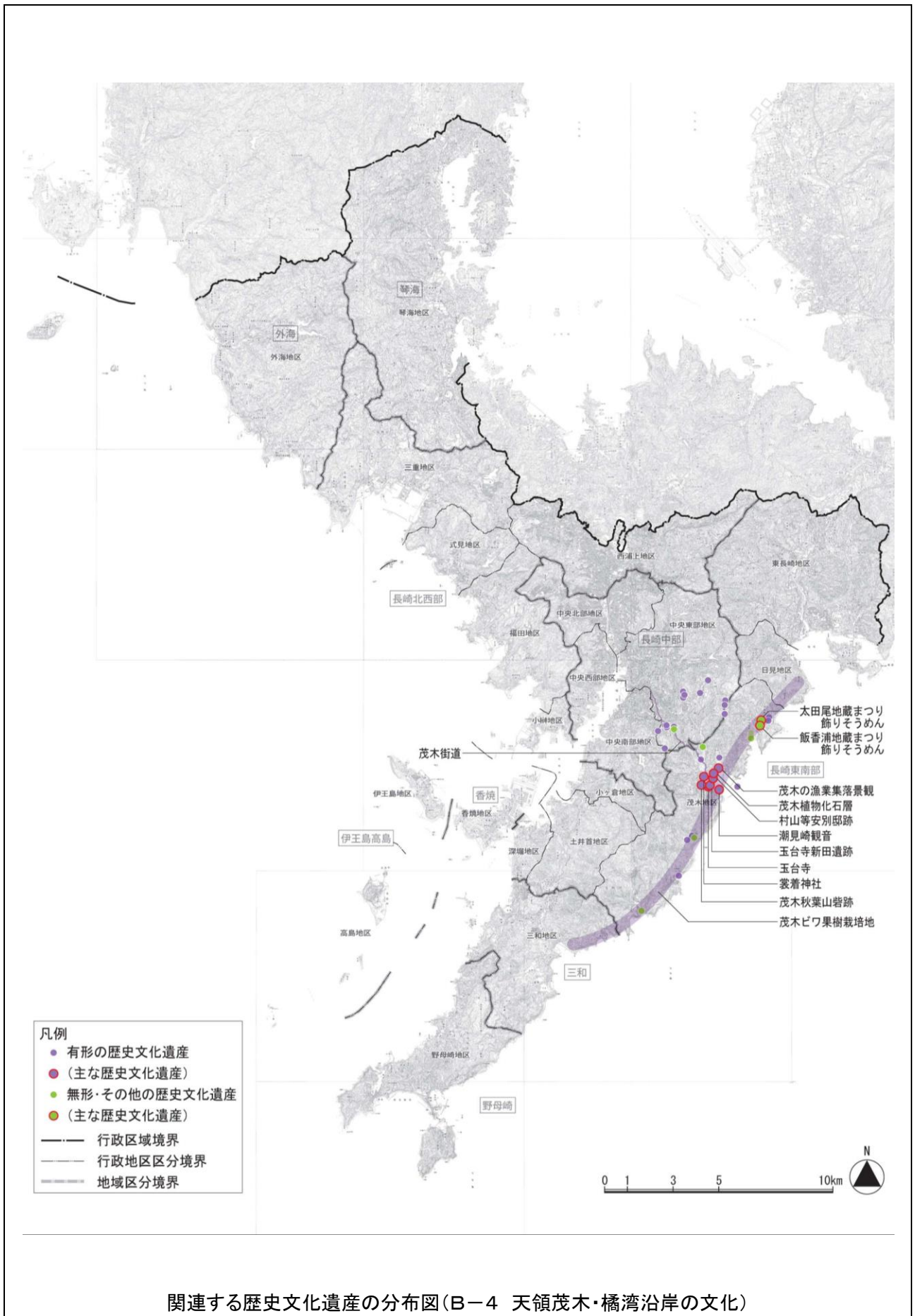
テーマ	B-3 佐賀藩諫早領の文化	
概要	<p>長崎東南部の矢上や戸石は、佐賀藩諫早領に属した。中世においては矢上氏の所領であったが、戦国時代には矢上氏が諫早の西郷氏の家臣となっていたことに由来する。現在の田中町やその周辺には矢上氏が築いた山城跡などが残る。近世には、山間において現川焼や瀬古焼などの陶磁器生産が行われた地区である。また、矢上村に隣接した古賀村は、江戸時代に天領となった後、幕末には大村藩領となった地区である。</p> <p>矢上宿は佐賀藩にとって長崎防備の拠点であり、橘湾側からの外国船侵入に備え、八郎川河口部や牧島に台場が設置されていた。また、伝統芸能としては各地区ごとに個性豊かな「浮立」が伝承されている。</p> <p>●地方豪族の割拠と山城</p> <p>南北朝時代においては矢上氏の所領で、戦国時代には同氏が西郷氏に属していたため、長崎東南部には両氏にまつわる城塞が築城された。矢上氏が城主と考えられている矢上城は、丘陵上に立地した平山城で、14世紀中期から15世紀中期にかけて築城されたと推定され、中国産貿易陶磁器や国産陶磁器、土器、石鍋などが出土している。西郷氏の支城と考えられている戸石城も丘陵上に立地した山城で、眼下には矢上の集落や橘湾を一望できることから、見張り機能を強く有する山城と考えられている。</p> <p>●佐賀藩諫早領の長崎警備</p> <p>佐賀藩が幕府から長崎警備を命じられたことを受け、長崎港に最も近い諫早領はその重要な任を負っていたため、諫早家は長崎街道の重要な宿場町であった矢上村を佐賀藩長崎警備の重要拠点とし、宿場機能を強化するとともに、海岸部に台場等を整備した。</p> <p>異国船の注進は、佐賀領内の遠見番所(御崎村遠見山、高島、伊王島、香焼島の遠見番)から大黒町の佐賀藩屋敷へ知らされ、矢上を通じて早飛脚や早船により佐賀本藩に知らされた。</p> <p>●江戸時代の陶磁器生産</p> <p>元禄4年(1691)に田中宗悦が現川焼(矢上焼)を諫早領矢上村に開窯した。現川焼は鉄分の濃い粘土を素地に刷毛目技法を駆使したことが特徴的で、「西の仁清」「刷毛目文様の極致」と賞賛されたが、寛延元年(1748)頃までのおよそ60年間焼き継がれたが廃窯し、陶器窯の一つである現川焼陶窯跡が県指定史跡となっている。また、現川地区内には、廃窯した現川焼の再興を名目に開窯された瀬古窯跡もあり、こちらは染付磁器を生産した。</p> <p>●佐賀藩諫早領の伝統芸能</p> <p>佐賀藩は浮立が盛んであったことから、長崎東南部には各所に様々な浮立が伝えられてきた。矢上神社の例祭(矢上くんち)で奉納される間の瀬狂言や中尾の獅子浮立などのように県や市の無形民俗文化財に指定されているもののほか、さら浮立、蠣道浮立、田之浦本浮立、船石町木場浮立、馬場本浮立、現川浮立、矢上平野浮立等が地区の伝統芸能として継承されている。また、シャギリについては長崎くんちに欠かすことのできない音曲であり、中尾地区や矢上地区などの東長崎において保存継承されている。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>中近世遺跡：矢上城跡、戸石城跡、平間城山城跡 等</p> <p>寺社：教宗寺、矢上神社 等</p> <p>窯跡：現川焼窯跡【県指定史跡】、瀬古窯跡 等</p> <p>台場跡：東望山砲台跡【市指定史跡】、牧島台場跡 等</p> <p>名勝等：滝の観音【県指定名勝】、古賀の庭園(迎仙閣、赤瀬邸庭園 等)</p>
	無形	<p>伝統芸能：浮立(間の瀬狂言【県指定無形民俗文化財】、中尾獅子浮立と唐子踊【市指定無形民俗文化財】 等)、長崎くんち奉納音曲【県指定無形民俗文化財】 等</p>



関連する歴史文化遺産の分布図(B-3 佐賀藩諫早領の文化)

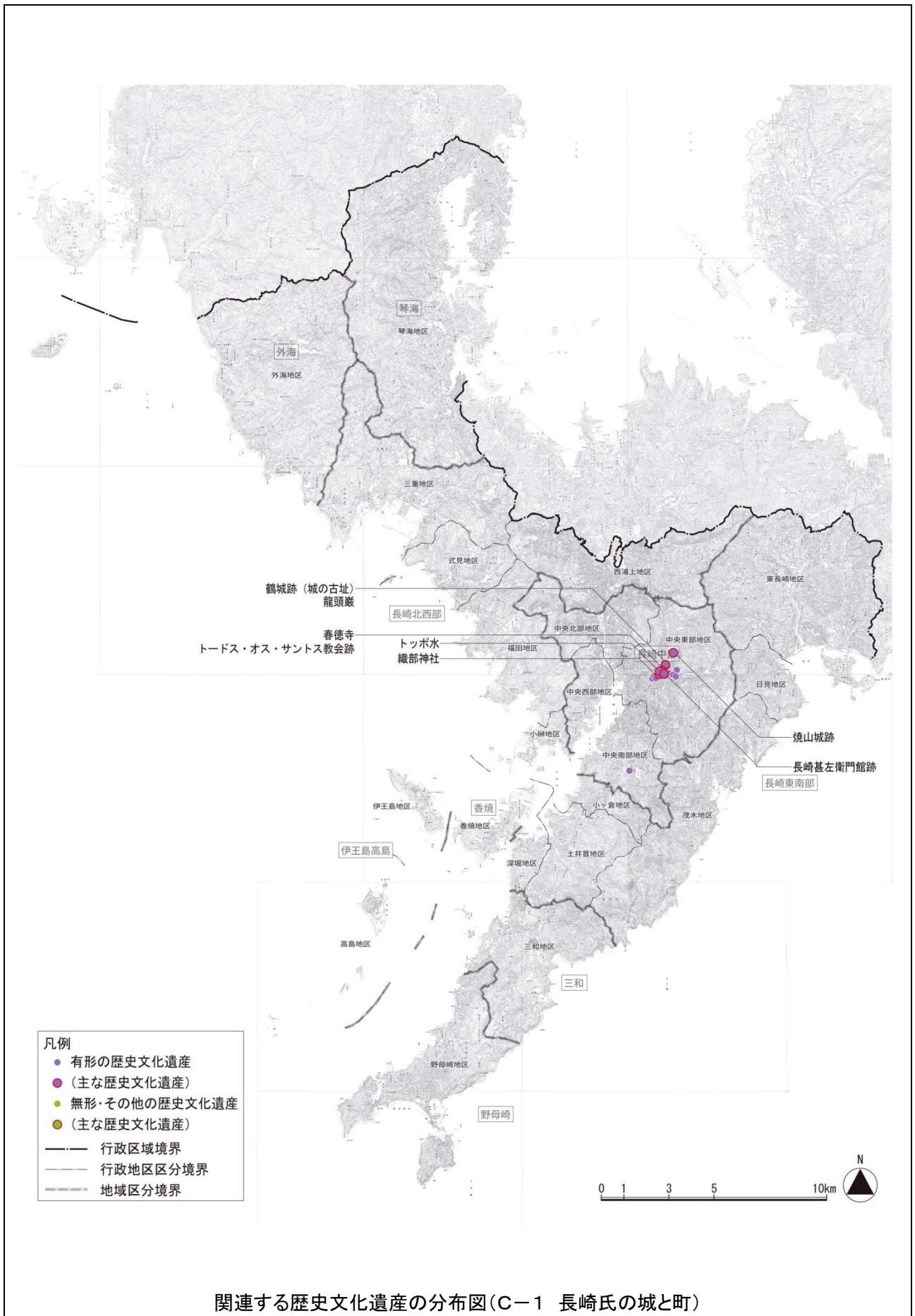
テーマ	B-4 天領茂木・橘湾沿岸の文化	
概要	<p>穏やかな橘湾・天草灘を介した海上交通は古くから盛んであったと見られるが、特に茂木はその拠点であったと考えられ、16世紀末には長崎とともに一時イエズス会領とされた。また、漁業活動の拠点として典型的な漁業集落が見られるほか、傾斜地を利用した茂木ビワ栽培は江戸後期に起源を持つ。近代には温泉地小浜とをつなぐ蒸気船の発着港として賑わったほか、天草方面への玄関口でもある交通の要所である。周辺には、地藏まつり飾りそうめんなどの独特な習俗も伝承されている。地質学上貴重な天然記念物が分布していることも特徴のひとつである。</p> <p><b>●植物化石の産地</b></p> <p>茂木港北部は古くから植物化石の産出で知られており、白岩海岸には県の天然記念物に指定されている茂木植物化石層が露出している。明治12年(1879)10月、スウェーデンの探検船ベガ号が長崎に寄港した際、茂木で隊長のノルデンショルドが植物化石を採集し、本国に持ち帰った。これを地質学・古植物学者ナトホルストによって研究され、我が国の新生代植物化石の最初の記録となった。植物化石から推定される地質時代は、新生代第三紀鮮新世末と考えられており、棚井敏雅博士により再検討された結果、31科40属52種が識別され、ブナが最も豊富であることが判明した。茂木植物化石群の構成は、中部～西部日本の標高300～800mの森林相に相当するものとされている。</p> <p><b>●海上交通と生業</b></p> <p>茂木をはじめ、日見・川原・樺島等の橘湾沿岸の一帯は、寛文8年(1668)に以降再び天領となった地域である。茂木は、長崎から茂木街道で僅か1里半で結ばれ、肥後・薩摩からの船が入港する交通の要であった。長崎における神功皇后にちなむ伝説地のひとつであり、皇后が茂木に上陸する際に裳を着替えたため裳着という地名になったと伝わる。かつて旅館街で栄えた街道沿いや若菜橋の本通り筋には、現在も町家・屋敷・鎧戸のある蔵が建ち並び、歴史的な町並みを形成している。</p> <p>古くから漁業と農業を生業としていた所であり、現在も茂木漁港では豊富な魚種が水揚げされるほか、農業では江戸時代に中国から入ってきたビワの一大生産地として全国的に有名となっており、茂木地区の海岸付近の東向きの斜面一帯にはビワ畑が展開している。</p> <p><b>●特異な伝統行事</b></p> <p>茂木地区の飯香浦町、太田尾町では地藏まつりに特徴的な「飾りそうめん」が供えられる。飯香浦では幔幕<small>まんまく</small>と一對の鎧兜、太田尾では男女一對の人形を太くて長い生そうめんを複雑な手法で編み上げる。江戸中期頃より始まったとみられ、全国的にも珍しい編み上げ技術であり、その伝統は現在も引き継がれている。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>中近世遺跡：茂木秋葉山砦跡、村山等安別邸跡、玉台寺新田遺跡 等</p> <p>寺社：裳着神社、玉台寺、潮見崎観音 等</p> <p>文化的景観：漁業集落景観、茂木ビワ果樹栽培地</p>
	無形	<p>伝統芸能・技術：太田尾・飯香浦の地藏まつり飾りそうめん【市指定無形民俗文化財】、ペーロン、漁撈習俗 等</p> <p>伝説・伝承：神功皇后伝説、草積御前 等</p>
	その他	<p>天然記念物：茂木植物化石層【県指定天然記念物】</p>





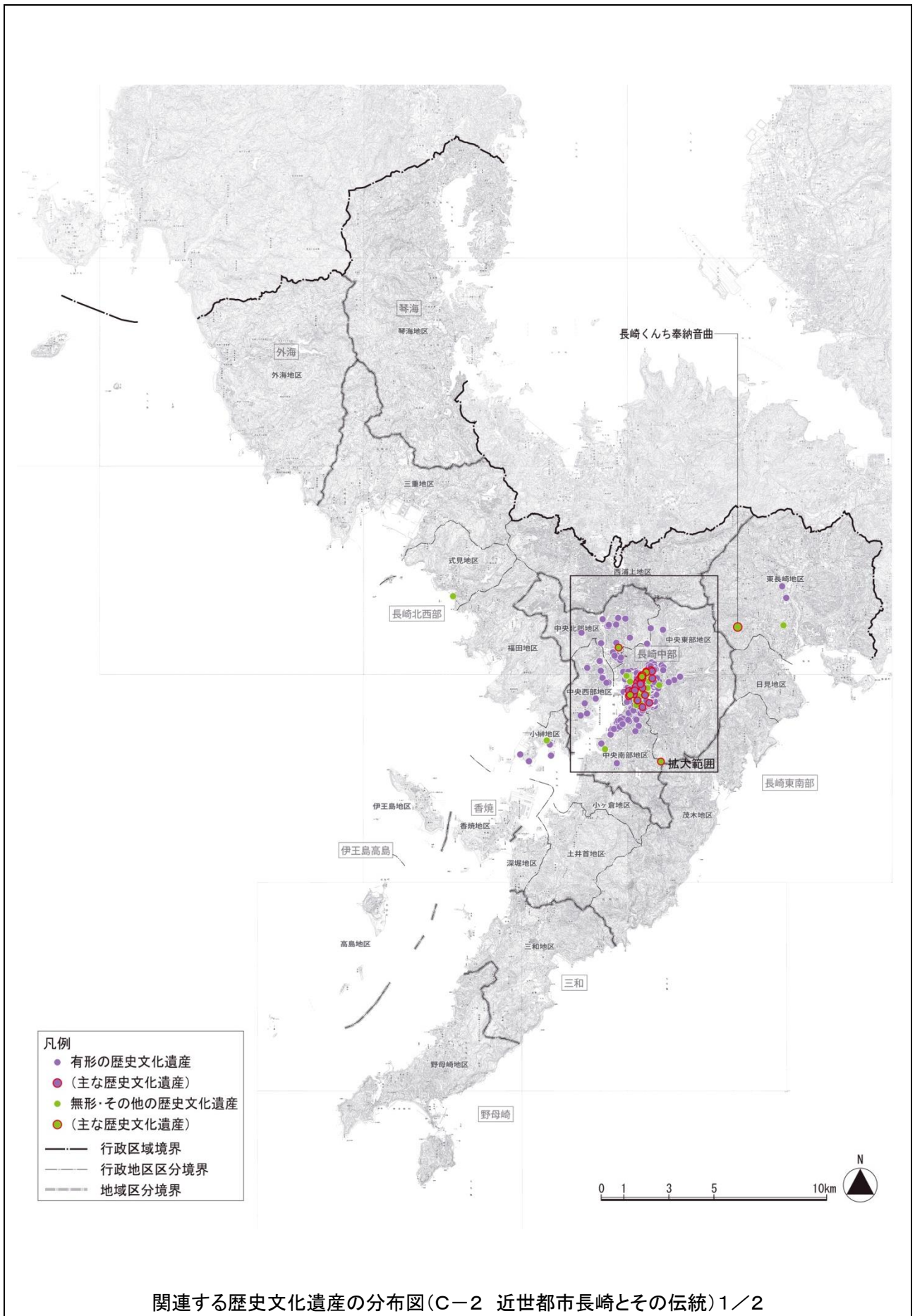
## C 幕府直轄領長崎の都市構造と町人文化

テーマ	C-1 長崎氏の城と町	
概要	<p>鎌倉時代より長崎に割拠した豪族長崎氏の居館と山城、城下とみられる桜馬場、夫婦川、新大工などの一帯は、元亀開港以前の古い長崎を物語る場所である。城の古址は長崎の人々にとっては伝説・伝承の地として知られ、龍頭巖の伝説なども残っている。</p> <p>●長崎氏の城下町</p> <p>春徳寺の裏山は長崎港が眺望できる良好の地であり、長崎純景<sup>ナミカゲ</sup>の居城とされる中世の山城である鶴城跡<sup>ツルギ</sup>や焼山城跡がある。長崎氏は、永崎(長崎)浦と呼ばれていたこの地の根本領主であり、成立は鎌倉初期までさかのぼると考えられている。</p> <p>鶴城跡の麓の桜馬場中学校には長崎氏の居館跡(長崎甚左衛門館跡)があり、ここには鶴城を中心とした城下町が形成されていたとみられる。丘陵部には石積や平場、登城路などが残り、麓には長崎純景の弟・織部亮為英<sup>オリベのすけためひで</sup>を祀る織部神社のほか、大手橋など城に伴う地名が残る。</p> <p>また、フロストの『日本史』によると、城と館の間にあった長崎氏の菩提寺を純景が壊して、永禄 10 年(1567)にトードス・オス・サントス教会と呼ばれる長崎で最初の教会を創建したとされる。教会跡は現在春徳寺となっており、境内には教会時代のものと伝えられる井戸が残る。</p> <p>●伝説・伝承の地、城の古址</p> <p>承応年間(1652～55)に観音堂が開創され、その南西部には岩石に覆われた龍頭巖を中心に明治 14 年(1881)山中に八十八ヶ所の霊場が設けられた。この付近一帯は神聖な場所とされ、龍頭巖の竹女(タンタンタケジョ)や、城の古址から地下を通して湧き出るトッポ水の弘法大師の伝説などの様々な伝説・伝承がある。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>中近世遺跡：鶴城跡(城の古址)、焼山城跡、長崎甚左衛門館跡、トードス・オス・サントス教会跡【県指定史跡】等</p> <p>寺社：春徳寺、織部神社 等</p> <p>伝説・伝承地：龍頭巖、トッポ水 等</p>
	無形	<p>伝説・伝承：竹女(タンタンタケジョ)、龍頭巖、外道井、水源地の神木たん</p>
	その他	<p>人物：長崎純景、ルイス・デ・アルメイダ 等</p> <p>城にちなんだ地名：桜馬場、大手橋 等</p>

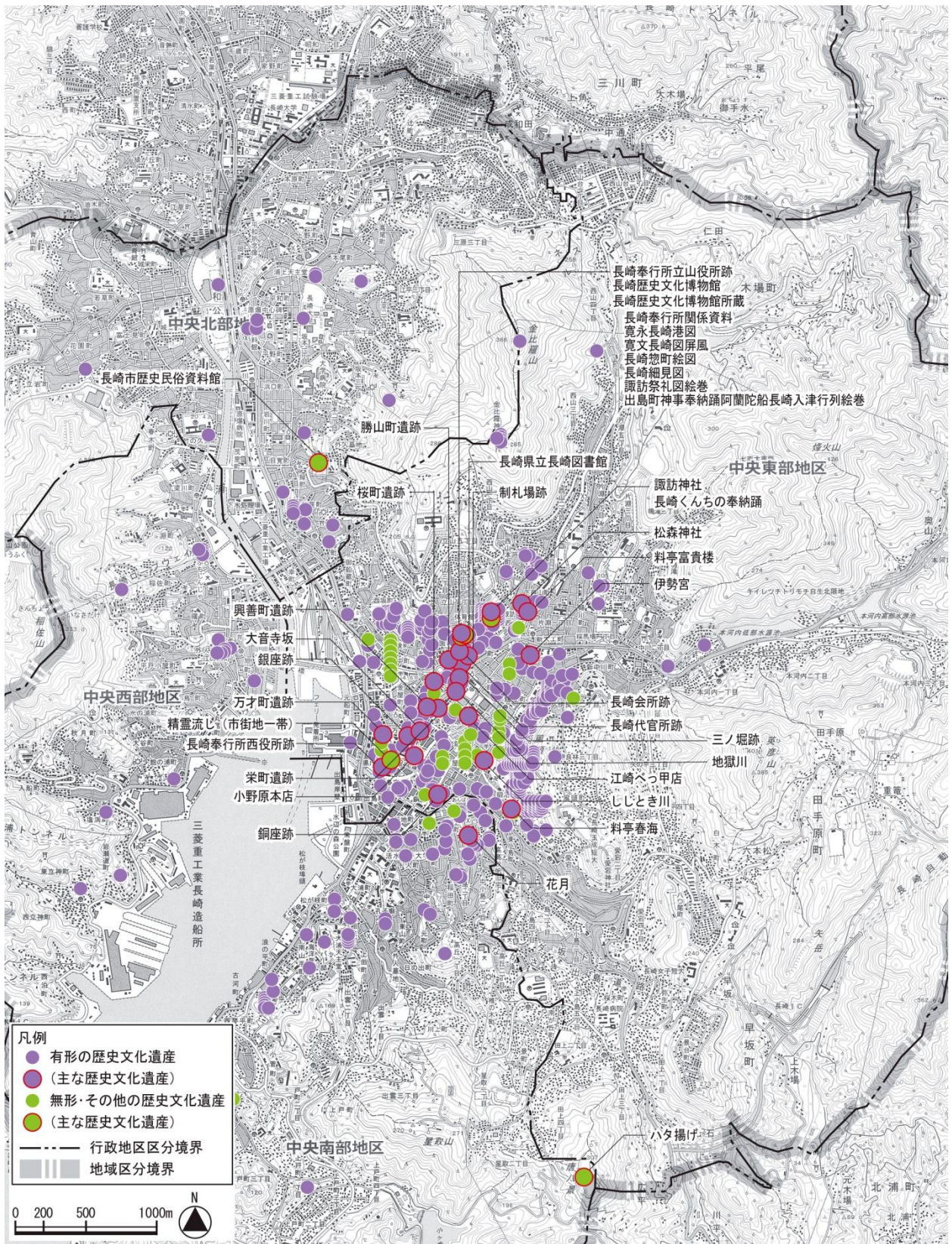


テーマ	<h2 style="text-align: center;">C-2 近世都市長崎とその伝統</h2>
概要	<p>近世長崎は、元龜 2 年(1571)の町建から出発し、貿易の活発化に伴い発展・拡大した。寛文 3 年(1663)の寛文大火を経て都市の概観が形成されたが、その姿は、町割りや道路、水路、石段、石垣など、今日でも各所で見るができるほか、近世遺跡の発掘調査などによって遺構が確認されている。</p> <p>また、奉行直轄地や代官支配地、旧町界町名や住民のコミュニティは、現在も長崎くんちや精霊流しなどの行事の中に残されている。</p> <p><b>●町建と教会領長崎</b></p> <p>元龜 2 年(1571)のポルトガル船入港に合わせて、長崎純景の城下町から南西約 3kmの長崎港に臨む岬の突端近く、現在の江戸町・<sup>まんざいまち</sup>万才町付近に六カ町が形成された。町には各地からキリシタンや商人が集集し、宣教師たちにより町の周囲には防衛のため堀が掘られ、環濠都市が形成された。天正 8 年(1580)に大村純忠がこの長崎の地を茂木とともにイエズス会に寄進し、以降教会領となった。しかし、天正 15 年(1587)に大村純忠が没した後、翌 16 年に豊臣秀吉が長崎を自らの直轄地とし、後の徳川政権も長崎を収公し、長崎純景が治めていた長崎村も含めて天領とした。六カ町の町建当時の様子は、万才町遺跡などの発掘結果により少しずつ明らかになっている。</p> <p><b>●近世都市長崎の形成</b></p> <p>元龜の開港後、中島川沿岸域などの低地も埋立等により整備が行われ、急速に市街地化されていった。長崎は、地租を免除された内町と、それ以外の外町に分けられていた。内町は、天正 16 年(1588)年豊臣秀吉により直轄領となった 10 町で、後に増加して 23 町となった。外町は、寛永 19 年(1642 年)までに市街化した地域で、後に 43 町となった。</p> <p>その後、寛文 3 年(1663)の寛文の大火により当時の長崎の町 66 町のうち 63 町が焼失し、その復興にあたっては、通り筋の拡幅や溝の整備等、防災都市への大改造がなされ、町の負担を公平にするために規模や世帯数を均一化して内町 26 町・外町 54 町の計 80 町に改められた。さらに元禄の大火(元禄 11 年[1698])の後には新地を新たに造成して貿易都市としての充実を図り、文化 4 年(1807)のロシア船入港、同 5 年のフェートン号事件により長崎警備が強化されると、寺社や町人も巻き込んだ警備体制が敷かれた。</p> <p>長崎の近世都市の様子は、江戸時代に描かれた絵図や開発等に伴う発掘調査等により知ることができる。現在の中心市街地の道路や区画は、長崎港湾改良事業により明治期に埋立等により大きく変化した海岸付近を除いて、江戸時代の町割りが継承されている。江戸時代の職業や土地利用にちなんだ町名の一部には、鍛冶屋町・銀屋町等、現在もそのまま使用されているものも多く、長崎くんちや精霊流しなどの中心市街地で行われている祭礼は、江戸時代から継承されているものである。</p> <p>また、中心市街地には江戸時代創業の商業施設や町屋で、近世・近代に建設された和風建造物が現在も残っており、洋風建造物が注目されがちな長崎において、近世から近代の長崎の都市の一面を伝える貴重な存在となっている。</p> <p><b>●長崎奉行と長崎代官</b></p> <p>天正 16 年(1588)に長崎は豊臣秀吉の直轄領となり、文禄元年(1592)より奉行が置かれ、徳川幕府開幕後も引き継がれ、幕末にいたった。長崎奉行の役割は、長崎の市政全般の他、キリシタン対策、異国船警備の指揮、貿易統制の諸政策の監督と実施が主なものであった。</p> <p>長崎奉行所は、当初、本博多町(万才町)に置かれたが、寛永 10 年(1633)長崎奉行が 2 人制になったため、敷地を 2 つに分け、東役所と西役所とした。寛文の大火の後は、火災を考慮して分散させ、長崎港や出島の管理に重要な場所となる現在長崎県庁が位置する場所に西役所を、諏訪神社が鎮座する諏訪社を背負う立山に立山役所を配した。立山役所跡に建つ長崎歴史文化博物館には、発掘調査結果や江戸時代の絵図等に基づき、立山役所が復元展示されている。</p>

<p style="text-align: center;">概要</p>	<p>長崎代官は、長崎奉行の支配であった長崎 80 町以外の直轄領である、長崎村、浦上山里村、浦上淵村と、長崎周辺の茂木村、野母村、高浜村、川原村、樺島村、日見村、古賀村を管轄した。代官屋敷は、サント・ドミンゴ教会のあった勝山町（現在の桜町小学校）に置かれ、発掘調査により建物跡や井戸などの遺構が発見されている。</p> <p>● 諏訪神社と長崎くんちの文化</p> <p>諏訪神社は、寛永 2 年(1625)に諏訪、森崎、住吉の三神を合祀して円山と呼ばれた現在の松森神社の地に創建し、慶安元年(1648)に現在地に遷宮した。諏訪神社は、伊勢宮と松森神社と合わせて長崎三社と称される。</p> <p>諏訪神社の秋季例大祭を長崎くんちと呼んでいる。長崎くんちは、寛永 11 年(1634)に 9 月 7 日、9 日を諏訪、住吉二神の祭日とし、神輿の渡御(お下り)が行われ、この時、渡御に先だつて丸山町の遊女・高尾と音羽が小舞を奉納したとされ、これが長崎くんちのはじまりと言われている。</p> <p>長崎くんちでは、七年に一度当番となる踊町が、その町のシンボルでもある巨大な傘鉾を先頭にして境内に進み、様々な出し物(演物)を神前に奉納する。奉納される出し物は、「長崎くんちの奉納踊」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。主な奉納踊りのひとつである「龍踊」は、唐人屋敷の中国人から伝えられたものとされ、また、「太鼓山(コッコデシヨ)」はだんじりを起源としていると考えられるなど、内外の伝統芸能の影響により成立したものが多く見受けられる。傘鉾などの装飾には、長崎刺繍やビードロ細工といった海外よりもたらされた技術を起源とする伝統工芸が用いられるなど、国際色豊かな祭事となっている。奉納踊りは、小屋入りや庭見せなど 10 月 7 日から 9 日の本番に向けての年間スケジュールがあり、今日においても踏襲されており、くんち本番前に仕上がり具合を披露する踊町人数揃の後はくんち料理による祝宴を設ける。また、お上りやお下りで神輿担ぎを担当する神輿守町は、長崎村の各郷の年番により行われ、現在まで継続されている。踊町や神輿守町などには、江戸時代から続く地域コミュニティを今日においても見ることができる。</p>
<p style="text-align: center;">関連する主な歴史文化遺産等</p>	<p><b>有形</b></p> <p>近世遺跡：万才町遺跡、興善町遺跡、桜町遺跡、勝山町遺跡、栄町遺跡 等</p> <p>都市基盤関連：三ノ堀跡、しとき川、地獄川、大音寺坂 等</p> <p>和風建造物・町家等：花月【県指定史跡】、料亭富貴楼、小野原本店、江崎べつ甲店、料亭春海【以上国登録有形文化財】 等</p> <p>行政関連施設等：長崎奉行所跡(西役所跡、立山役所跡)、長崎代官所跡、町年寄宅跡(高木家、高島家、後藤家 等)、長崎会所跡、銅座跡、銀座跡、制札場跡 等</p> <p>神社関連：諏訪神社、伊勢宮、松森神社 等</p> <p>古絵図：寛永長崎港図(1898 年模写本)、寛文長崎図屏風、長崎惣町絵図、長崎細見図 等</p> <p>文書等：長崎旧記類、長崎奉行所関係資料【重要文化財】 等</p> <p>長崎くんちに関連する美術工芸品：鉾(魚の町の傘鉾、諏訪町傘鉾垂及び下絵、万屋町傘鉾垂一式【以上市指定有形文化財】 等)、くんちを描いた絵画(諏訪祭礼図絵巻、出島町神事奉納踊阿蘭陀船長崎入津行列絵巻〔甲斐宗平〕 等) 等</p> <p><b>無形</b></p> <p>伝統行事：長崎くんち、精霊流し、ハタあげ 等</p> <p>長崎くんちに関連する伝統文化：長崎くんちの奉納踊り 等(長崎くんちの奉納踊【国指定重要無形民俗文化財】、長崎くんち奉納音曲【県指定無形民俗文化財】)、傘鉾などの装飾技術(長崎刺繍、ビードロ細工)、くんち料理 等</p> <p><b>その他</b></p> <p>近世都市長崎の成立に関連する人物：大村純忠、長崎奉行(小笠原一庵、長谷川家 等)、長崎代官(村山等安、末次家、高木作右衛門家)、町年寄(高木了可、後藤宗印、村山二郎八、町田宗賀、高島良悦 等) 等</p> <p>江戸時代から残る町界町名：寄合町、丸山町、船大工町、油屋町、麴屋町、桶屋町、八百屋町 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館：長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館、長崎市歴史民俗資料館 等</p>



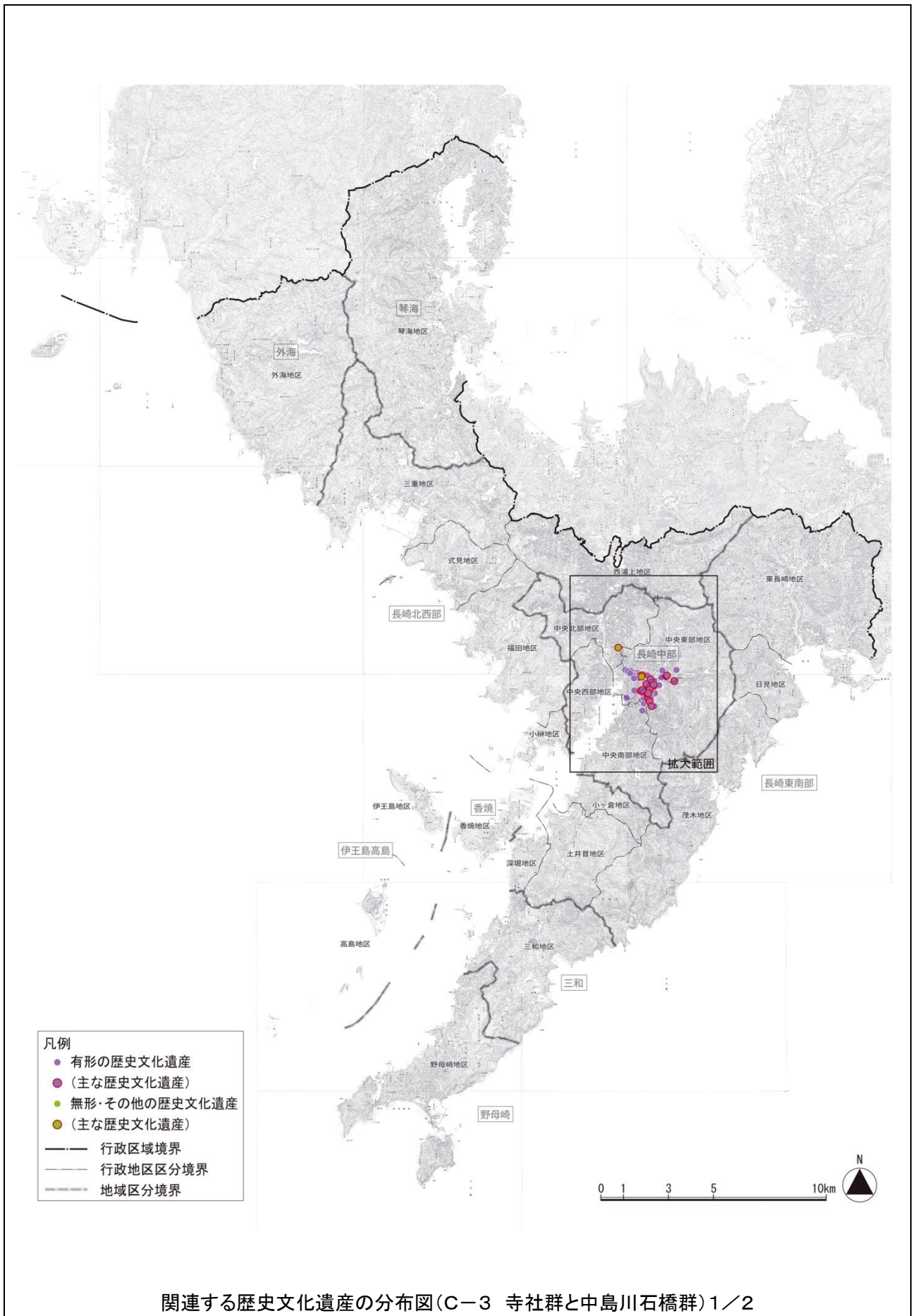
関連する歴史文化遺産の分布図(C-2 近世都市長崎とその伝統)1/2



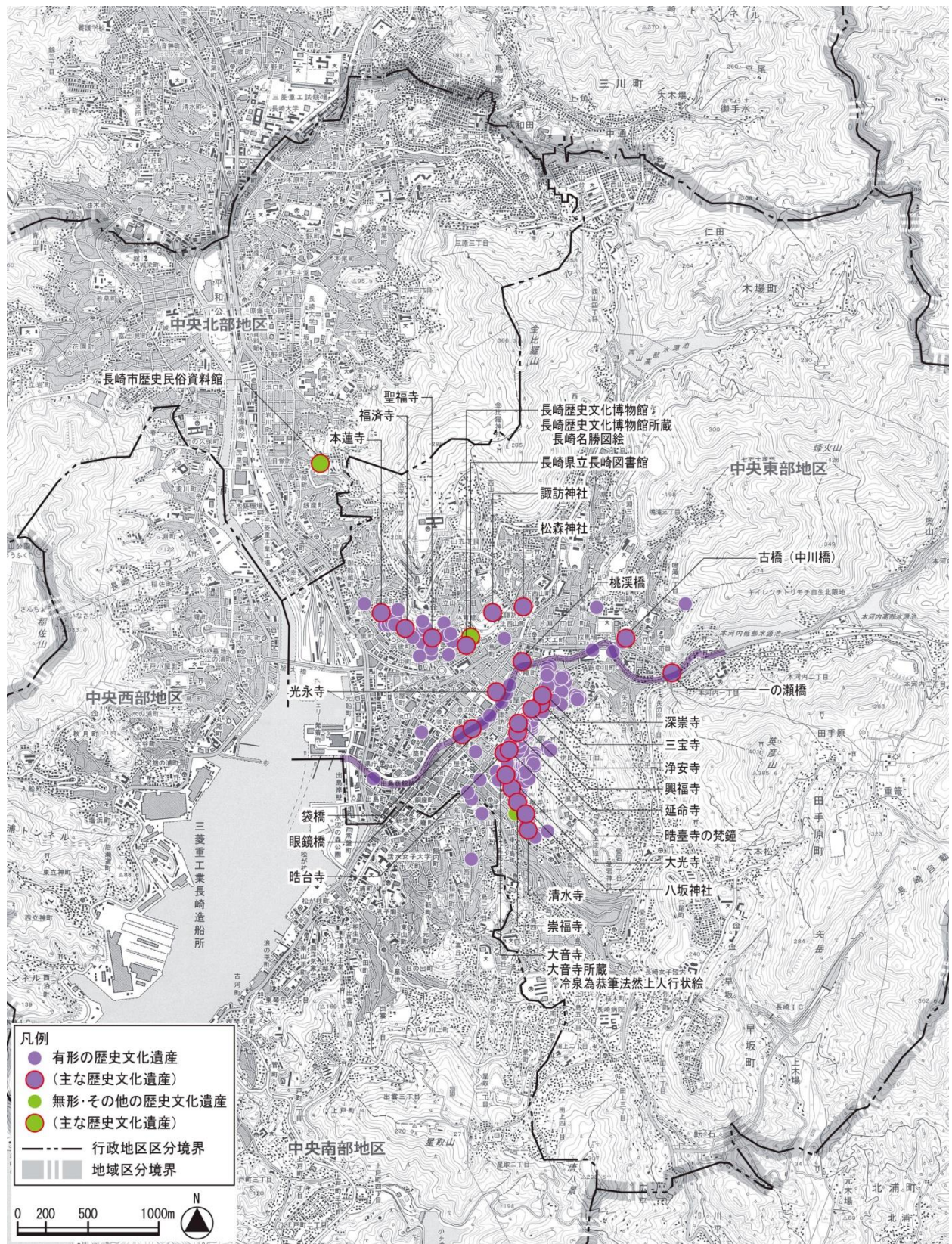
関連する歴史文化遺産の分布図(C-2 近世都市長崎とその伝統)2/2

テーマ	C-3 寺社群と中島川石橋群
概要	<p>徳川家康のキリシタン禁令に伴うキリシタン対策の一環として、慶長 19 年(1614)頃から寺社の創建が助成され、三大寺院(皓台寺、大音寺、本蓮寺)をはじめ、寛延 3 年(1750)までに 66 カ寺が創建された。寺社の立地は、周辺山麓地が選ばれ、寺町、鍛冶屋町、玉園町、上町に多くの寺社が所在している。</p> <p>市の中心部を流れる中島川は、元亀 2 年(1571)の町建以降に護岸が整えられ、町の発展とともに木橋や石橋が架けられた。その多くは昭和 57 年(1982)の長崎大水害で流されたが、日本最古の石造りアーチ橋である眼鏡橋等が現在も残る。</p> <p><b>●長崎のまちを取り囲む山麓の寺社群</b></p> <p>慶長 18 年(1613)に布告されたキリシタン禁令を受けて、長崎の教会が破却されていた中、長崎五人僧と呼ばれた道智、伝誉、亀翁、慶西、慶了の 5 人が長崎での布教を開始していた。これら 5 人の僧たちはキリシタンの激しい妨害等の中、布教活動を行っていたが、江戸幕府や長崎奉行の要人らの援助を受け、道智は慶長 9 年(1604)に正覚寺を、亀翁は同 13 年(1608)に洪泰寺(後の皓台寺)、伝誉、慶西、慶了は同 19 年(1614)に大音寺、光永寺、大光寺をそれぞれ創建した。以後、寛延 3 年(1750)までの約 150 年間に 66 カ寺もの寺院が創建され、統廃合を経て現在も 32 カ寺が残っている。</p> <p>寺院は、もともと南側の風頭山麓と北側の茶臼山山麓に創建されたものが多かったが、寛永期以降の長崎奉行所を中心とした都市づくりにより、万治年間(1658～61)までには市中に散在していた寺院も両山麓に移転され、さらに周辺山麓地に寺社が建ち並ぶこととなった。</p> <p>これらの歴史ある寺社には、歴史に係る文書や古絵図が残っており、長崎奉行や代官家、町年寄、唐通事、阿蘭陀通詞などの長崎の歴史に深くかかわる人物や家系の墓地が寺院の後山に所在している。</p> <p><b>●中島川石橋群と長崎の橋梁</b></p> <p>長崎開港後、長崎の町は発展に伴い埋め立てが進み、中島川もほぼ今日の流路に整備された。これに伴い、各所に木橋が架けられたが、寛永 11 年(1634)に興福寺 2 代住職の黙子如定により、石造アーチ橋が架けられた。これ以降元禄 12 年(1699)にかけて、中国人や日本人豪商による寄進等で多くの石造アーチ橋が構築された。</p> <p>その後、明治元年(1868)には、日本初の鉄橋である鉄橋が架けられ、また、明治 36 年(1903)3 月には、日本初の鉄筋コンクリート橋である本河内低部ダム放水路橋梁が架橋されるなど、長崎は橋梁の先進地であった。</p> <p>昭和 57 年(1982)の長崎大水害により、中島川の石造アーチ橋 14 橋のうち眼鏡橋、袋橋、桃溪橋などを残し、6 橋が流失した。なお、流失した石橋は、昭和 61 年(1986)昭和の石橋として新たに架橋されている。</p>
関連する主な歴史文化遺産等	<p><b>有形</b></p> <p>寺社：風頭・立山山麓の寺社群(大音寺、皓台寺、興福寺、崇福寺、光永寺、大光寺、深崇寺、延命寺、三宝寺、浄安寺、清水寺、八坂神社、聖福寺、福濟寺、本蓮寺、諏訪神社、松森神社 等)</p> <p>墓地：寺町後山墓地、立山後山墓地</p> <p>寺社に関連する古絵図：長崎名勝図絵、冷泉為恭筆法然上人行状絵(大音寺)【県指定有形文化財】等</p> <p>関連資料・工芸品：皓臺寺の梵鐘【市指定有形文化財】等</p> <p>石橋：眼鏡橋【重要文化財】、桃溪橋【市指定有形文化財】、袋橋【市指定有形文化財】、古橋(中川橋)【市指定有形文化財】、一の瀬橋【市指定史跡】</p> <p><b>その他</b></p> <p>寺社・石橋架橋に関連する人物：長崎五人僧(道智、伝誉、亀翁、慶西、慶了)、長崎奉行(長谷川権六 等)、黙子如定 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館：長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館、長崎市歴史民俗資料館 等</p>





関連する歴史文化遺産の分布図(C-3 寺社群と中島川石橋群) 1/2

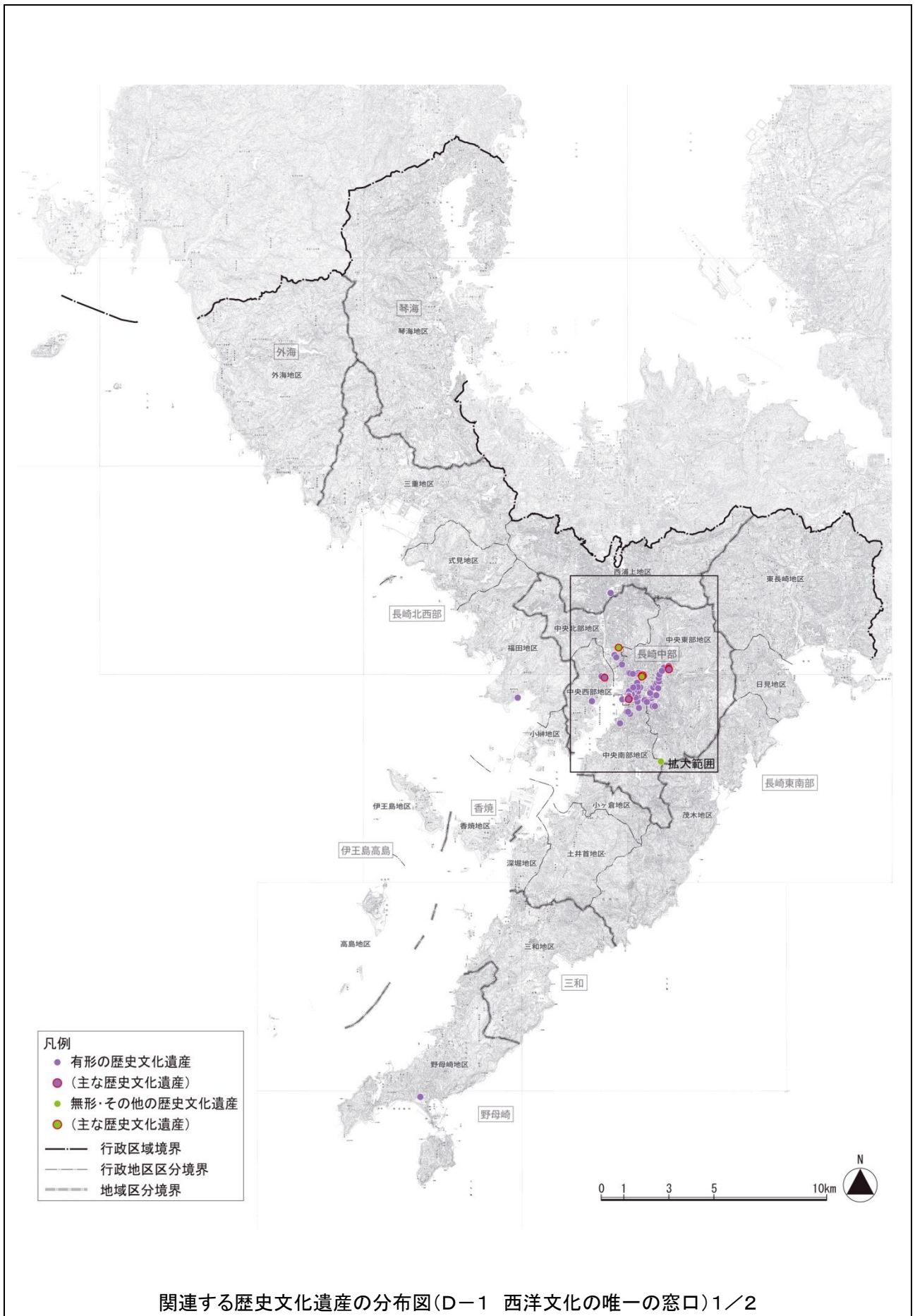


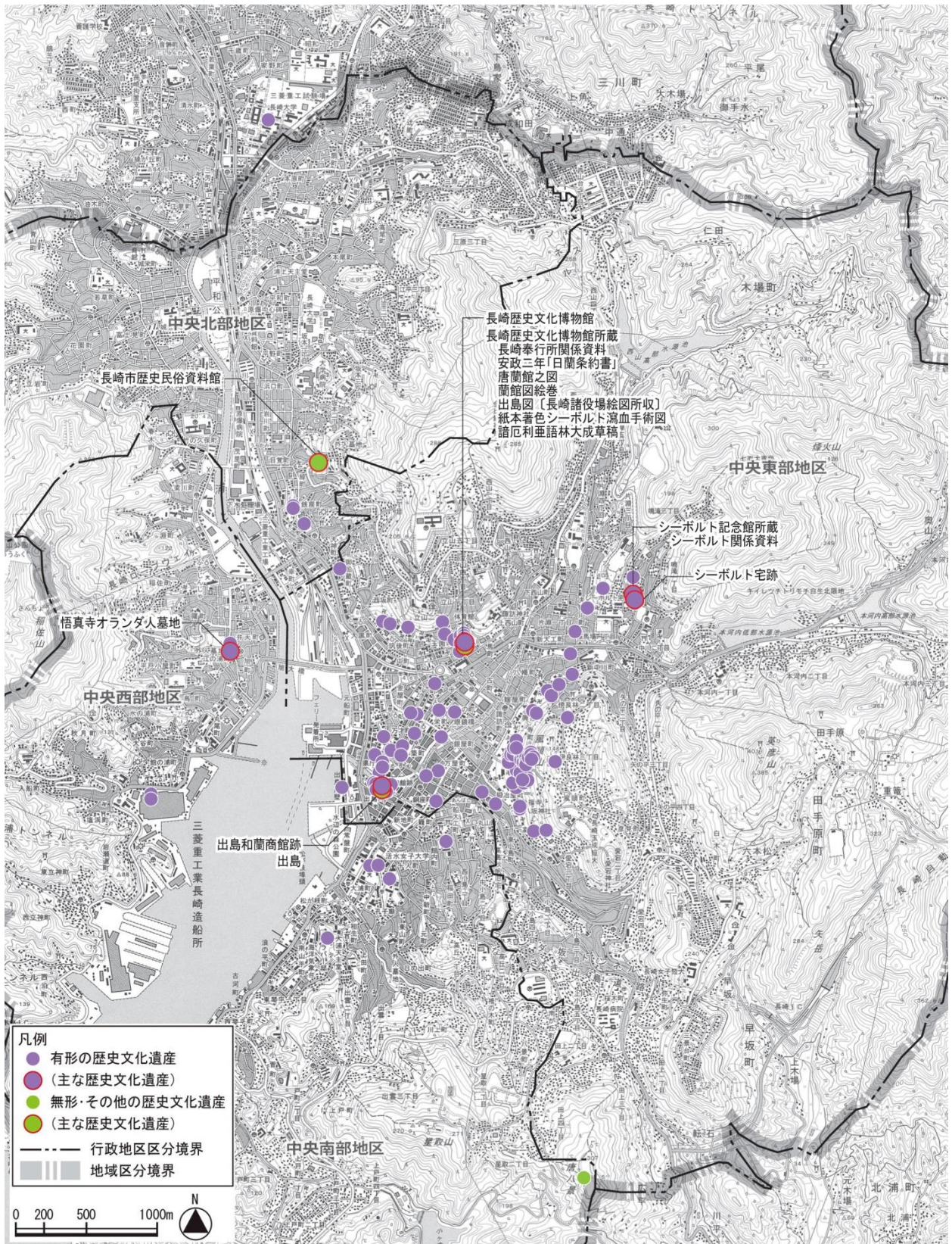
関連する歴史文化遺産の分布図(C-3 寺社群と中島川石橋群) 2/2

## D みなと長崎—海外との窓口

テーマ	D-1 西洋文化の唯一の窓口
概要	<p>元亀 2 年(1571)、ポルトガル船来航を契機に南蛮貿易港としてスタートした長崎は、ポルトガル・スペインとの貿易の拠点として、また朱印船貿易の基地として、海外に開かれた窓口の役割を果たした。南蛮貿易によりヨーロッパやアジア各地から様々な文物が渡来したが、キリスト教の禁止とともに南蛮貿易は制限されていた。出島は、江戸幕府が来船ポルトガル人を居住させるために寛永 13 年(1636)に完成した人工島であり、寛永 16 年(1639)のポルトガル人渡航禁止後、寛永 18 年(1641)平戸のオランダ商館をここに移した。以来、安政の開国まで約 220 年間、この地を通じて日本とヨーロッパを結ぶ経済・文化の交流が行われた。日本の近代化に果たした功績は大きい。</p> <p><b>●出島の築造</b></p> <p>元亀 2 年(1571)にポルトガル船が寄港して以来、長崎は南蛮貿易の中心地として機能していた。南蛮貿易での主たる輸入品は生糸や絹織物、硝石などであったが、このほか、カボチャやスイカ、ジャガイモ、カステラ、タバコ、眼鏡などももたらされ新しい文化が伝えられた。また、キリスト教の布教とともにヨーロッパの思想や学問、西洋画の技術などももたらされた。長崎は、まさにその窓口であった。慶長 17 年(1612)から始まった徳川幕府による禁教政策以後も、南蛮貿易は継続して行われたが、元和 2 年(1616)、中国船以外の船の入港は長崎・平戸に限定され、寛永元年(1624)にはスペインとの国交を断絶し来航が禁止された。その後、日本人の海外渡航や海外の日本人の帰国を禁ずるなど、海外交易が制限されていき、寛永 11 年(1634)には来航ポルトガル人を収容するため、長崎の有力町人 25 人の出資によって、中島川の河口部に出島の築造が開始された。寛永 13 年(1636)、出島が完成し、それまで市中に住んでいたポルトガル人は出島に収容された。しかし、翌年に起こった島原・天草一揆の後、寛永 16 年(1639)ポルトガル船の来航禁止とポルトガル人の国外退去が命じられ、出島は完成後わずか 3 年ほどで空き家になってしまった。</p> <p><b>●オランダ貿易</b></p> <p>オランダ商館が出島に移される前の取引は特定の商人団を介して行われていたが、出島への商館移転に伴い、輸入取扱商人と輸出取扱商人の分離が進み、元禄 11 年(1698)に長崎会所が創設され、貿易の官営化が図られた。</p> <p>オランダ貿易では、生糸を中心にペルシアやインド産の木綿製品や羅紗などヨーロッパ原産の毛織物類が輸入された。江戸中期以降は砂糖が主要な輸入品であった。その他、壁装材の金唐皮、ビードロやギヤマンと呼ばれたガラス製品、ヨーロッパで焼かれた陶磁器、薬種、染料として使用する蘇木、鮫皮、錫、鉛など、様々なものが輸入された。</p> <p>日本からの輸出品としては、江戸初期の主要品は銀だったが、海外への大量の銀流出を問題とした幕府はこれを制限し、その後は金を輸出、17 世紀後半から銅の輸出をすすめ、以後、幕末まで銅が輸出品の主力となった。このほか、樟脳、陶磁器、漆製品、しょうゆや酒といった樽物なども輸出された。</p> <p><b>●出島オランダ商館</b></p> <p>幕府は、ポルトガル船の来航禁止後、寛永 18 年(1641)平戸のオランダ商館を出島に移し、オランダとの交易拠点と定めた。以降、安政の開国までの間、この島を窓口として、世界各国の様々な貿易品が輸入され、西洋の学問や技術、文化が伝えられ、日本の近代化に大きな役割を果たした。さらに、日本国内の産物も海外に輸出され、鎖国下にあった日本を海外に知らしめる役割を担った。</p> <p>商館員は、商館長、次席商館員、荷倉役、簿記役、筆者、医師、調理師、大工などで構成されていた。特に商館医には出島の三学者と称されるケンペル、ツェンベリー、シーボルト等、日蘭の学術、文化史上において多大な貢献をした人物がいる。</p> <p>出島は、長崎奉行の管轄で、町年寄の支配下に置かれた。出島に関連する地役人は、町役人や阿蘭陀通詞、出島番で構成され、その他、絵画や学術書の御禁制品の有無を調べる唐絵目利や、オランダ商館員の日用品を調達したコンプラドール(仲買人)、出島出入医師、出島出入絵師などが挙げられる。これらの役の多くは、世襲制とされ代々引き継がれた。</p>

概要	<p>安政の開国後、出島は居留地に編入され、外国商人の商館や倉庫、教会、神学校に建て替えられた。また、波止場や遊歩道の築造、港湾改良工事と中島川変流工事により明治37年(1904)には扇川の形状が完全に失われた。戦後は居留地時代の洋館等がわずかに残っている程度であったため、駐日オランダ大使館の働きかけなどもあり、復元が望まれていた。長崎市では昭和26年(1951)に整備計画に着手し、平成8年(1996)から本格的な復元整備事業を実施しており、現在の復元に向けた調査や整備が進められている。</p> <p>●阿蘭陀通詞 寛永18年(1641)のオランダ商館の出島移転とともに、商館での通訳のために阿蘭陀通詞が新設された。阿蘭陀通詞は世襲制で、その数は40家程度であったが、なかでも石橋、西、吉雄、榎林、馬田、名村、茂、中山、加福、横山、志筑、今村、本木などは名門通詞の家柄であった。阿蘭陀通詞は通訳業務を通じてヨーロッパからもたらされた新しい文化や技術と接する機会があったため、様々な分野で活躍しており、特に西洋医学や外国語の辞書類の編纂に関わり、日本の近代化に大いに貢献した。</p> <p>●オランダ人墓地 当初、オランダ人は陸上への埋葬が禁止されていたが、商館長らの請願により慶安2年(1649)以降は陸上での埋葬が許可された。出島の対岸にあたる稲佐の悟真寺後山の一角にオランダ人墓地がある。悟真寺は慶長3年(1598)に創建された浄土宗の寺院であるが、安永7年(1778)に来航した商館長ヘンドリック・デュルコープの墓碑をはじめ、1840年から60年代に死亡したオランダ船の船長及び水夫を中心に18基の墓碑が確認されている。</p> <p>●出島を通じた文化交流 オランダとの貿易を通じて長崎にもたらされた様々な西洋の文化は当時の長崎の人々に影響を与えた。芸術分野では、オランダを通してもたらされた西洋絵画の影響により、日本絵画にも遠近法的技法などが取り入れられ、洋風画が発展した。</p> <p>●蘭学(洋学) 「蘭学」は、江戸時代にオランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学術・文化・技術の総称である。幕末の開国以後は世界各国と外交関係を築いたため、「洋学」の名称が一般的になった。医学をはじめ、語学、薬学、化学、天文学、測量術などが挙げられる。 蘭学の先駆者としては、天文地理学者としても知られる町人学者の西川如見があげられる。また、蘭学の興隆は、阿蘭陀通詞が大きく関わった。オランダ商館医師のケンペルの下でオランダ語や西洋の諸学術を学んだ今村英生や、日本に初めてコペルニクス説を紹介した本木良永、紅毛流医師でもあった吉雄耕牛などがいる。また、当時、最新のヨーロッパの学問を勉強するため、多くの人たちが長崎に来たが、そのほとんどが阿蘭陀通詞の家に寄宿、まず、オランダ語を学んだ。</p>
	<p>関連する主な歴史文化遺産等</p> <p>有形</p> <p>関連遺跡：出島和蘭商館跡【国指定史跡】、シーボルト宅跡【国指定史跡】、悟真寺オランダ人墓地、各阿蘭陀通詞等宅跡・墓地 等</p> <p>美術工芸品・歴史資料：長崎奉行所関係資料【重要文化財】、安政二年「日蘭条約書」【重要文化財】、唐蘭館之図【川原慶賀】【国認定重要美術品】、蘭館図絵巻【石崎融思】、出島図【長崎諸役場絵図所収】等、長崎版画、青貝細工 等</p> <p>蘭学関連資料：シーボルト関係資料【重要文化財】、紙本著色シーボルト瀉血手術図【国認定重要美術品】、ドーフ・ハルマ、諸厄利亞語林大成草稿【本木正栄他訳編】 等</p> <p>無形</p> <p>西洋から持込まれた食文化：コーヒー、ジン 等</p> <p>その他</p> <p>外国人：商館長(ザハリアス・ワーヘナー、イサーク・ティツイング、ヘンドリック・ドーフ、ヤン・コック・ブロンホフ、ドンケル・クルチウス 等)、商館医(エンゲルベルト・ケンペル、カール・ツェンベリー、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト 等) 等</p> <p>日本人：阿蘭陀通詞(今村英生、本木良永、吉雄耕牛、志筑忠雄、馬場佐十郎、西玄甫、本木良意、榎林鎮山 等)、西川如見、榎林宗建、川原慶賀 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館：出島、長崎歴史文化博物館、長崎市歴史民俗資料館 等</p>



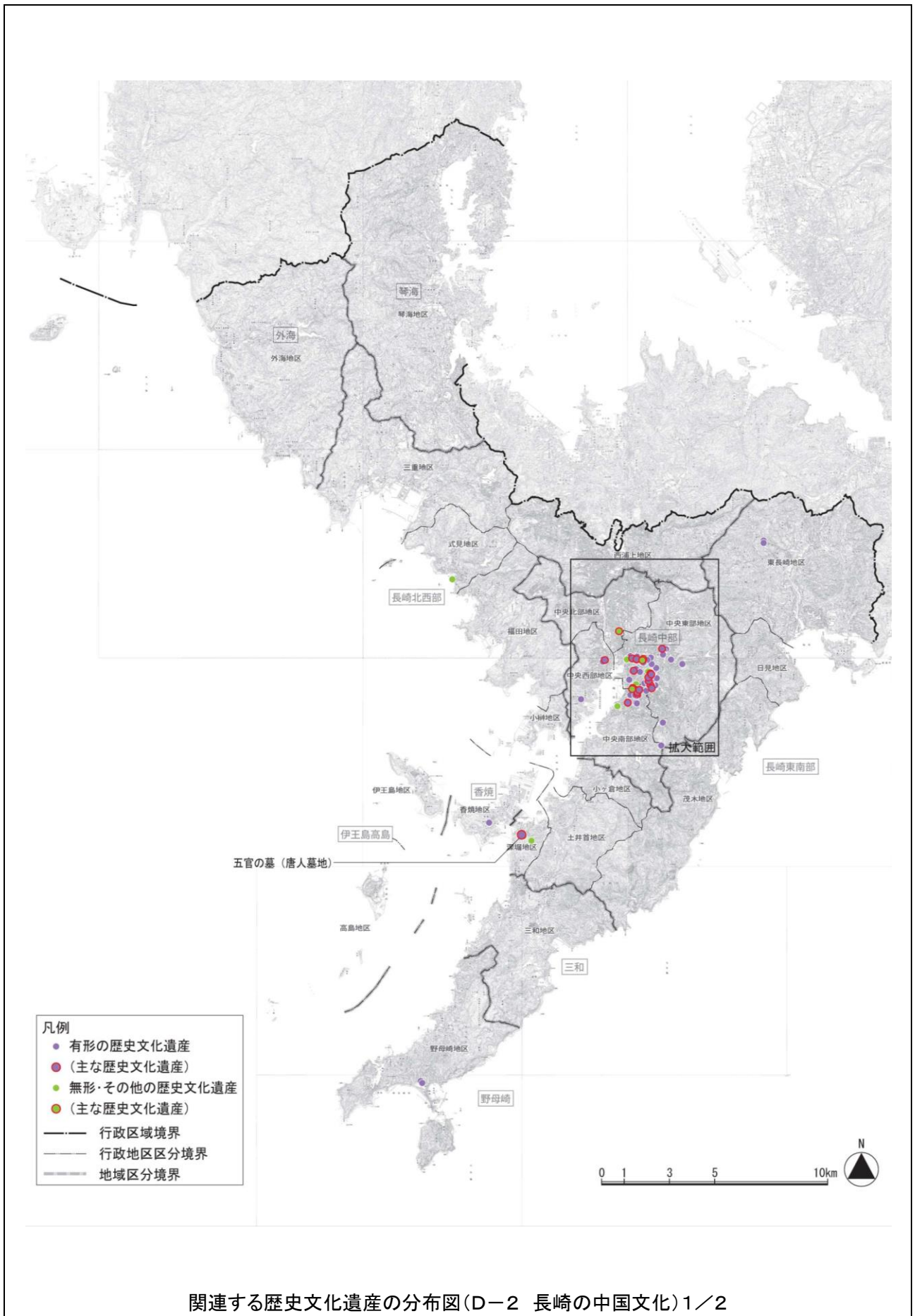


関連する歴史文化遺産の分布図(D-1 西洋文化の唯一の窓口)2/2

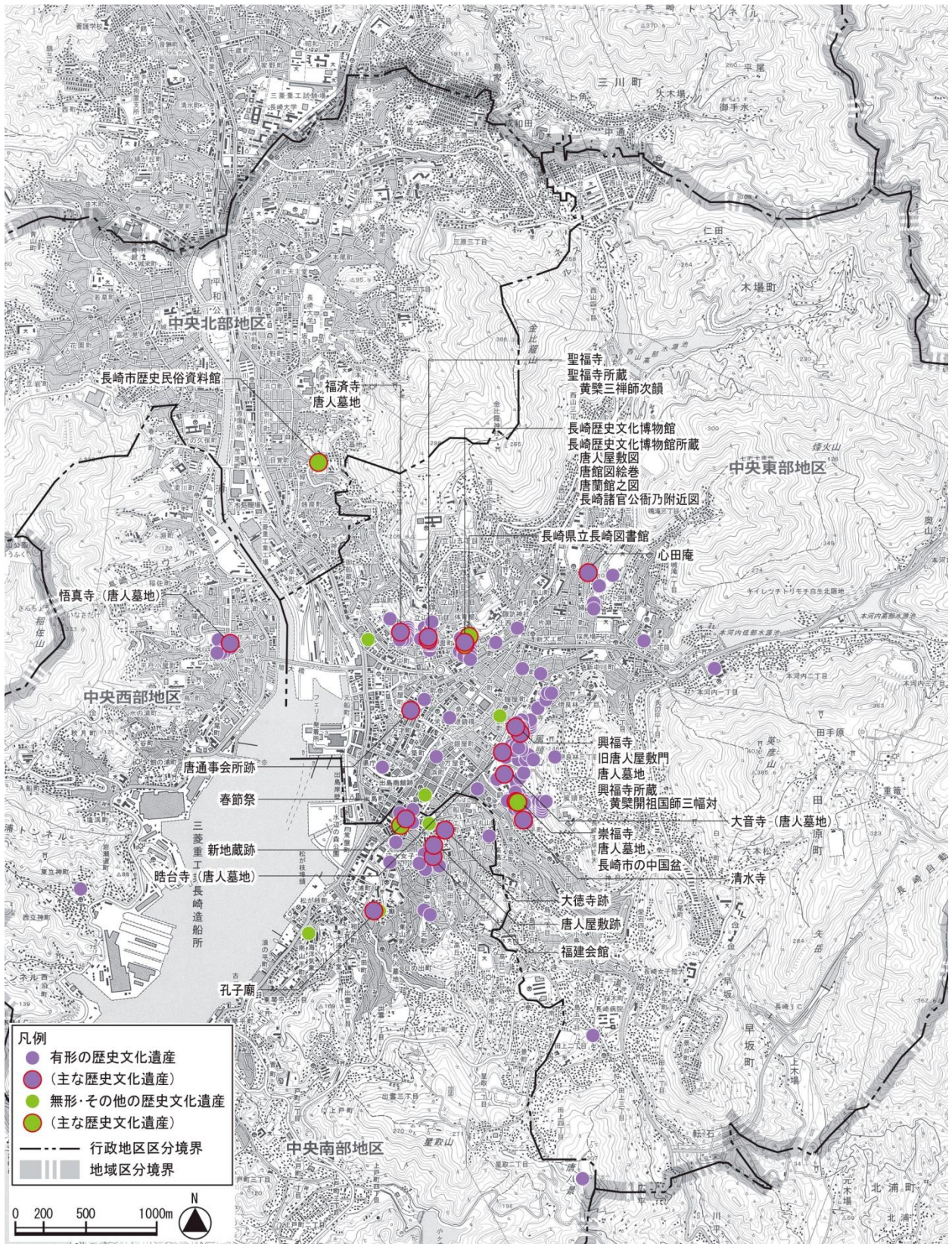
<p>テーマ</p>	<p>D-2 長崎の中国文化</p>
<p>概要</p>	<p>寛永 12 年(1635)、唐船の入港は長崎一港に制限された。来航した中国人たちは市中に止宿し、海上安全祈願などのために唐寺を建立。多くの唐僧が来日し、美術や建築、料理など多方面にわたり黄檗文化などが伝えられ、全国へと広がっていった。その後、清の遷界令が解かれたのを契機に増加する来航唐船の管理統制を強めるために唐人屋敷が設置されたが、来航した中国人により南画などの芸術や龍踊などの芸能、食文化などが伝えられた。開国後は、新地を中心に華僑街が形成され、今日中華街として賑わっている。</p> <p>●中国貿易</p> <p>寛永 12 年(1635)に唐船の貿易を長崎一港に限ることが幕府から示され、長崎奉行の管理下で中国貿易を統制することとなった。また、幕府は、元禄 11 年(1698)に長崎会所を設立して貿易の官営化を図るとともに、金、銀、銅の海外流出を防ぐために代替品として俵物三品(干鮑・いりこ・ふかひれ)などの海産物を輸出することを指定した。輸入の主力は、生糸であり、ほかに反物類、薬類、砂糖、書籍などが輸入された。</p> <p>●唐人屋敷と新地</p> <p>元禄元年(1688)に幕府は唐船の密貿易や、中国人からのキリスト教伝播を防ぐため、長崎市中に散宿する中国人たちを隔離収容する施設として、唐人屋敷を十善寺の地に建設し、翌年から来航する中国人を収容した。唐人屋敷は、数度にわたって敷地の拡張が行われ、19 世紀初頭には総面積約 3 万m<sup>2</sup>の規模となった。現在、唐人屋敷の建造物として唯一残存する旧唐人屋敷門(興福寺境内に所在)は、天明大火(1784)後に建てられた中国様式の住宅門と考えられている。</p> <p>元禄 11 年(1698)の元禄の大火で唐船貨物を収納していた土蔵が全焼した後、唐人屋敷前面の海面を埋め立て、唐船貨物専用の施設を有する人工島が元禄 15 年(1702)に建設された。新地蔵(新地蔵所、新地土蔵)と称する施設は、当初は中国貿易の貨物蔵として使用されていたが、唐船の入港数が減少した明和 2 年(1765)頃には、半分は中国貿易以外の目的で利用されるようになった。</p> <p>安政の開国後は、慶応 4 年(1868)に唐館(唐人屋敷)への出入りが自由になり、海岸地の大浦や新地に中国商社が進出し、新地に中国人が移り住み始めた。そして、在留華僑たちは福建会館や広東会所などの自治組織を設立し、孔子廟や華僑学校で儒教思想教育を進め、長崎の地で独自の中国人社会が形成されていった。</p> <p>●唐通事</p> <p>唐通事は、阿蘭陀通詞のように単なる通訳ではなく、貿易、さらには中国人の日常の生活に関することまで細かく関与しており、貿易担当官的な性格を持っていた。唐通事は、慶長 9 年(1604)に新設され、事務所となる唐通事会所が本興善町に設置された。唐通事のほとんどは中国人の子孫が任じられ、長崎奉行が催す雅会へ出席し、黄檗僧や来舶清人と交友するなど、高い知識や教養を持ち学芸面でも活躍したものが少なくない。長崎の漢詩文壇を支えた劉宣義<small>りゅうせんぎ</small>や林道栄、長崎南画(文人画)隆盛の契機に貢献した游梅泉<small>ゆりうばいせん</small>らの長崎の文化面での功績は大きい。</p> <p>●唐寺と唐人墓地</p> <p>元龜 2 年(1571)の長崎開港以来、長崎に来航した多くの中国人は、ポルトガル人との軋轢を避け、稲佐や水の浦、立神といった長崎港西岸地区に多く居住し、当地に慶長 3 年(1598)に創建された浄土宗の悟真寺は、多くの中国人の帰依を得た。しかし、多くの唐人が次第に都市長崎(旧市街)の方に移り住むようになると、それぞれ出身地ごとに同郷団体の集会所、郷幫<small>ごうばん</small>を組織していたが、これが唐寺として次第に整備されていった。それらのうち、船神媽祖を祀る道教の祠堂であり、歴代の住職が唐僧(中国人僧侶)である興福寺、福濟寺、崇福寺は、三つを総称して唐三か寺や三福寺と呼ばれる。</p> <p>長崎で死亡した中国人は悟真寺や唐三か寺で葬礼が行われ、寺内墓地に埋葬された。その他、皓台寺、大音寺や、かつて唐人町と呼ばれた地域がある深堀地区にも唐人墓地が残されている。</p>

概要	<p>●唐僧隱元の渡来と黄檗文化</p> <p>承応 3 年(1654)唐僧隱元が興福寺住職などの招請により渡来、万福寺(京都宇治市)で黄檗宗を開立すると、黄檗宗は幕府や朝廷の手厚い保護の下、全国に広まり、全国各地に黄檗寺院が創建された。隠元以来、我が国に渡来する唐僧は、隠元の法系の黄檗僧に限られ、その数は 40 にも上った。渡来した黄檗僧は、長崎の唐三か寺のいずれかに入り、時期をみて本山万福寺の住職になるというコースをたどった。</p> <p>黄檗宗の各地への伝播とともに、煎茶や黄檗ものと呼ばれた<sup>いんもくそく</sup>隠木即に代表される書画、彫刻、普茶料理などが大流行し、また、寺院建築においても黄檗様式が持ち込まれ、当時の我が国の文化に大きな影響を与えた。</p> <p>●中国からもたらされた様々な文化</p> <p>中国との交流により長崎にもたらされた様々な文化は形を変えつつも現在の生活文化にも継承されており、影響を与えたものが多い。</p> <p>年中行事では、中国の彩舟流しの影響が見られる盆行事の精霊流しや、中国の競漕行事を継承し伝統的な市民のスポーツとして浸透しているペーロンが市内各地で行われているほか、長崎くんちの主な奉納踊りのひとつである龍踊は、唐人屋敷の中国人から伝えられたものとされる。また、伝統的な祭事・行事以外では、中国の旧正月(春節)の祝賀行事を起源とするランタンフェスティバルなどがある。</p> <p>食文化においても中国料理の影響は大きく、普茶料理などが中国から持ち込まれた他、唐人屋敷での中国人の料理を起源としていると伝えられる卓袱料理など、中国から伝えられた、あるいは中国料理を起源とする料理や菓子も多い。長崎ちゃんぽんも長崎の中国料理店が考案したのが始まりとされる。</p> <p>芸術文化では、中国趣味が流行し、漢詩や中国絵画の南画(文人画)、煎茶などの中国文化の影響を受けつつ長崎独自の物を発信していった。美術では、黄檗派や唐絵目利派など、中国からの影響も受け、長崎派絵画と総称される絵画が発達した。長崎を訪れた人々への土産絵としての役割があった長崎版画も、中国蘇州版画やオランダ銅版画からの影響を色濃く受けたものである。工芸では長崎刺繍や青貝細工や鼈甲細工は、中国人から習得した技術で製作されるようになったという。</p> <p>その他、長崎に伝わる「明清楽」は、明朝の音楽と清朝の音楽という意味で、幕末から明治中期頃までは流行し、近世の外来音楽として、我が国の音楽史にも影響を与えた。</p>
	関連する主な歴史文化遺産等
<p><b>無形</b></p> <p>行事:精霊流し、ペーロン、中国盆、春節祭 等</p> <p>伝統芸能・伝統技術:龍踊【県指定無形民俗文化財】、長崎刺繍【県指定無形文化財】、明清楽【県指定無形文化財】 等</p> <p>食文化:普茶料理、卓袱、ちゃんぽん 等</p>	
<p><b>その他</b></p> <p>中国人:唐僧(隠元、木庵、即非 等)、唐通事(林道栄 等)、来舶清人(伊孚九、范道生、江稼圃 等) 等</p> <p>長崎派絵画に関連する人物:逸然、川村若芝、喜多元規、渡辺秀石、石崎融思、沈南蘋、熊斐、鉄翁祖門、木下逸雲、三浦梧門 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館:長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館、長崎市歴史民俗資料館 等</p>	



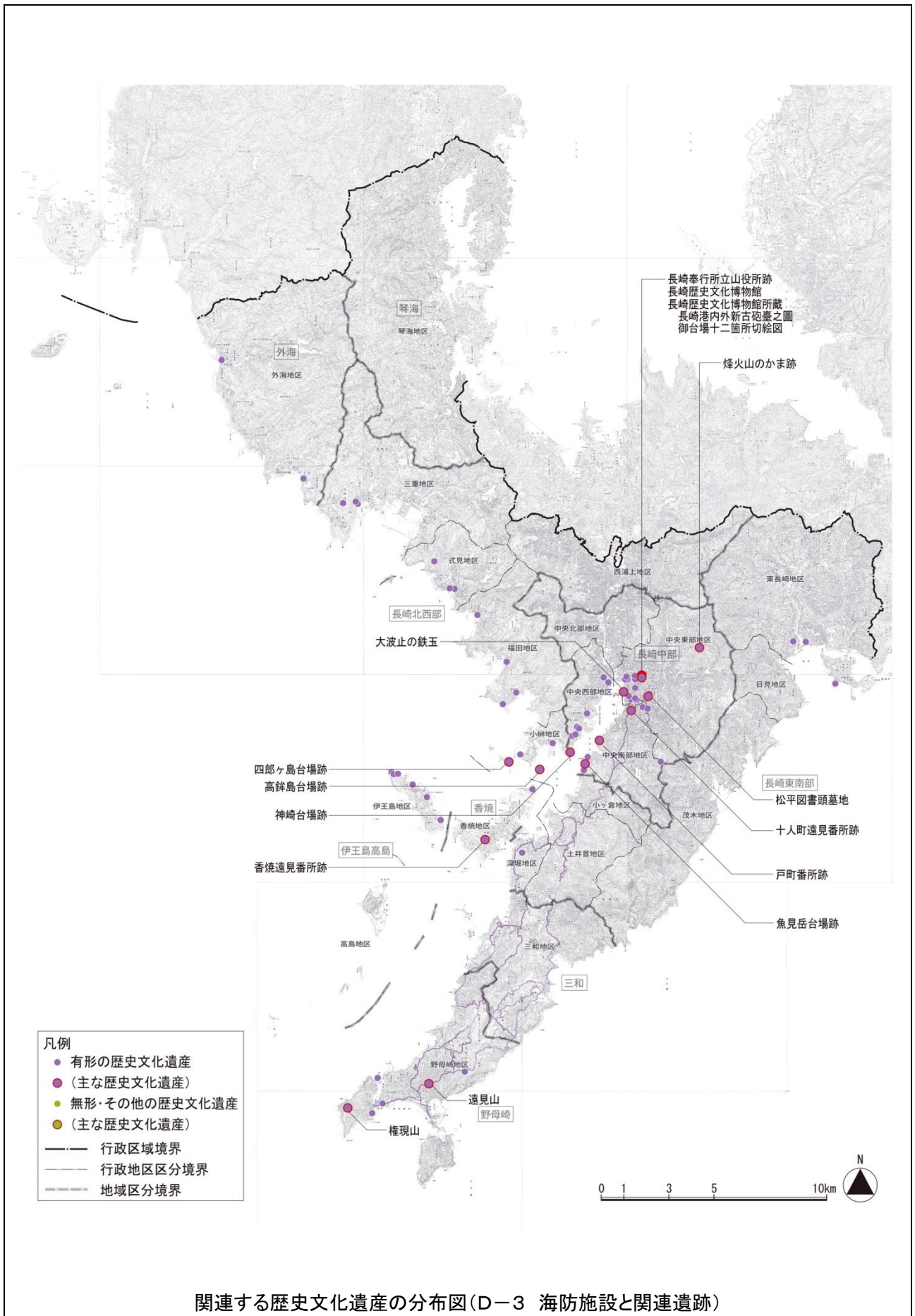


関連する歴史文化遺産の分布図(D-2 長崎の中国文化)1/2



関連する歴史文化遺産の分布図(D-2 長崎の中国文化)2/2

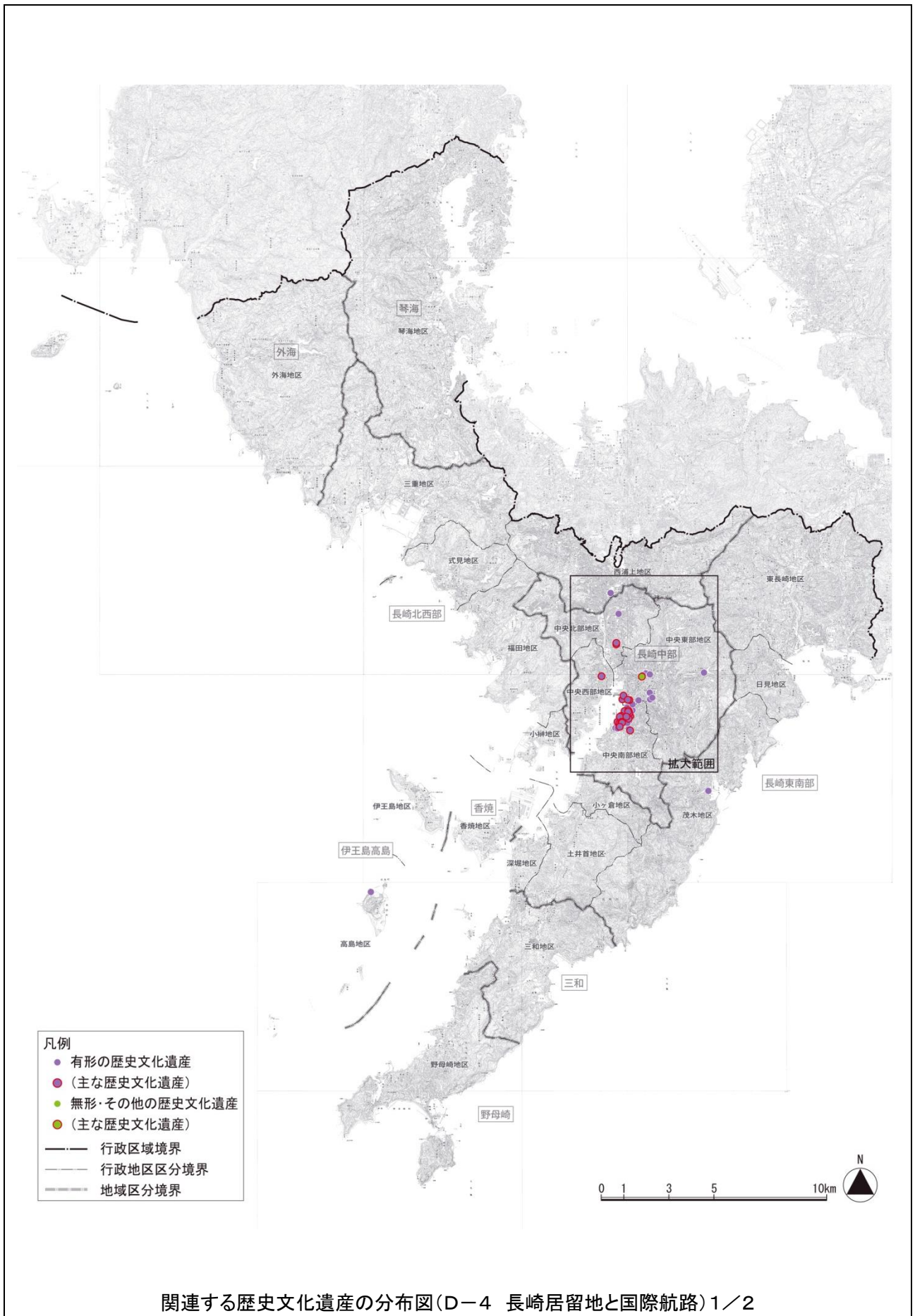
テーマ	D-3 海防施設と関連遺跡	
概要	<p>寛永16年(1639)にポルトガル船来航を全面的に禁止して以降、外国船侵入に備えるため長崎の警備体制が整備され、筑前黒田藩、佐賀鍋島藩に隔年交代で長崎港警備を幕府が命じた。寛永20年(1643)及び正保2年(1645)には長崎港口を押さえる西泊、戸町に番所が設けられ、承応4年(1655)に港内7ヶ所に台場が築かれた。その後、文化5年(1808)のフェートン号事件を受けて文化5年(1808)、文化7年(1810)に台場の増設が命令された。また、幕末には、佐賀藩により神ノ島や四郎ヶ島、伊王島にも台場が築かれた。このほか、入港する船舶の見張りのため、野母権現山、小瀬戸、梅香崎などに遠見番所が置かれていた。</p> <p>●西泊・戸町の番所と長崎台場による長崎港の警備</p> <p>天領の西泊と大村藩領の戸町に番所が定められたことにより、長崎港を監視する沖両番所が成立した。正保4年(1647)にポルトガル独立を告げる使節を乗せたポルトガル船が長崎に来航したことを受け、さらに警備体制の強化を図るため、それまで常設では無かった両番所に、幕府から貸与された石火矢・玉薬などを保管する蔵や警備の兵員が詰める番頭小屋などの定小屋を建てさせ、両藩に管理を行わせた。</p> <p>承応2年(1653)に、幕府が平戸藩主松浦肥前守鎮信に石火矢等を設置する台場の建設を命じ、同4年(1655)に、天領2箇所(大田尾、神崎)、佐賀藩深堀領3箇所(高鉾、蔭の尾、長刀岩)、大村藩領2箇所(白崎、女神崎)の7箇所に古台場と呼ばれる台場が完成し、港内の3箇所は福岡藩、港外の4箇所は佐賀藩に預けられた。また、文化5年(1808)のフェートン号事件後には長崎の警備体制がさらに強化され、文化9年(1812)までに、5箇所の新台場、12箇所の増台場が福岡藩や佐賀藩によって築造され、それまで西泊・戸町の両番所に保管されていた火砲を台場に常時備え付けておくようになった。幕末の嘉永年間には防衛強化のため、佐賀藩により港外の神ノ島・四郎ヶ島・伊王島に台場が築かれた。</p> <p>●遠見番所と烽火台による連絡体制</p> <p>寛永15年(1638)に来航する異国船を監視し、その情報を長崎奉行に注進する遠見番所の野母の権現山山頂への設置が命じられ、また近隣諸藩へ知らせるため、長崎港を見下ろす斧山頂上に烽火台(狼煙台)を設置させた。元禄元年(1688)には唐船やオランダ船の監視体制を強化し、密貿易を取り締まるために小瀬戸の観音山頂上にも遠見番所が設置された。遠見番による連絡は白帆注進と呼ばれ、当初は船で長崎奉行所に注進していたが、小瀬戸遠見番所が設置されると、信号旗を揚げる方法が採用された。野母遠見番所で揚げられた旗を小瀬戸遠見番所から確認して、十善寺郷十人町の遠見番役宅に送られ、そこから筑後町の観善寺内(後に永昌寺観音堂に移された)の遠見番所に送られ、長崎奉行所立山役所に連絡された。</p> <p>●港外の番所や台場</p> <p>西泊・戸町の番所と長崎台場の守備は福岡・佐賀両藩が行ったが、港外の異国船航路は各藩が担当した。大村藩は、寛永13年(1636)に諸藩にさきがけて長崎港内の戸町と外海の福田・三重・神浦・瀬戸・中浦・面高の7箇所に番所を設け、正保元年(1644)には式見・黒崎・池島・松島・江島・平島・崎戸・大島・吹切の9箇所に番所を設置した。</p> <p>佐賀藩も脇岬村の遠見山に遠見番所を設置し、その連絡は、高島、香焼島の各遠見番所を経て深堀鍋島陣屋へと中継し、大黒町の佐賀藩蔵屋敷へ注進された。</p>	
歴史文化遺産等	有形	<p>番所・台場跡：戸町番所跡、神崎台場跡、高鉾島台場跡、魚見岳台場跡【国指定史跡】、四郎ヶ島台場跡【国指定史跡】等</p> <p>遠見番所跡：権現山、遠見山、十人町遠見番所跡、香焼遠見番所跡【市指定史跡】等</p> <p>長崎警備関係遺跡：烽火山のかま跡【県指定史跡】、大波止の鉄玉【市指定有形文化財】、松平図書頭墓地【市指定史跡】、長崎奉行所跡(立山役所)等</p> <p>番所・台場に関連する古絵図：長崎港内外新古砲臺之圖、御台場十二箇所切絵図 等</p>
	その他	<p>長崎警備に係る人物：長崎奉行松平図書頭 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館：長崎歴史文化博物館 等</p>



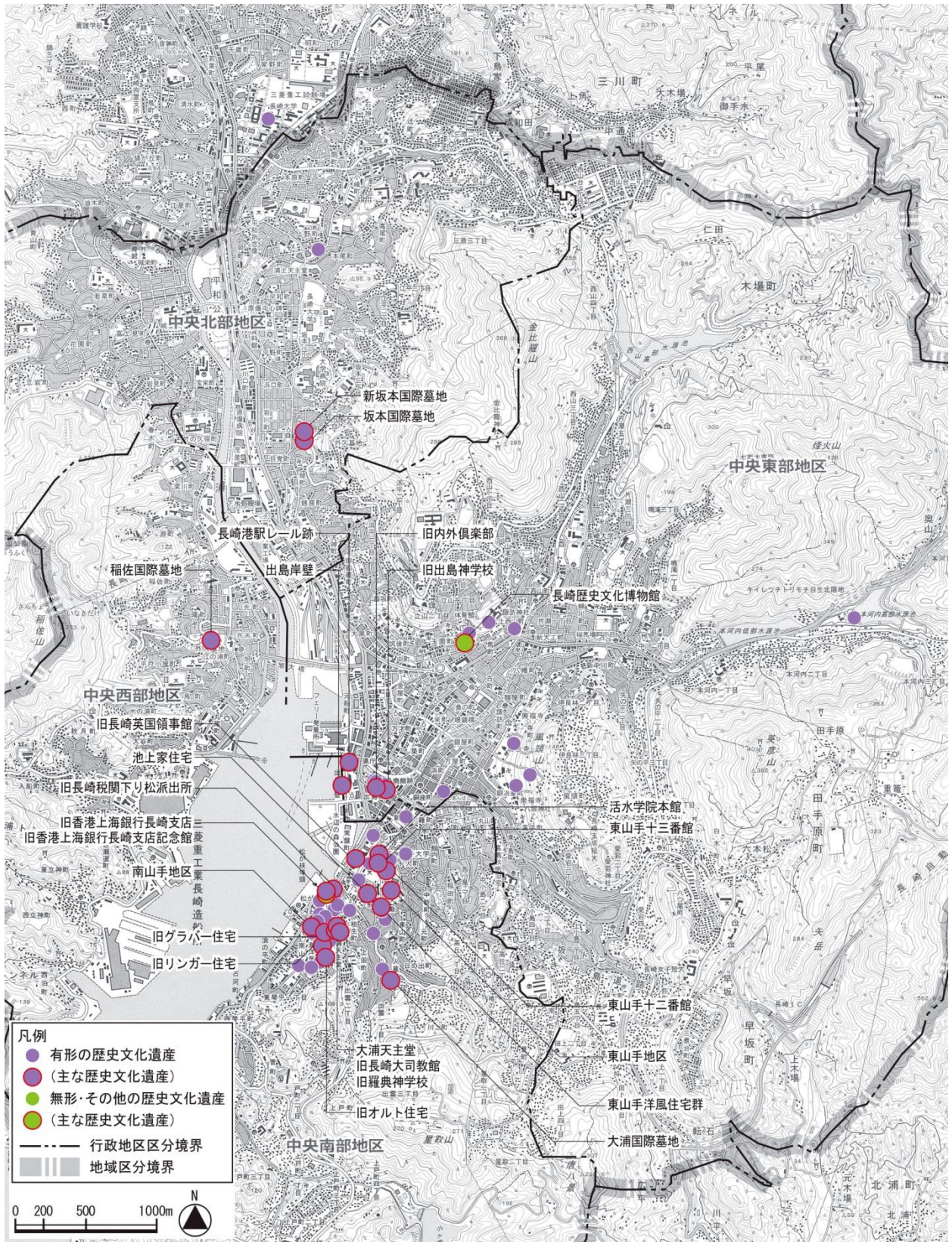
関連する歴史文化遺産の分布図(D-3 海防施設と関連遺跡)

<p>テーマ</p>	<p>D-4 長崎居留地と国際航路</p>
<p>概要</p>	<p>安政 5 年(1858)の五ヶ国との修好通商条約の締結を受け、長崎では翌年から大浦において外国人居留地が造成された。海岸に近い平地の大浦や下り松には貿易のための商館や倉庫、ホテル、銀行、娯楽施設が並び、丘陵部の東山手、南山手には住宅や教会などが建築され、洋風建造物が建ち並ぶ町並みが形成された。近代以降は、貿易の中心が横浜や神戸に移る中、大陸に近いという地理条件から、大正時代からの上海航路など、引き続き国際貿易港として賑わった。</p> <p>今日においても、幕末から明治期に建築された洋風建造物が多数所在し、また、居留地時代の地割や石積、石畳、石段、石溝などの土木工作物、地番境標柱、樹木などが一体となって、居留地時代の歴史的風致を伝えている。</p> <p><b>●長崎居留地</b></p> <p>安政 5 年(1858)の五ヶ国との修好通商条約により、3 港(箱館、神奈川、長崎)の開港が翌年に実施された。条約には各開港場における外国人居住区(居留地)の設立が盛り込まれており、それに合わせて長崎居留地の造成が進められた。大浦居留地は安政 6 年(1859)に着工し、街路、下水道、街区割が整備され、我が国の居留地で最初の近代的都市整備が行われた。以降、埋立、拡張、編入により、東山手、南山手、下り松、梅ヶ崎、出島、新地、広馬場の居留地が形成された。居留地内は、土地等級に従った土地利用が行われ、大浦海岸地には商社、背後地はホテルや茶製造工場、下り松海岸地には造船所、両山手に教会、主に東山手には領事館、南山手には住宅が建てられた。居留地内の建造物には洋風建造物が多く、従来の木造以外に、漆喰塗のプラスター造建築、石や煉瓦による組積造建築、工場の鉄造建築、石造や煉瓦造の倉庫など、多様な構造の建築が出現し、居留地独特の街並みを形成していた。また、開国後は中国人の進出も著しく、新地、広馬場を中心に商館等が立てられ華僑街が形成された。</p> <p>これらの居留地の建造物は、大浦天主堂が国宝に指定されているほか、グラバー園内には、旧グラバー住宅、旧リンガー住宅、旧オルト住宅が保存され、公開されている。また、居留地の地割を示す歴史的風致とともに、洋風建造物が群として残されている東山手地区及び南山手地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、洋風建造物と町並みの一体的な保全に取り組んでいる。</p> <p><b>●西洋文化の普及</b></p> <p>居留地には、外国人によりナガサキ・クラブやパブリックホール、フリーメイソン・ロッジなどの社交の場やボウリング、テニス、クロッケー、レガッタなどのスポーツが楽しめる施設が設置された。また、海外から定期旅客船が寄港するようになり、居留地を中心に外国人投資家グループにより多くのホテルが建設された。</p> <p>教育面では、明治 6 年(1873)に禁教令の高札が撤廃されたことを受け、長崎市内に教会の建設が進むと同時に、宣教師が教会や自宅に日本人生徒を集めて授業を行うようになり、神学校も建てられた。明治 8 年(1875)のアンドレ神学校(出島聖公会神学校)が設立した後、活水女学校、カブリー英和学校(鎮西学院)、スチール記念学校(東山学院)、聖心女学校、海星学校などが設立され、明治 20 年代に入ると、東山手の 18 区画のほとんど全てにミッション・スクールや宣教師住宅が立ち並んだ。外国人居留地のミッション・スクールは、国際色豊かな教育機関として長崎の地域社会に根を下ろした。</p> <p>長崎は、既に西洋食文化の窓口であったが、開国後は、居留地の中で、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシア、中国など、様々な国籍の人々が住み、本国や宗教の料理を楽しんだ結果として多彩な食文化が長崎に伝えられた。外国人から西洋料理の調理方法を学んだ草野丈吉や中村藤吉などは後に西洋料理店を開き、人々に西洋料理を紹介した。また、西洋音楽も同様に、自宅での演奏やホテルやパブリックホールでのコンサートを楽しむ居留地内の外国人たちから広まった。特に、日本人社会における西洋音楽の普及に特に大きな役割を果たしたのはミッション・スクールである。活水女学校では明治 20 年(1887)に音楽科が設置され、本格的な西洋音楽の教育が始まっている。そして、明治 32 年(1899)に治外法権が廃止されると、日本人の居留地への移住とホテル利用が加速的に増え、西洋料理や西洋音楽が日本各地に紹介されるようになった。</p>

<p style="text-align: center;">概要</p>	<p>●「港まち長崎」を定着させた上海航路</p> <p>長崎港では安政の開港頃から諸国の艦船の入港が活発になり、引き続き貿易が行われた。明治 20 年代初めまでの長崎港が輸出に占める割合は全国の 10%前後であるが、外国貿易額を見ると増大傾向にあり、江戸時代に引き続き国際貿易港としての役割を担った。</p> <p>慶応 3 年(1867)からアメリカの会社が上海を往復する航路を開拓して定期船を運航し、明治 8 年(1875)には三菱商会が定期船を投入した。中国大陸への窓口として、長崎が本格的に定期船就航に乗り出したのは、長崎港の港湾改修事業として出島岸壁の整備に着手してからである。大正 13 年に出島岸壁が完成し、さらに昭和 5 年(1930)に長崎港駅と長崎駅が結ばれ、列車を降りて直ぐに乗船できるようになった。昭和 7 年(1932)をピークに長崎港から多くの日本人が上海へと海を渡った。</p> <p>●海外との交流を示す国際墓地</p> <p>江戸時代から中国人やオランダ人の墓地が造られた。悟真寺の北側には稲佐国際墓地が新設されたが、港の対岸に居住する外国人たちにとって地理的に不便であった。そのため、文久元年(1861)にイギリス領事が国際墓地の新設を長崎奉行と交渉し、現在の川上町に大浦国際墓地が新たに開設された。大浦墓地が満杯状態になった後、浦上山里村(坂本)と浦上淵村(竹ノ久保)の 2 ヶ所に新たな墓地が開設した(竹ノ久保は埋葬者が少なかったため、後に坂本国際墓地に移設)。</p> <p>坂本国際墓地には隣接して明治 36 年(1903)に新坂本国際墓地が開設され、そこにはトーマス・グラバーや、ウィルソン・ウォーカーなど、日本の近代化と長崎の経済発展に寄与した外国人の墓碑が立ち並んでいる。</p>
<p style="text-align: center;">関連する主な歴史文化遺産等</p>	<p><b>有形</b></p> <p>洋風建造物:大浦天主堂【国宝】、旧グラバー住宅、旧リンガー住宅、旧オルト住宅、旧羅典神学校、旧香港上海銀行長崎支店、旧長崎英国領事館、旧長崎税関下り松派出所、東山手十二番館【以上重要文化財】、池上家住宅、東山手十三番館【以上国登録有形文化財】、旧長崎大司教館【県有形文化財】、東山手洋風住宅群【市指定有形文化財】、旧出島神学校、旧内外倶楽部、活水学院本館 等</p> <p>居留地の街並み:東山手、南山手地区【以上国選定重要伝統的建造物群保存地区】</p> <p>居留地・貿易関係遺構:居留地境・地番境標柱、旧居留地内の石畳、石段、石溝、領事館跡、ホテル跡、出島岸壁、長崎港駅レール跡 等</p> <p>外国人墓地:稲佐国際墓地、大浦国際墓地、坂本国際墓地、新坂本国際墓地 等</p> <p><b>その他</b></p> <p>居留地で活動した外国人:貿易商(トーマス・グラバー、ウィリアム・オルト、フレデリック・リンガー 等)、宣教師・学校創設者(ハーバート・モンドレル、イライザ・グドール、ジョン・デビソン 等) 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館:長崎歴史文化博物館、旧香港上海銀行長崎支店記念館 等</p>



関連する歴史文化遺産の分布図(D-4 長崎居留地と国際航路) 1/2



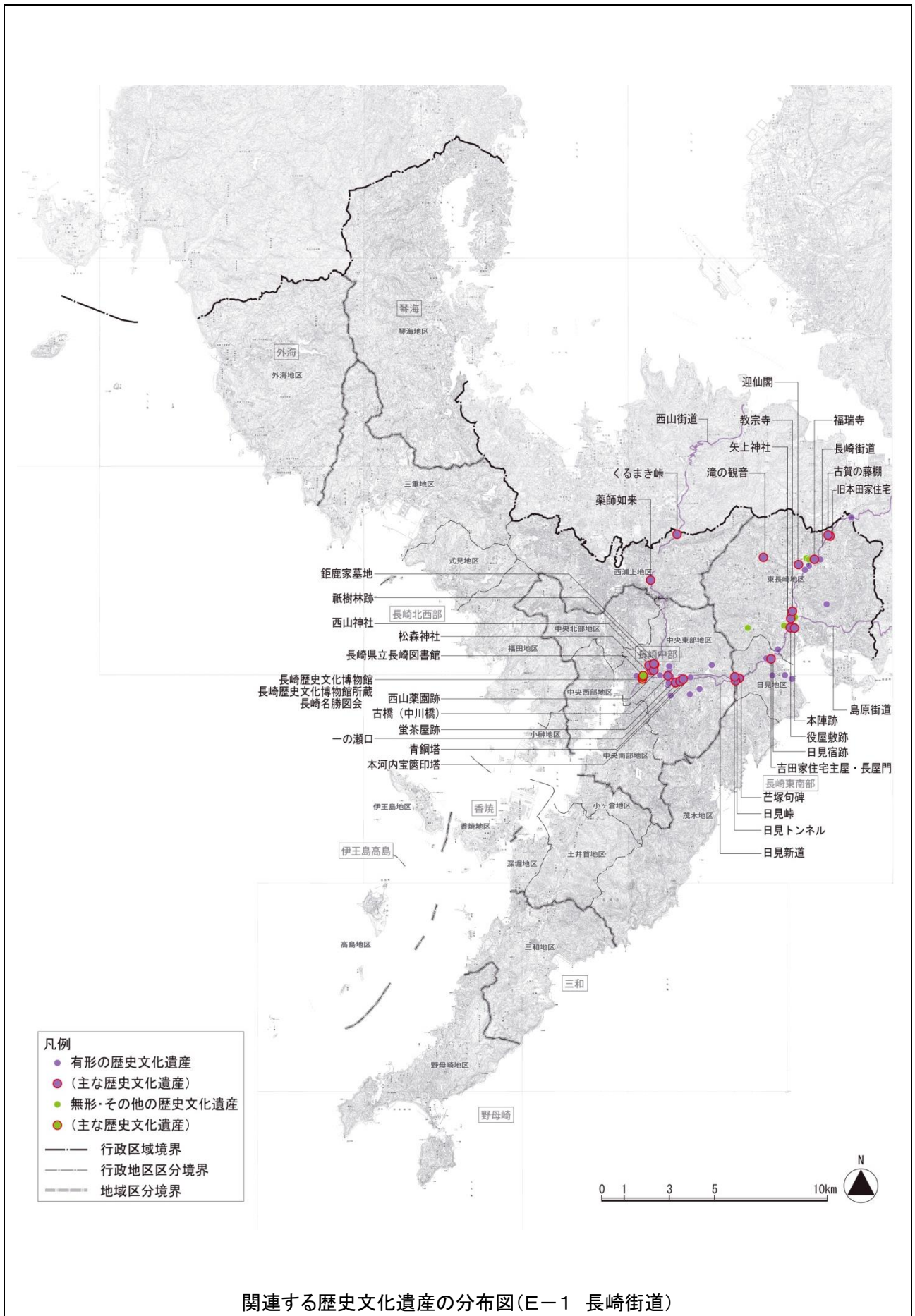
関連する歴史文化遺産の分布図(D-4 長崎居留地と国際航路) 2/2



## E 全国と繋がる街道

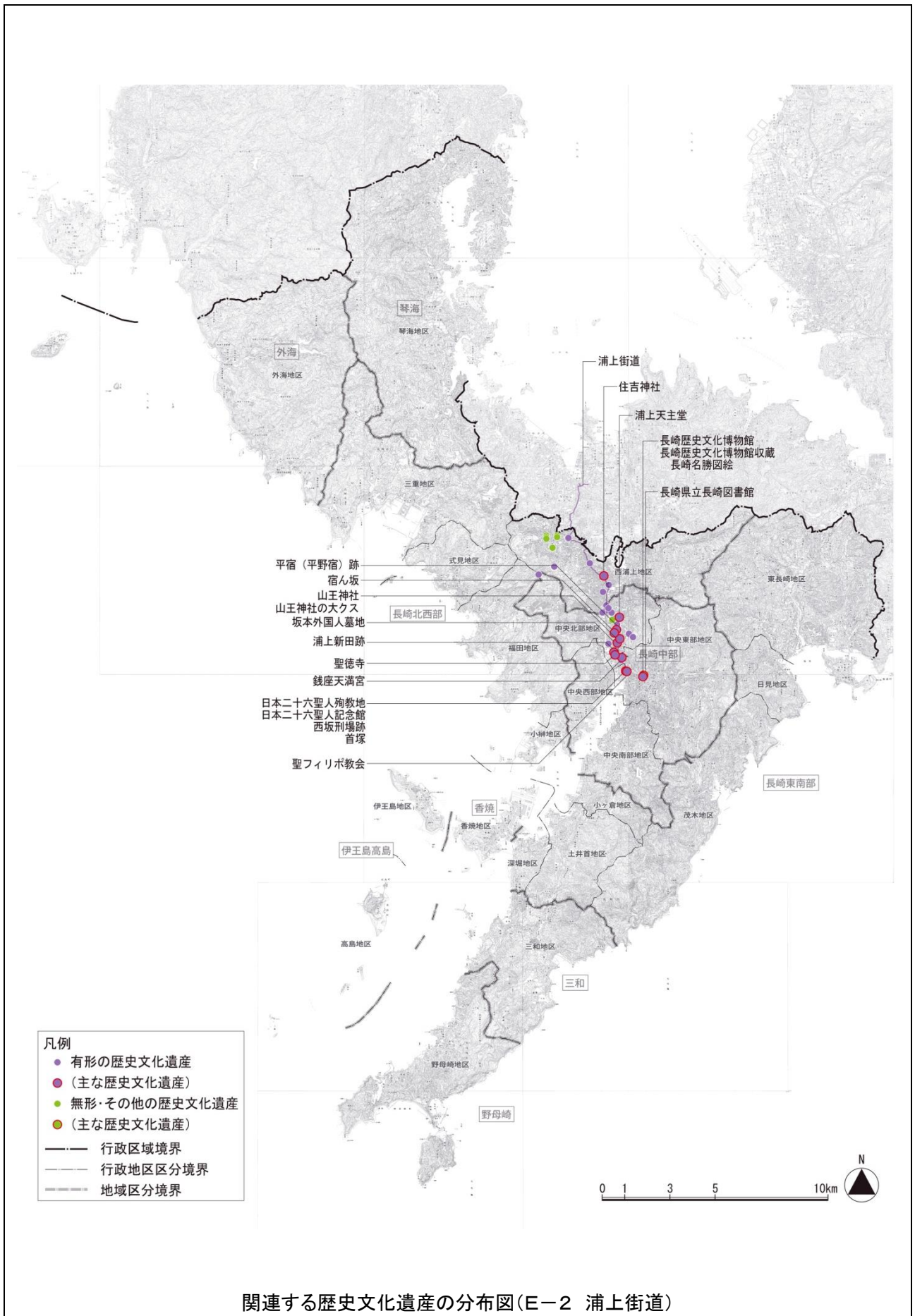
テーマ	E-1 長崎街道
概要	<p>江戸時代に九州第一の脇街道であった長崎街道は、中国船やオランダ船からもたらされた様々な貿易品や海外情報などを江戸や京・大阪に運ぶ重要な道であった。また、オランダ商館長の江戸参府や長崎奉行の赴任に利用され、海外の文化や情報を求め人々が往来した遊学の道でもあった。日見峠や日見宿、矢上宿をはじめ、当時の街道を偲ばせる遺跡等が残る。また、長崎街道の周辺には、矢上宿から分岐して島原に向かう島原街道や、西山と伊木力(諫早市)を結ぶ西山街道がある。</p> <p>●長崎街道の概要</p> <p>長崎街道は、江戸時代、豊前国小倉(福岡県北九州市小倉北区)と肥前国長崎(長崎県長崎市)を結んだ脇街道で、距離は57里、途中に25の宿場が置かれていた。長崎街道のルートは、長崎から日見峠を越え諫早を経由して大村に向かうルートのほか、長崎から時津に向かい、海路で彼杵に渡る浦上街道など複数の道があったが、18世紀になると、長崎から諫早、大村、彼杵、佐賀を経由して小倉に至るが主要ルートとなった。現在、旧長崎街道に沿って国道34号線が走るが、今日における市中心部へ繋がる主要幹線道路である。</p> <p>●日見峠</p> <p>日見峠は「西の箱根」とも呼ばれた急峻な峠道で、長崎の出入口として幕末には関所も設けられた。向井去来が「君が手もまじるなるべし花薄」と詠んだように長崎から旅立つ人を見送る場所でもあった。明治15年(1882)には馬車・人力車が通れる日本初の有料道路である新道が設けられ、さらに大正15年(1926)には峠越えトンネルとして日見トンネルが開通した。平成11年(1999)日見バイパスの新日見トンネルが完成、時代を経た今日においても長崎市街地への要衝の地となっている。</p> <p>●宿場町と周辺の文化</p> <p>江戸時代には、長崎街道に設けられた25宿のうち、長崎市域には日見宿と矢上宿が設けられていた。日見宿は人馬の継ぎ場が置かれた場所で、旅人は長崎へ入る前にここで身支度を整えたという。矢上宿は、佐賀藩の長崎警備の重要拠点となったため、宿場機能が強化され、本陣や番所、役屋敷などが整えられた。これら宿場町には、施設跡と伝えられる場所や、休憩等で使われた寺社など街道に因む歴史文化遺産が数多く残っている。</p> <p>このほか、矢上村に隣接した古賀村では、元禄年間(1688～1708)頃から農家の副業として植木・盆栽の生産が始まり、古賀植木の基礎が築かれた。古賀の植木職人達は、時津、彼杵、横瀬浦等各地へ行商に出て売りに出され、長崎で中国との交流が盛んになると、中国人向けに手を加えた古賀独特の曲木作りが人気を博し、中国商人達は、滝の観音に参拝した後、古賀一帯の植木見物にまで足を伸ばすようになった。さらに、安政の開港以降は、各国の外国人達も買い求め、明治時代になるとシベリア、朝鮮、台湾方面にまで輸出され、「古賀植木」の名は海外でも知られるようになった。また、古賀人形は、文化・文政年間(1804～30)頃にはオランダ兵隊や紅毛婦人、阿茶さん等といった異国情緒あふれる人形が作られ、格好の長崎土産とされた。</p> <p>●全国に運ばれた海外のもの・文化・情報</p> <p>長崎街道は九州各地の大名の長崎警備や参勤交代、オランダ商館長の江戸参府、海外の品々や技術・文化を京・大坂、江戸へと運ぶための街道として栄えた。長崎に輸入されたものや文化は、街道沿いに伝わり、各地の文化に大きな影響を与えたものも少なくない。例としては、海外から輸入された砂糖とそれを用いた菓子作りの技法も長崎街道により各地に広まっており、今日、別名「シュガーロード」とも呼ばれている。このほか、長崎街道で運ばれた様々な貿易品の中には、ゾウやラクダ、インコ等といった生類も含まれ、享保13年(1728)に積載されたゾウは、長崎から小倉まで8泊9日、江戸までの全行程は74日を要したという記録がある。</p>

概要	<p>●西山街道と島原街道</p> <p>島原街道は、長崎と島原を結ぶ街道で、島原藩主が長崎警備のために往来したことから重要視された。長崎から矢上宿までは長崎街道を利用し、矢上宿から普賢山の山麓に沿って戸石村に至り、橘湾沿いの佐賀藩領を通過して島原藩領に到着した。</p> <p>西山街道は、長崎の西山と諫早市多良見町舟津(伊木力)を結ぶ街道で、伊木力往還とも呼ばれたが、後にこの地方の蜜柑の収穫が増大すると、蜜柑街道とも呼ばれた。また、殿様道とも呼ばれ、大村藩の専用道路でもあった。街道の起点である西山口(炉粕町)から長崎市と長与町の境界部のくるまき峠の間には、現在でも所々に街道の面影が残されている。</p>
	関連する主な歴史文化遺産等

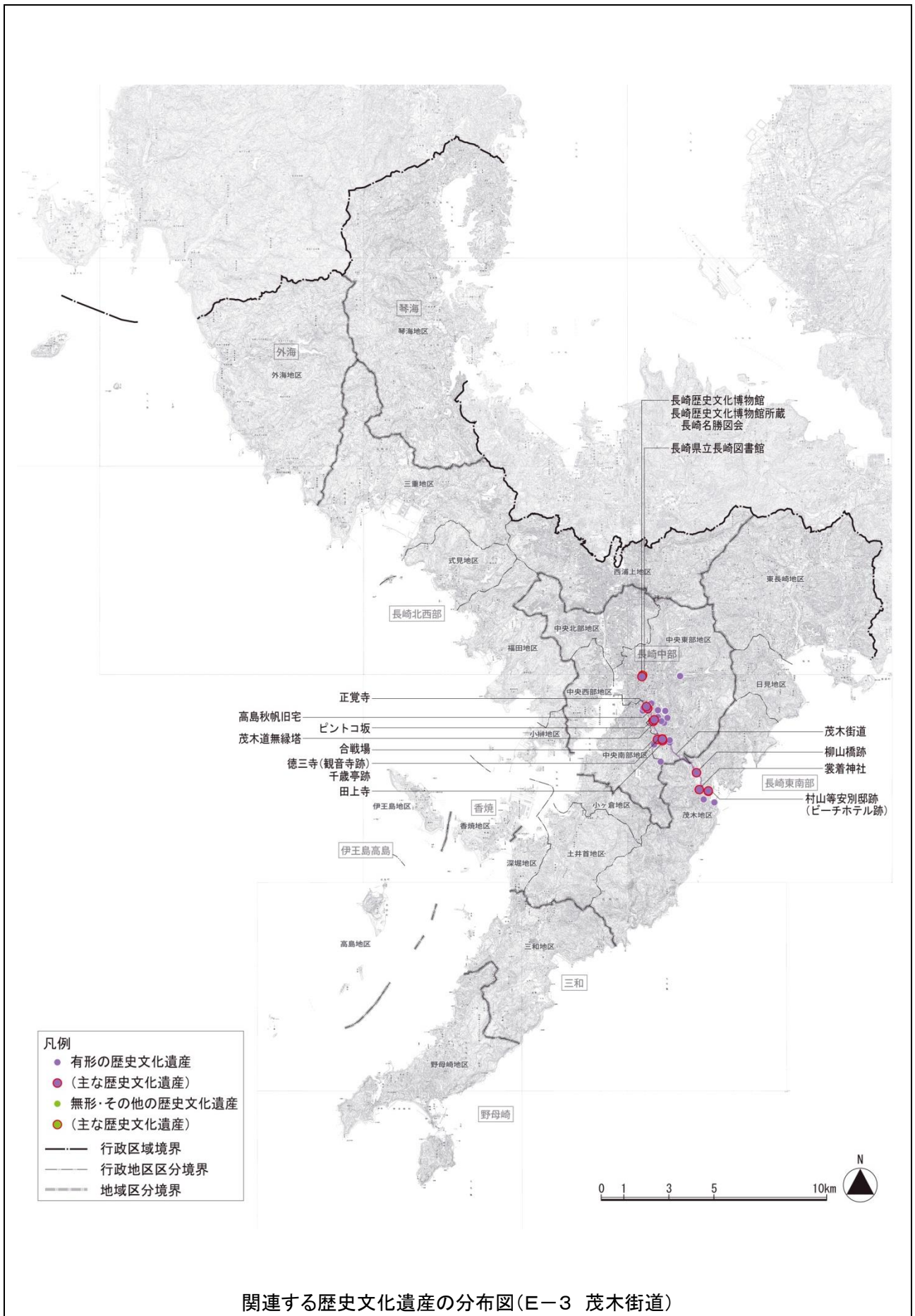


関連する歴史文化遺産の分布図(E-1 長崎街道)

<p>テーマ</p>	<p>E-2 浦上街道</p>	
<p>概要</p>	<p>西坂(長崎市西坂町)と時津(西彼杵郡時津町)を結ぶ浦上街道は、日見峠を越える道が一般的になる江戸時代中期までは、主要道として機能し、日本二十六聖人が護送されたのをはじめ、長崎奉行やケンペルもこの街道を通るなど、盛んに利用された道であった。</p> <p>●長崎街道の短縮ルート</p> <p>浦上街道は、時津街道とも言い、長崎村西坂から時津村の港までのおよそ3里の陸路と、時津から海路7里で大村湾を渡り彼杵まで至るものであった。日見峠を越えて諫早方面に向かうルートが一般的になる江戸中期までは、長崎に出入りするのによく利用された街道で、天気がよければ矢上・諫早・大村を経由する陸路よりも1日の行程を短縮できるルートであった。大村藩主が参勤交代での国入りの時に、長崎奉行にあいさつに寄る際にもよく利用された道でもあった。</p> <p>起点の西坂は、江戸時代には刑場があったところで、二十六聖人が殉教した地でもある。現在の平野町付近には平宿(平野宿)があり、享保年間(1716~36)に浦上新田が造成されるまでは宿場の南側には一面に海が広がっていた。時津から長崎に向かう旅人の多くは、ここから船に乗り、船旅を楽しみながら長崎に向かったという。その他、悟真寺2代住職が創建した聖徳寺や、市指定天然記念物の大クスのある山王神社、大村藩領浦上北村の鎮守住吉神社など、街道沿いには往時の面影が偲ばれる寺社が点在している。</p>	
<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>	<p>有形</p> <p>街道を構成する文化遺産:宿ん坂、平宿(平野宿)跡 等          街道沿いの遺跡等:日本二十六聖人殉教地【県指定史跡】、日本二十六聖人記念館、浦上新田跡、西坂刑場跡、首塚、坂本外国人墓地 等          街道沿いの寺社等:聖フィリポ教会、銭座天満宮、聖徳寺、山王神社、住吉神社、浦上天主堂 等          街道の名所を描いた絵図:長崎名勝図会 等</p>	
	<p>その他</p> <p>天然記念物:山王神社の大クス【市指定天然記念物】          日本二十六聖人に関連する人物:日本二十六聖人、ルイス・フロイス、ジョアン・ロドリゲス、フランシスコ・パシオ 等          関連資料所蔵・展示館:日本二十六聖人記念館、長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館 等</p>	



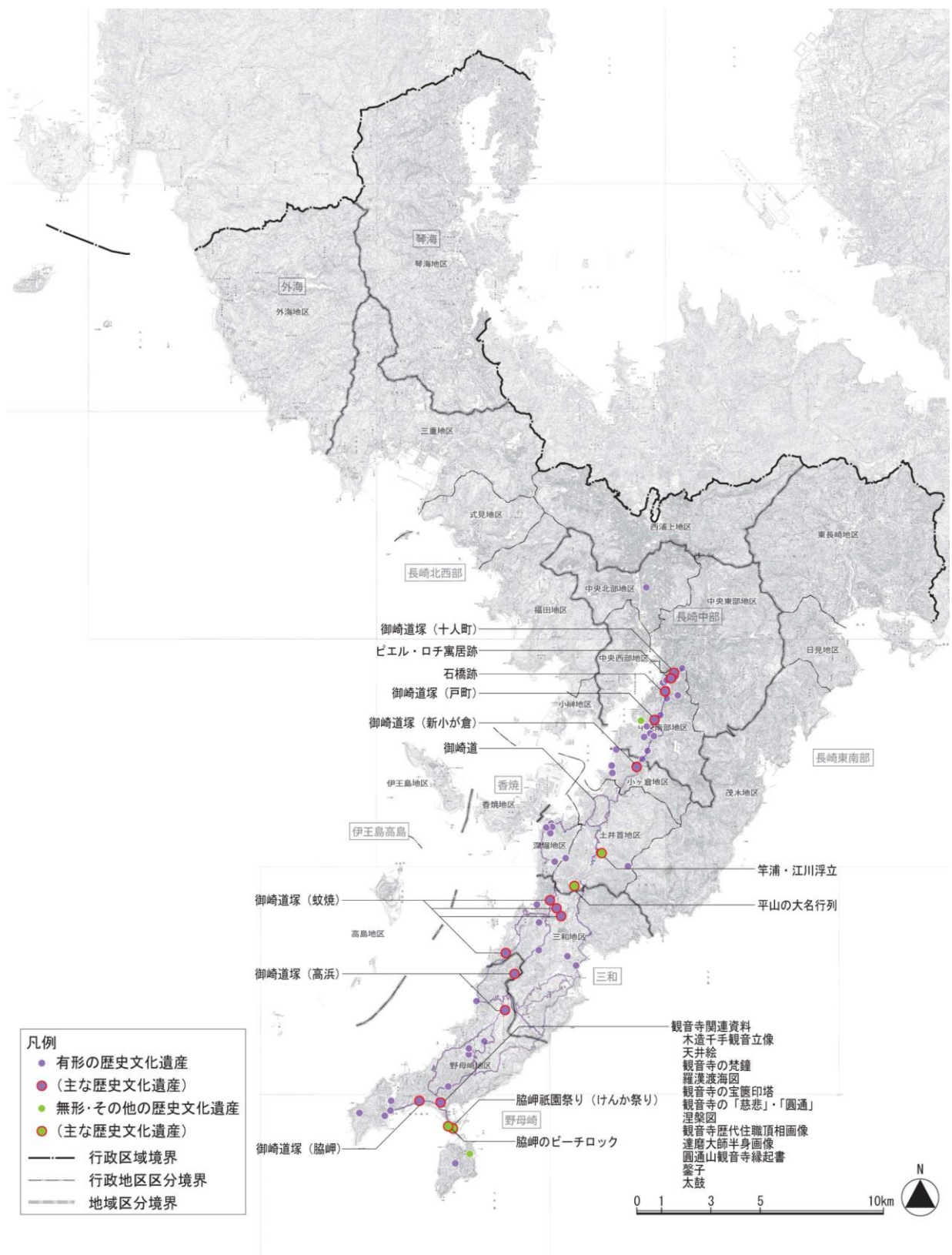
テーマ	E-3 茂木街道	
概要	<p>茂木街道は、長崎市の小島から茂木に至る街道で、茂木からは島原半島や天草方面と船便で結ばれていた。茂木港は、江戸時代に天草をはじめ橘湾の各沿岸、さらには、肥後国(熊本県)や薩摩国(鹿児島県)の各地を結ぶ要港として栄えた。</p> <p>●長崎と天草、肥後、薩摩を結ぶ街道</p> <p>茂木街道は、茂木口と呼ばれた正覚寺の下が長崎側の玄関口であり、幕末には関所が設けられていた。茂木側は茂木港の東に位置する裳着神社が玄関口となっている。茂木は、天正 8 年(1580)大村純忠により、長崎の 6 ヶ町とともにイエズス会に寄進されており、橘湾や有明海を経て中九州方面とを結ぶ、古くからの要港であったことがうかがえる。江戸初期には島原領であったが、寛文 8 年(1668)に茂木が天領になると、天領の天草を始め橘湾の各沿岸、さらには肥後国や薩摩国の各地を結ぶ要港として繁栄した。また、茂木から新鮮な魚介類や野菜などの生鮮食料品を長崎へ運ぶ道でもあった。明治から大正にかけては、千々石や小浜、口之津、島原などを結ぶ海上交通の拠点として栄えた。現在も、富岡(熊本県天草郡苓北町)への定期船が運航されており、茂木と天草が航路で結ばれている。</p> <p>街道沿いには、上小島町の茂木道無縁塔、幕末の砲術家・洋式兵学者であった高島秋帆の東小島町の旧宅等の史跡や、黄檗宗の寺院の観音寺跡地に創建された徳三寺などの寺社が、往時の面影を残している。また、裳着や若菜川など、神功皇后にゆかりの深い地名なども多く残っている。</p> <p>●長崎の保養地茂木</p> <p>長崎に近く、交通の要所であった茂木は、要人や外国人が多く訪れる保養地でもあった。</p> <p>初代長崎代官の村山等安は、朱印船貿易などで莫大な富を得ていた慶長年間(1596～1615)に茂木の地に別荘を構えた。別荘は濠で囲まれ、城郭のようであったと言われている。その後、別荘地は茂木村の庄屋宅となり、安政 2 年(1855)には当時庄屋であった森岡豊左衛門宅へオランダ伯爵のリンデンが訪問している。</p> <p>庄屋宅地跡には、その後外国人相手の洋風ホテル茂木長崎ホテルが建設されたが、明治 39 年(1906)に天草生まれの道永栄が買収してビーチホテルと改称、戦前まではアジア各地から避暑に訪れていた外国人たちの格好の保養地として賑わった。</p>	
歴史文化遺産等 関連する主な	有形	<p>街道を構成する文化遺産:ピントコ坂、柳山橋跡 等</p> <p>街道沿いの遺跡等:高島秋帆旧宅【国指定史跡】、茂木道無縁塔【市指定有形文化財】、合戦場、千歳亭跡、村山等安宅跡(ビーチホテル跡) 等</p> <p>街道沿いの寺社:正覚寺、徳三寺(観音寺跡)、田上寺、裳着神社 等</p> <p>街道の名所を描いた絵図:長崎名勝図会 等</p>
歴史文化遺産等 関連する主な	その他	<p>関連する人物:向井去来、村山等安、道永エイ 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館:長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館 等</p>



関連する歴史文化遺産の分布図(E-3 茂木街道)

テーマ	<b>E-4 御崎道</b>	
概要	<p>御崎道は脇岬の観音寺への参詣路として利用され、寛永 15 年(1638)に野母の権現山に遠見番所が設置されると、海防上の重要な路としても利用された。</p> <p>●観音詣での道 御崎道は、長崎から脇岬を結ぶ街道であり、大浦や戸町、深堀、為石、野母方面への道としても利用されたため、戸町道や大浦道、深堀道等とも呼ばれたという。観音寺に参詣する道として知られ、観音巡礼が盛んであった江戸時代には、人々は、長崎から往復 1 泊 2 日の行程で参詣していた。寛永 15 年(1638)に野母の権現山に遠見番所が設置されると、長崎警備のための道路としての役割も併せもつようになった。</p> <p>街道の分岐点などの要所には 50 本の道塚があったとされ、現在も十人町や戸町、新小ヶ倉、蚊焼、高浜、脇岬などに残されている。街道の終点となる観音寺境内には、長崎の商人などの名が刻まれた石造物などが数多く残されていることから、長崎の人たちの信仰を集め、多くの人々が街道を利用していたことがうかがえる。</p> <p>また、長崎半島先端の樺島が展望できる遠見山や、海岸沿いの奇岩や砂浜など、街道沿いには景勝地が多く点在する。</p> <p>●街道の終点観音寺 観音寺は、和銅 2 年(709)行基菩薩によって創建された。仁和寺(真言宗)の末寺と伝えられ、江戸時代以降、曹洞宗に改宗したといわれている。</p> <p>観音堂には藤原様式の本尊千手観音立像(国指定重要文化財)が祀られ、150 面ある格子天井は、1 面ごとに裏には施主となった長崎の人々の名前が書かれ、表には花卉図等が描かれている。この天井絵は、弘化 3 年(1846)長崎の豪商飛鳥氏が発願し、幕末長崎画壇の大御所と称された唐絵目石崎融思とその一門によって描かれたもので、川原慶賀が描いたものも 4 面が確認されている。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>街道を構成する文化遺産：石橋跡、御崎道塚(十人町、戸町、新小が倉、蚊焼、高浜、脇岬 等) 等 街道沿いの遺跡等：ピエール・ロチ寓居跡、領境石 等 観音寺の文化財：木造千手観音立像【重要文化財】、天井絵【県指定有形文化財】、観音寺の梵鐘【市指定有形文化財】、羅漢渡海図【市指定有形文化財】、観音寺の民俗資料(観音寺の宝篋印塔、観音寺の「慈悲」・<small>えんつう ねはんす かんのもんじきだいじゅうしよくんそうがぞう だるまたいしほんしんがぞう</small>「圓通」、涅槃図、観音寺歴代住職頂相画像、達磨大師半身画像、圓通山観音寺縁起書、鑿子、太鼓)【市指定有形民俗文化財】 等</p>
	無形	<p>伝統芸能・行事：平山の大名行列【市指定無形民俗文化財】、竿浦・江川浮立、脇岬祇園祭り(けんか祭り) 等 伝統技術：蚊焼鍛冶 等</p>
	その他	<p>街道沿いの天然記念物：脇岬のビーチロック【県指定天然記念物】 等</p>

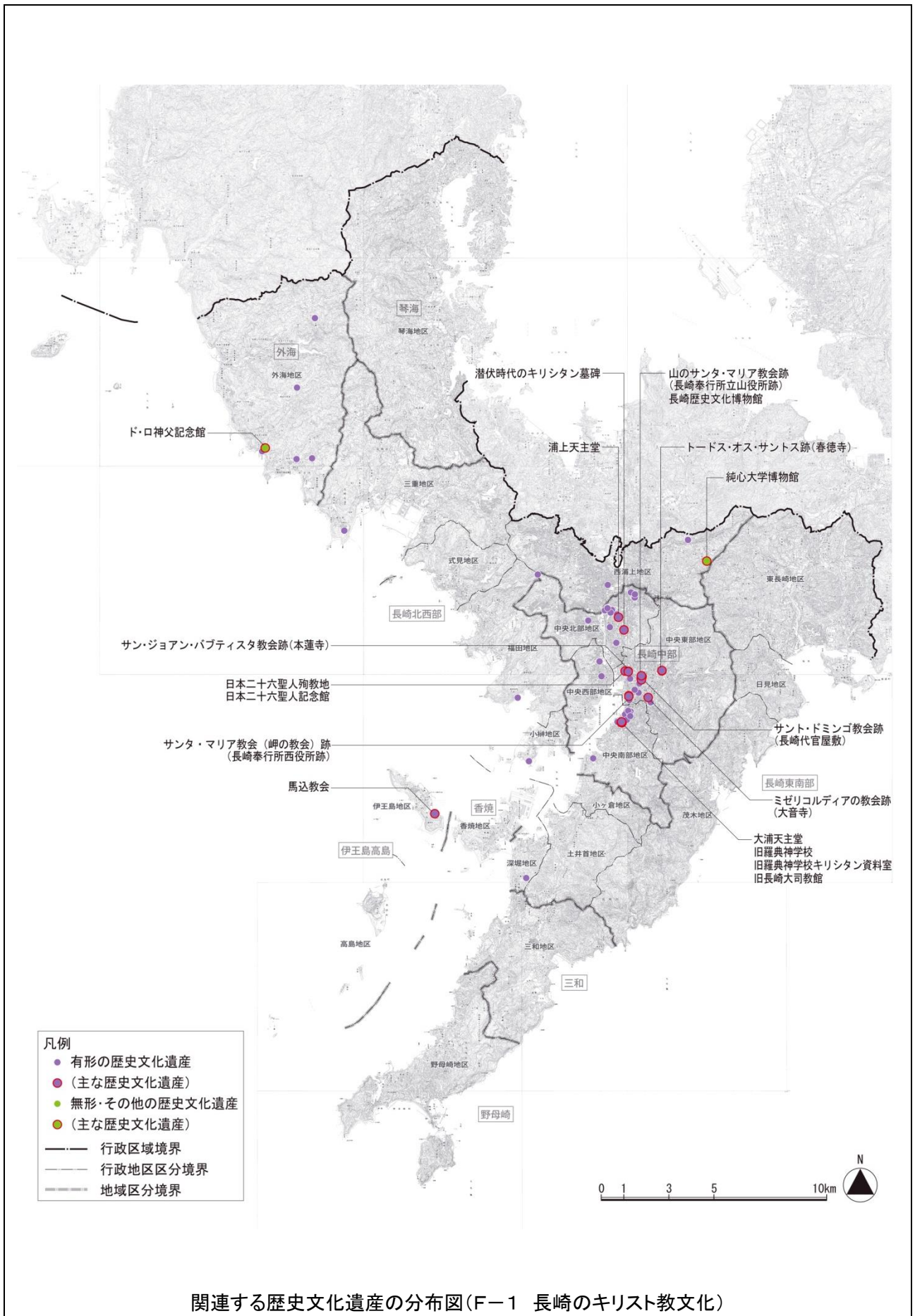




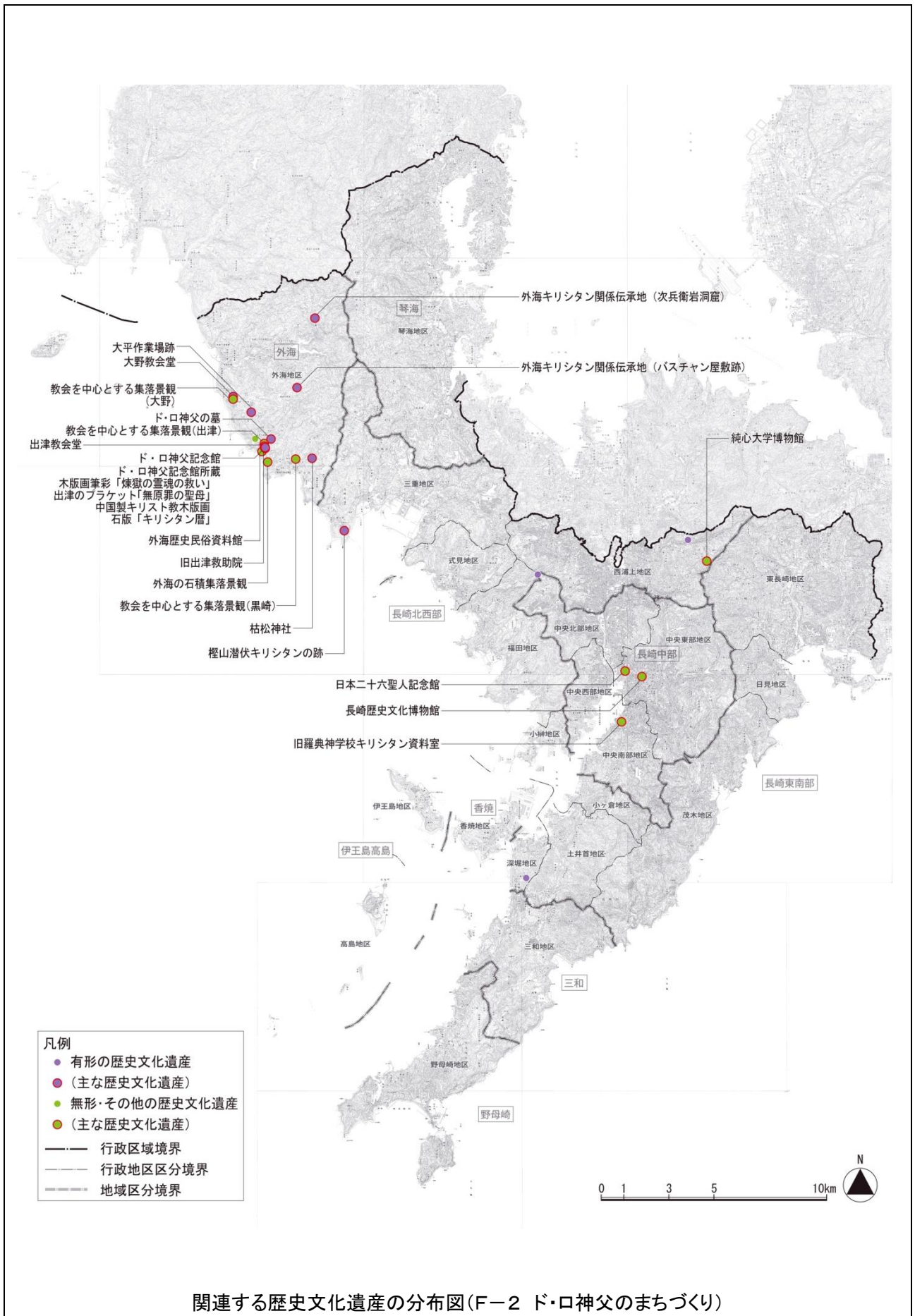
関連する歴史文化遺産の分布図(E-4 御崎道)

## F キリスト教文化の拠点

テーマ	F-1 長崎のキリスト教文化
概要	<p>永禄 10 年(1567)、長崎に初めてキリスト教が伝えられて以降、禁教までの約 50 年間、長崎はキリスト教文化の中心的役割を担った。また、長崎は我が国最初のキリスト教弾圧となった日本二十六聖人の殉教の事件や、幕末に居留地内に建設された大浦天主堂において、長い禁教による潜伏期を経た浦上の信徒が信仰を告白した信徒発見など、キリスト教史上世界的にも有名な出来事が起こった場所である。今日においても日本カトリックにおける拠点の一つとなっている長崎は、日本におけるキリスト教の繁栄、弾圧、潜伏、復活を物語る歴史文化遺産が残されている。</p> <p><b>●キリスト教の伝播と普及</b>            フランシスコ・ザビエルが、天文 18 年(1549)に鹿児島、翌年に平戸で布教活動を行ったことから我が国にキリスト教がもたらされた。その後、多くの日本人信徒を得て、長崎地方を中心に西日本各地に広まった。日本初のキリシタン大名として知られる大村の領主大村純忠は、永禄 6 年(1563)に洗礼を受けた。純忠の家臣でともに洗礼を受けた長崎純景も永禄 10 年(1567)に自らの菩提寺に長崎初の教会となるトードス・オス・サントスを創建した。元亀 2 年(1571)、長崎は、湾に突き出た岬の先端付近に新たな町が開かれ、南蛮貿易港として整備された。天正 8 年(1580)には長崎と茂木がイエズス会へ寄進され、領内での布教が奨励されたことから、長崎には多くのキリスト教信者が集まり、教会堂が建てられ、キリスト教文化が栄えていった。</p> <p><b>●禁教下の継承</b>            天正 15 年(1587)、豊臣秀吉が伴天連追放令を発して以降、宣教師の追放や、教会領の没収、教会堂の破壊など、禁教対策が進められ、慶長元年(1597)には我が国最初のキリスト教弾圧となった日本二十六聖人殉教の事件が起こった。秀吉に始まった禁教政策は、慶長 19 年(1614)に徳川家康による禁教令によって強化され、五人組制度、絵踏が導入された。また、元和期から正保期(1615～48)にかけ、幕府の禁教政策に伴って長崎には寺社が盛んに創建され、破壊された教会跡地にも寺院や奉行所、代官屋敷が建てられた。さらに寛永 14 年(1637)のキリシタン一揆ともいわれる島原の乱の後には、寺請制度が導入され、幕府による徹底したキリシタンの取締りが行われ、当時のキリシタン達は、表向きは仏教徒として振る舞うことを余儀なくされていった。寛永 20 年(1643)に最後の神父小西マンショが殉教した以降、国内に司祭が一人もいない状況となり、密かにキリスト教の信仰を守り伝える潜伏時代に入り、この時代の信徒「潜伏キリシタン」は、浦上村、外海地方、長崎港外の島々などに潜伏組織をつくって信仰を守り続けた。</p> <p><b>●解禁後の復帰</b>            江戸幕府による禁教と鎖国により、キリシタンらは 250 年もの潜伏を強いられたが、幕末の動乱期に至り、安政の五ヶ国との修好通商条約の締結により教会の建設が可能となった。長崎では大浦天主堂が建設が進められ、元治 2 年(1865)に献堂式が挙行された。この年、浦上地区の潜伏キリシタンらが大浦天主堂を訪れ、フランス人宣教師プティジャン神父に信仰を告白した出来事は「信徒発見」と呼ばれ、250 年もの間潜伏しながらキリストの教えを継承してきたことが当時のヨーロッパに奇跡の出来事として伝えられた。幕府による禁制は、明治政府にも引き継がれ、明治 3 年(1870)に大規模な浦上キリシタン総流罪の処分が実施されたが、海外諸国の抗議を受け、明治 6 年(1873)に禁制高札の撤去を布告し、慶長 19 年に始まったキリシタン禁制が 262 年ぶりにその効力を失うこととなった。そして明治 8 年(1875)には、大浦天主堂の隣に羅典神学校が設立され、日本人聖職者の養育が始まり、長崎は再び南日本での宣教活動の中心地となった。</p>
関連する主な歴史文化遺産等	<p><b>有形</b>  <b>関連遺跡等:</b> トードス・オス・サントス跡(春徳寺)【県指定史跡】、ミゼリコルディアの教会跡(大音寺)、サン・ジョアン・バプティスタ教会跡(本蓮寺)、サンタ・マリア教会(岬の教会)跡(長崎奉行所西役所跡)、サント・ドミンゴ教会跡(長崎代官屋敷)、山のサンタ・マリア教会跡(長崎奉行所立山役所跡)、日本二十六聖人殉教地【県指定史跡】、潜伏時代のキリシタン墓碑【市指定史跡】、大浦天主堂【国宝】、旧羅典神学校【重要文化財】、旧長崎大司教館【県指定有形文化財】、浦上天主堂(浦上村庄屋高谷家宅跡)、馬込教会【国登録有形文化財】等  <b>関連資料:</b> 初期洋風画、聖具 等</p> <p><b>その他</b>  <b>キリスト教関連人物:</b> 大村純忠、有馬晴信、長崎純景、天正遣欧使節、ルイス・デ・アルメイダ、日本二十六聖人、アレックスandro・ヴァリニアーノ、ルイス・フロイス、ベルナール・プティジャン、岩永マキ 等  <b>関連資料所蔵・展示館:</b> 日本二十六聖人記念館、長崎歴史文化博物館、純心大学博物館、ド・ロ神父記念館、旧羅典神学校キリシタン資料室</p>



<p>テーマ</p>	<p>F-2 ド・ロ神父のまちづくり</p>
<p>概要</p>	<p>外海地方は 16 世紀後半にキリスト教が伝えられ、江戸幕府による禁教下においても、多くの人々が潜伏して信仰を継続してきた地域である。明治 12 年(1879)、外海地区の担当となったド・ロ神父は、布教に努めるとともに、信徒の生活安定のために救助院の開設、加工工場や農作業場の設置といった、幅広い福祉活動や授産事業に尽力した。土木技術の分野でも、地元の石積技術に改良を加えた「ド・ロ壁」を開発した。現在、西出津町を中心に、ド・ロ神父の手がけた出津教会堂や救助院などの建造物が残り、独特の集落景観を形成している。</p> <p><b>●潜伏キリシタンの文化</b></p> <p>禁教下の潜伏キリシタンは、潜伏組織を作って密かにオラシヨ(祈り)を唱え、観音像を聖母マリアに見立て(マリア観音)、神父不在の下での信仰生活の基準を示すバスチャン暦と呼ばれる日繰(祝日表)による生活を行い信仰を保ち続けた。</p> <p>明治 6 年(1873)の禁制高札の撤去後は、信仰の自由を取り戻したが、250 年もの間、司祭も書物もほとんど無い状態で信徒らだけで独自に信仰を引き継いでいたため、解禁されてもカトリックに復帰せず、潜伏時代の信仰を維持していった「カクレキリシタン」と呼ばれる人々もいた。</p> <p>外海地区も多くの潜伏キリシタン組織が継承されてきた地域で、バスチャン暦を潜伏キリシタンに伝えた日本人伝道師バスチャンの師であるサン・ジワンを祀った<sup>かしまつ</sup>枯松神社をはじめ、バスチャン屋敷跡や、次兵衛神父が潜伏していた岩洞窟などが残る。また、潜伏時代の信仰を継承する組織は、高度成長期の人口流出や、信仰の中心となる役職者の世代交代が困難なことなどにより戦後急速に減少したが、現在も下黒崎や西出津で継承されている。</p> <p><b>●ド・ロ神父の遺産</b></p> <p>明治期に入り、出津地区では、プティジャン神父の来訪によりカトリック教会への復帰が始まり、明治 12 年(1879)には外海地区の司祭にマルコ・マリ・ド・ロ神父が赴任した。ド・ロ神父はフランスの貴族の家に生まれ、プティジャン神父の要請により、慶応 4 年(1868)に 28 歳で来日、大浦天主堂で石版印刷や羅典神学校の建設など多くの功績を残した後、外海に赴任した。</p> <p>当時の外海は狭くて小さな痩せた段々畑ばかりで、人々の生活は貧しかった。そのため、ド・ロ神父は、信者達の生活安定のために、信仰の拠点として出津教会堂や大野教会堂を建設しただけでなく、私財を投じて授産・福祉施設を設立し、荒野を開拓して農業を教え、港に防波堤を整備して漁民を助け、伝染病治療など医療救護事業を通して多くの命を救うなど、多彩な才能で外海のために尽くした。</p> <p>現在でも、外海地区には大野や出津、黒崎を中心に、キリスト教の文化やド・ロ神父のまちづくりの痕跡が残されており、結晶片岩を使用した石積みの家屋や石垣などが残る集落景観や、ド・ロ神父ゆかりの教会関連施設がある景観など、外海地区の独特の景観を形成している。</p>
<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>	<p><b>有形</b></p> <p>関連遺跡・建造物等: 枯松神社【市指定史跡】、外海キリシタン関係伝承地(バスチャン屋敷跡、次兵衛岩洞窟)【市指定史跡】、<sup>かしやま</sup>檜山潜伏キリシタンの跡、潜伏キリシタンの殉教地・墓碑、出津教会堂、大野教会堂、旧出津救助院【以上重要文化財】、大平作業場跡【市指定史跡】、ド・ロ神父の墓 等</p> <p>文化的景観: 外海の石積集落景観【国選定重要文化的景観】、教会を中心とする集落景観(大野、出津、黒崎) 等</p> <p>関係資料: 木版画筆彩<sup>れんごく</sup>「煉獄の靈魂の救い」、出津のプラケット「無原罪の聖母」【以上県指定有形文化財】、中国製キリスト教木版画、石版「キリシタン暦」【以上市指定有形文化財】 等</p> <p><b>無形</b></p> <p>口頭伝承: オラシヨ 等</p> <p><b>その他</b></p> <p>関連資料所蔵・展示館: 外海歴史民俗資料館、日本二十六聖人記念館、長崎歴史文化博物館、純心大学博物館、ド・ロ神父記念館、旧羅典神学校キリシタン資料室</p>

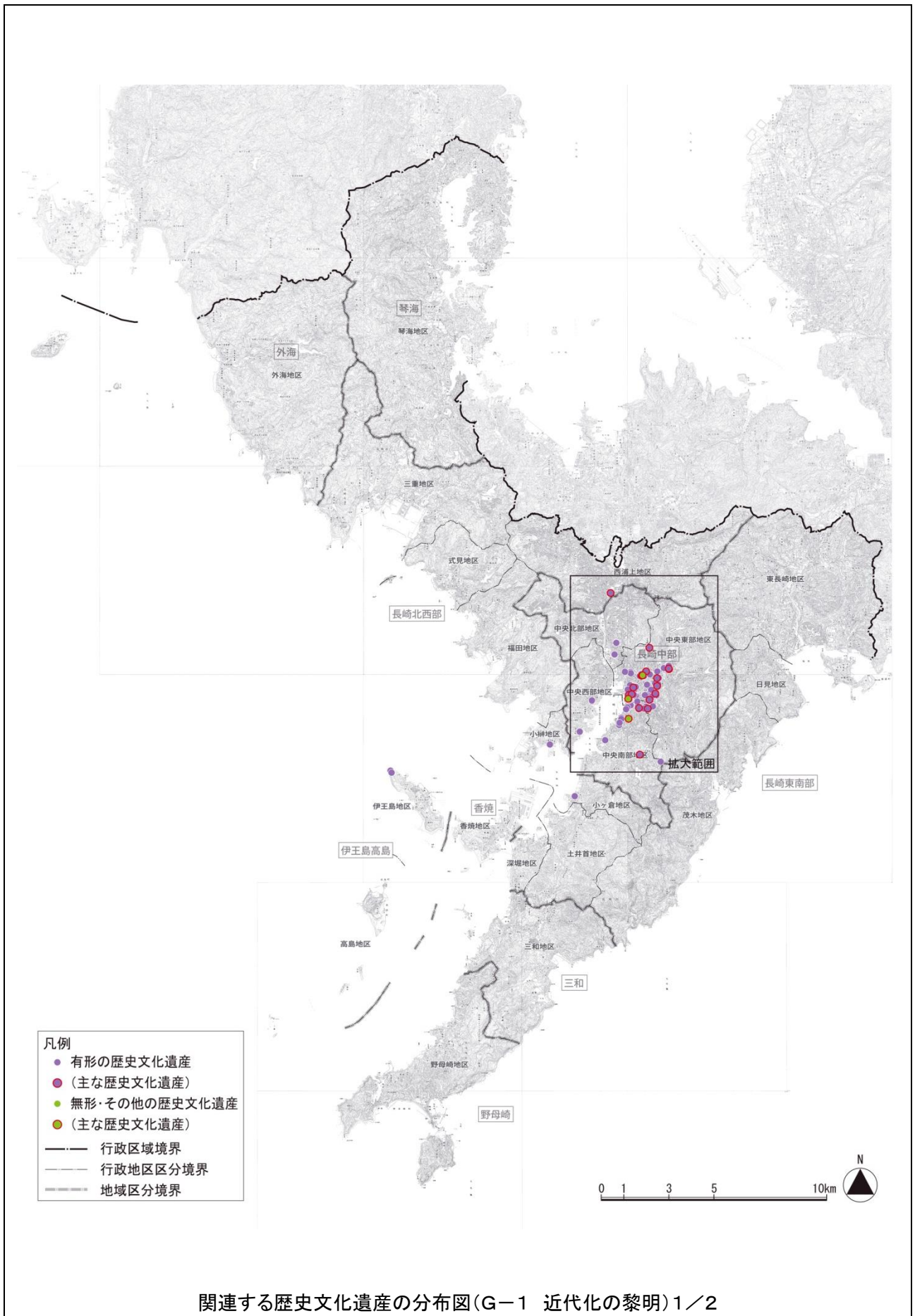


関連する歴史文化遺産の分布図(F-2 ド・ロ神父のまちづくり)

## G 近代化の先進地

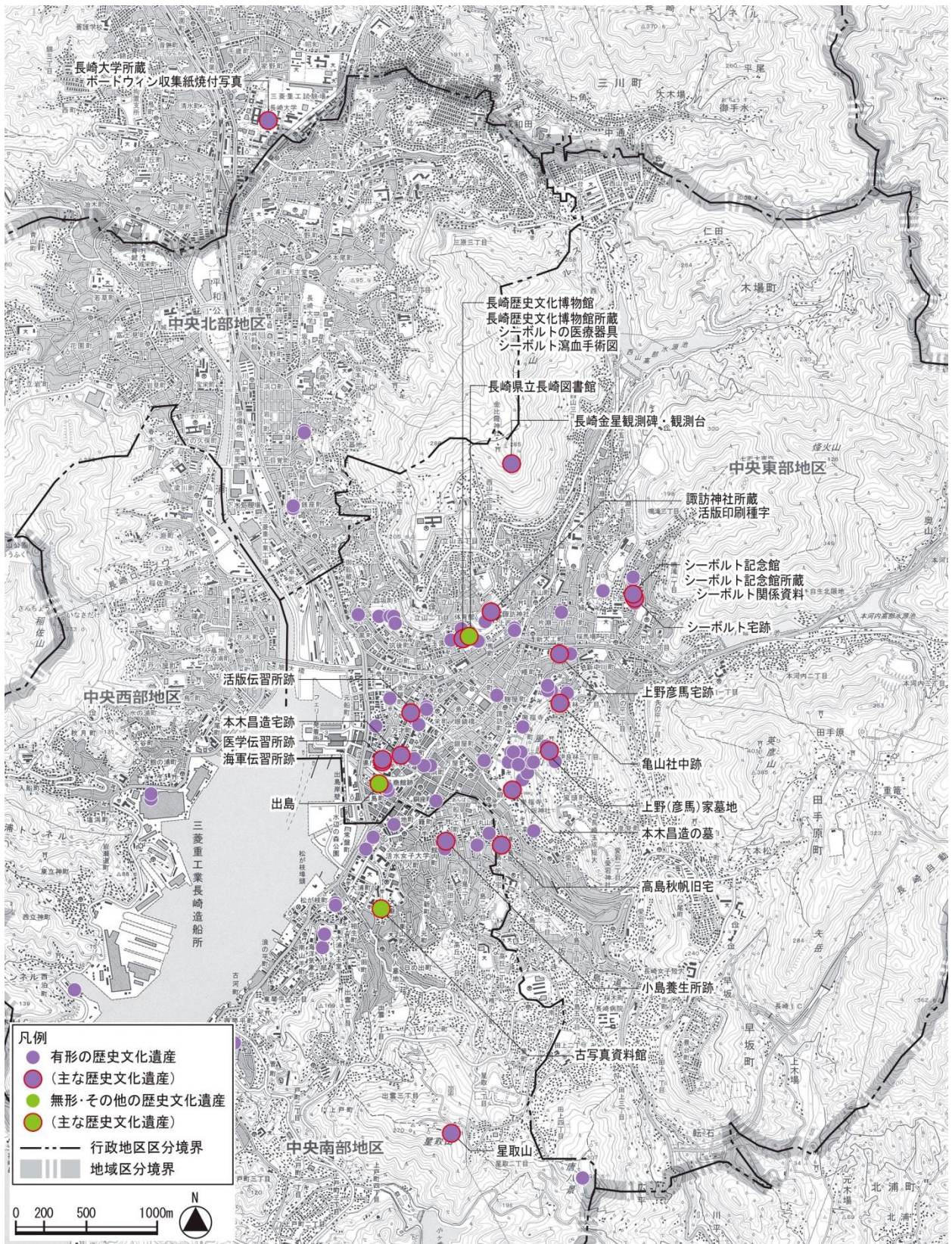
テーマ	G-1 近代化の黎明
概要	<p>幕末の長崎には、海外から最先端の西洋技術や情報がもたらされ、それを求める多くの人々が全国から集まった。長崎から発信された西洋科学やその思想は、やがて、様々な分野において時代をリードする原動力となり、日本の近代化につながる基礎を築いた。</p> <p><b>●鳴滝塾と医学伝習</b></p> <p>文政6年(1823)にシーボルトが来日し、翌年に鳴滝に学塾が開かれた。鳴滝塾には、シーボルトの評判を聞き、多くの医師たちが日本各地から集まった。シーボルトは、ここを患者の治療や、門弟に対する医学・科学教育の場として、そして自らの日本研究の場とした。各地から集まった多くの門弟達は、ここでヨーロッパの進んだ学問を学び、やがて、その門弟達によって科学的な思想や西洋の新しい学問が日本各地に伝わっていった。</p> <p>また、安政4年(1857)に実施された海軍伝習の第2次伝習教師団には、幕府の医学・博物学の教授招集の要望を受けて軍医ポンペが派遣された。同年末には幕府から派遣された医師松本良順の援助によりポンペの講義が始まり、大村町に医学伝習所が開かれた。翌5年夏、長崎から大流行したコレラにポンペは防疫や治療に当たり、その貢献により十善寺郷の唐人屋敷の裏山に病院が建設され、さらに小島養生所が開設された。</p> <p>小島養生所は、我が国初の近代的なヨーロッパ式の病院、医学校と呼ばれ、その後も精得館など名称を変えつつ医学教育が行われており、長崎は近代医学の発祥地として、その発展に貢献した。</p> <p><b>●西洋砲術の研究・開発と海軍伝習</b></p> <p>高島四郎兵衛茂紀と秋帆の父子は、シーボルトとともに来日した商館長スチュルレルなどのオランダ人にヨーロッパの砲術や銃陣・製砲技術等を学んだ。特に、高島秋帆は、町年寄の特権を利用して個人的に砲術書をはじめ多くの蘭書や武器を収集・購入し、自ら大砲の铸造や戦術の工夫を重ね、天保5年(1834)に高島流砲術を完成させた。この砲術は、各種銃砲の铸造法、弾丸及び火薬の製造法、発射法から西洋銃陣の編成法を含む総合的な砲術であり、秋帆の下には多くの九州内の藩士が入門し、高島流砲術は九州の雄藩に伝播していった。天保11年(1840)のアヘン戦争の後に武装強化が高まる中、秋帆は江戸において洋式砲術と洋式銃陣の演習を行い、高島流砲術を伝授した。</p> <p>嘉永7年(1854)にアメリカ、イギリス、ロシアが和親条約を締結する状況を受けて、長年日本と独占的な通商関係を築いてきたオランダも、諸外国への幕府の対応に協力しつつ、自らも条約締結に向けて対日交渉を進めた。その過程の中でオランダによる海軍伝習計画が浮上し、幕府はこれを受けて安政2年(1855)に海軍伝習所が開所された。オランダ教師団を迎えて実施された海軍伝習は、第1次(安政2年)と第2次(安政4年)を合わせて4年という短い期間であったが、西洋の近代科学技術が日本において組織的に教授された最初の機会であっただけでなく、実習を含む技術習得や、実測図・海図の作成など、次世代に残る様々な成果を生み出し、幕臣の勝麟太郎(海舟)や榎本武揚、小野友五郎、佐賀藩の佐野常民、薩摩藩の五代友厚、津藩の柳樽悦など、幕末明治の海軍や造船、鉄道を中心とする様々な分野で活躍する人材を輩出した。</p> <p><b>●活版術、天文学、写真術等の多様な分野の近代化</b></p> <p>医学や軍事関係以外の分野においても、最先端の技術・情報が長崎にもたらされ、全国に発信された。</p> <p>&lt;活版術&gt;</p> <p>海外情報入手の機運が高まるにつれ、日本での印刷による書籍の供給が急務となった。そのため、長崎奉行が活字板摺立所を設立し、キリシタン版以降途絶えていた金属活字を用いた活字印刷がはじまった。</p> <p>活字板摺立所の取扱掛には、幕末・明治期の活版印刷の先駆者と言われる本木昌造が任命された。本木昌造は、その後長崎製鉄所頭取時代に製鉄所附属の活版伝習所を設立して活字製法技術を習得し、伝習所廃止後も自ら活版所を起して活字製造と印刷に従事しつつ、技術者の育成に努めた。本木昌造の活字は全国に広がり、近代日本における印刷文化の基礎を築いた。</p>

概要	<p>&lt;天文学&gt;</p> <p>天文学の分野では、日本に初めてコペルニクス説(地動説)を紹介した阿蘭陀通詞の本木良永の名があげられる。本木良永は、平戸藩主や老中松平定信の命により、天文・地理学を中心とする様々な蘭書の翻訳に携わり、学究的翻訳活動を行った。</p> <p>また、明治7年(1874)、金星日面通過観測の好適地であった日本に、フランス、アメリカ、メキシコの3カ国から天文観測隊が訪れた。長崎には、フランス隊が長崎港北側の金比羅山に、アメリカ隊が長崎港東側の大平山(星取山)で観測を実施した。金比羅山には記念碑が設置され、観測地は県指定史跡となっている。</p> <p>&lt;写真術&gt;</p> <p>日本の写真の開祖と言われる上野彦馬も、長崎から日本の近代化の基礎を築いた人物の一人にあげられる。上野彦馬は、蘭書から湿板写真術を知り、技術を習得、感光剤に用いる化学薬品の自製に成功するなど、化学の視点から写真術の研究を深めた。来舶外国人からも技術を習得し、文久2年(1862)には長崎に我が国初の写真館を開業した。上野は、坂本龍馬、高杉晋作ら幕末に活躍した志士や明治期の高官、名士の肖像写真を数多く撮影したことで知られる他、金星日面通過観測の観測写真撮影(日本初の天体写真)、西南戦争の戦跡撮影(日本初の戦跡写真)でも知られ、日本の写真の分野において歴史的、文化的にも高く評価されている。</p>
	<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>
有形	<p>医学関係:シーボルト宅跡【国指定史跡】、小島養生所跡、医学伝習所跡、シーボルト関係資料【重要文化財】、シーボルトの医療器具、シーボルト瀉血手術図【国認定旧重要美術品】等</p> <p>軍事関係:海軍伝習所跡、亀山社中跡、高島秋帆旧宅【国指定史跡】等</p> <p>印刷関係:活版伝習所跡、活版印刷種字、本木昌造の墓【市指定史跡】、本木昌造宅跡等</p> <p>天文学関係:長崎金星観測碑・観測台【県指定史跡】、星取山等</p> <p>写真関係:上野(彦馬)家墓地【市指定史跡】、上野彦馬宅跡、ボードウィン収集紙焼付写真【国登録有形文化財】等</p>
その他	<p>近代化に関連する人物:シーボルト、ポンペ、ボードウィン、ハラタマ、マンスフェルト、松本良順、高島秋帆、勝海舟、榎本武揚、小野友五郎、佐野常民、五代友厚、柳檜悦、坂本龍馬、本木昌造、平野富二、本木良永、上野彦馬等</p> <p>関連資料所蔵・展示館:出島、シーボルト記念館、長崎歴史文化博物館、長崎県立長崎図書館、古写真資料館等</p>



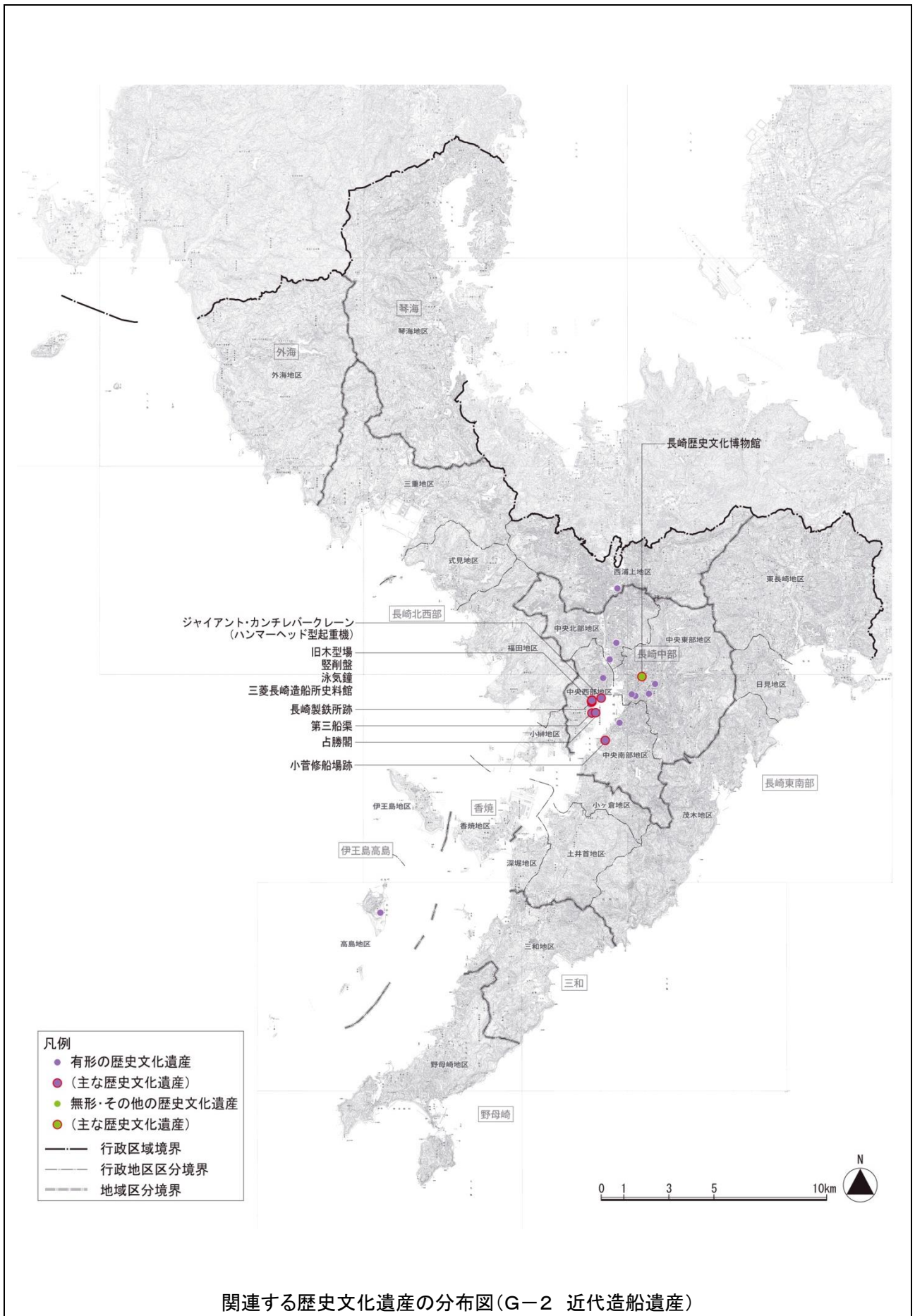
関連する歴史文化遺産の分布図(G-1 近代化の黎明)1/2





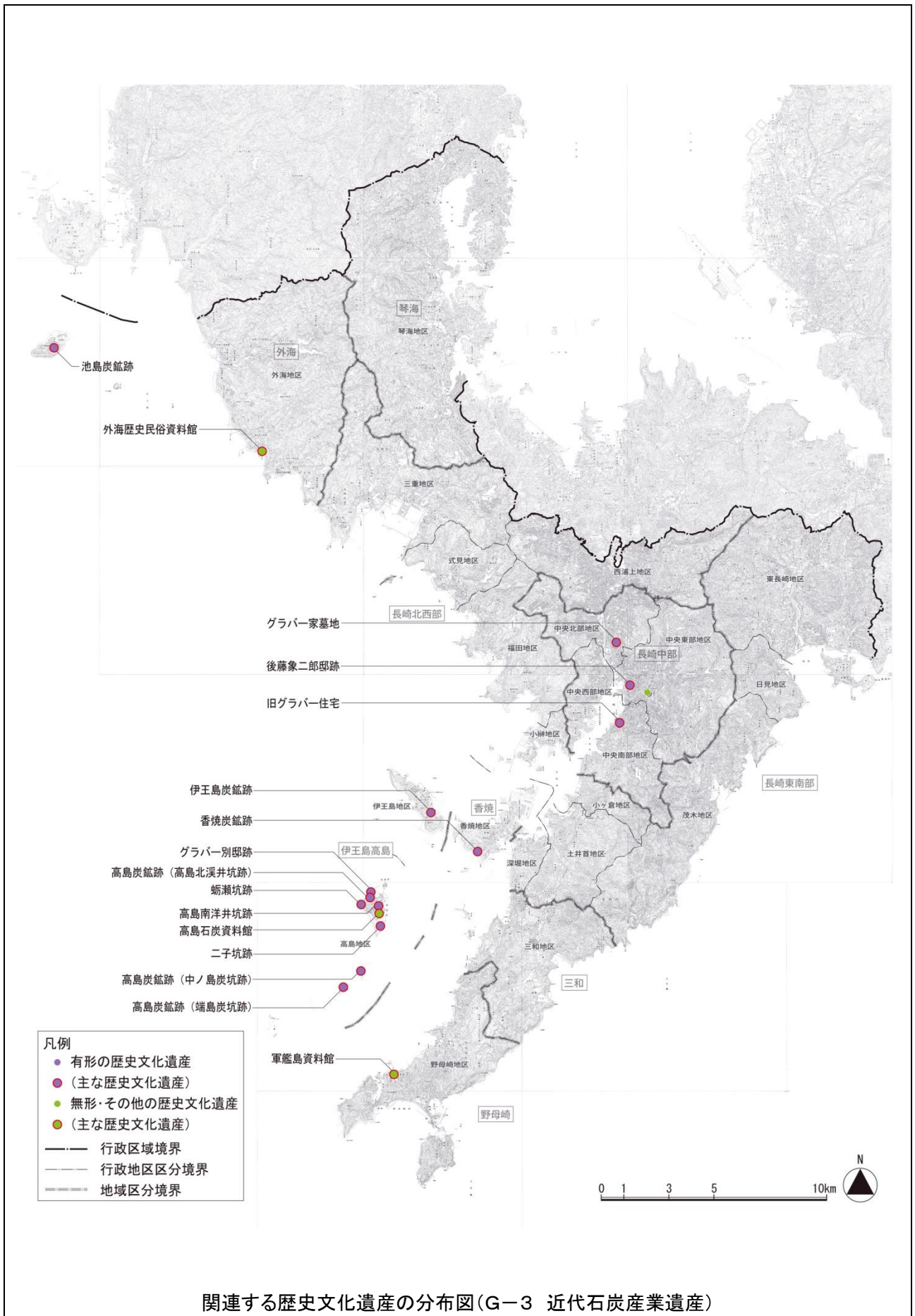
関連する歴史文化遺産の分布図(G-1 近代化の黎明)2/2

テーマ	G-2 近代造船遺産	
概要	<p>安政 4 年(1857)、大型船の造船・修船工場として、オランダ海軍の指導のもとに創設された長崎鋳鉄所は、明治になって官営工場となった後、明治 17 年(1884)から三菱の経営となった。西洋の技術をいち早く導入した設備投資などにより、世界の一流水準に到達し、現在の三菱重工業(株)長崎造船所へと続いている。我が国における近代造船業の一大拠点として、明治日本の急速な産業近代化を証言する歴史的、技術的価値を伝えている。造船業は今日も長崎における主要産業として引き継がれており、各地に近代造船関連の遺構が残る。</p> <p>●長崎製鉄所から長崎造船所へ</p> <p>安政 2 年(1855)の海軍伝習所開始に伴って、2 年後に浦上村淵掛<sup>あぐのうら</sup>に軍艦を修理する鋳鉄所の建設が着手された。敷地内には、鍛冶場、鋳物場、轆轤盤細工所(工場)を中心とする諸施設が建てられ、工作機械類の動力には蒸気機関が使用された。万延元年(1860)長崎製鉄所と改称、文久元年(1861)に工場が落成した。轆轤盤細工所に設置された堅削盤は現存しており、重要文化財に指定されている。</p> <p>製鉄所は、長崎奉行が管理し、オランダ人技術者に頼りつつ、役人及び地役人たちによって運営された。その後、明治 4 年(1871)には工務省の所管となって長崎造船所と改称され、名称が長崎製作所、長崎工作分局、長崎造船局と変遷し、明治 17 年(1884)に郵便汽船三菱会社に貸与された後に三菱社に払い下げられた。</p> <p>●小菅修船場</p> <p>国際貿易港として多くの船舶が往来する長崎港において、船舶修理を行う施設の必要性から、薩摩藩士五代才助、小松帯刀とスコットランド商人トーマス・グラバーの協力の下、明治元年 12 月(1869 年 1 月)、小菅修船場が建設された。明治 2 年に明治新政府が買収、長崎製鉄所が管理し、明治 20 年(1887)に三菱社の所有となった。我が国で初めて蒸気機関を導入した、蒸気機関を動力とする曳揚げ装置を装備した洋式スリップドックである。曳揚げ小屋には、こんにやく煉瓦が使用されており、現存する日本最古の煉瓦造建築である。また、曳揚げ装置は英国製でグラバーが輸入したものである。</p> <p>●三菱長崎造船所</p> <p>三菱は、明治初めに岩崎弥太郎<sup>いわさきやたろう</sup>によって海運業を営む汽船会社として創設され、明治 14 年(1881)には高島炭鋳を買収したことで長崎との繋がりも深まっていた。長崎造船所の経営を引き継いだ三菱は、当時三菱が所有していた横浜の修船工場から外国人を派遣して組織体制を再編成した。そして、長崎造船所の経営を軌道に乗せ、イギリスをはじめとした諸外国の造船業に追いつくために、技術者を育成することに力を注ぎ、巨額な設備投資を継続して積極的な受注を行うことを通じて建造経験を積んでいった。また、造船所内への病院の建設や「職工救護法」による職工への補助制度の導入等による福利厚生策、「三菱工業予備学校」による工業教育等、職場環境の改善などを図り、企業組織内部における様々な改革を通じて長崎造船所は経営の基盤を確立した。</p> <p>●造船の町長崎</p> <p>長崎の造船業は、天然の良港である長崎港を中心として発展してきた。各地に所在する中小造船所の多くは、昭和初期に木造船の造船所として始まり、戦後は、主に長崎を根拠地とする底引き網漁船やまき網漁船などを中心とした鋼鉄船の造船所へと発展していった。現在も、貨物船や旅客船など、様々な船の建造を行っており、三菱重工長崎造船所とともに長崎の基幹産業である造船業を支えている。</p>	
歴史文化遺産等	有形	<p>関連遺跡：小菅修船場跡【国指定史跡】、三菱重工長崎造船所〔長崎製鉄所跡、ジャイアント・カンチレバークレーン(ハンマーヘッド型起重機【国登録有形文化財】)、第三船渠、旧木型場、占勝閣〕等</p> <p>関連資料：堅削盤【重要文化財】、泳気鐘 等</p>
	その他	<p>造船に係る人物：五代友厚、小松帯刀、山田宗次郎、若松屋善助、トーマス・グラバー、岩瀬公圃、岩崎弥太郎 等</p> <p>関連資料所蔵・展示館：三菱長崎造船所史料館、長崎歴史文化博物館 等</p>



<p>テーマ</p>	<p>G-3 近代石炭産業遺産</p>
<p>概要</p>	<p>五島灘に浮かぶ島々の海底を中心に分布する西彼杵炭田は、すでに江戸時代から石炭採掘が行われていたが、幕末、蒸気船の燃料としての石炭需要の増大に伴い、高島において、西洋技術と西洋資本が導入され近代的炭鉱として出発した。その後、三菱などの巨大資本も参入し、高島のほか端島や中ノ島、香焼、伊王島など周辺の島嶼部においても石炭産業が発展し、日本のエネルギー経済を支え続けた。昭和に入ると、外海地区池島においても石炭採掘が行われ、地域の主要産業の一つとなった。</p> <p><b>●高島炭鉱の開発</b></p> <p>日本は、19世紀の東アジアにおいて、遠洋航路用蒸気船に良質な石炭を供給できる唯一の地域であった。高島炭鉱は、安政の開国後に急速に伸びた蒸気船燃料としての石炭需要の増大を背景に、開港場長崎の近隣に位置するという地理的特性も相まって、明治時代前期には、その出炭量において主要な地位を占めるまでに成長した。この急速な成長・発展は、高島炭の優良な炭質が商品価値として内外において注目され、全国に先駆けて、西南雄藩の一つである佐賀藩によって、外国資本と外国技術が積極的に導入されたことを契機としている。</p> <p>慶応4年(1868)、佐賀藩とグラバー商会との出資事業により開発された高島北溪井坑は、外国資本と外国技術が我が国において初めて導入された炭坑であり、蒸気機関を動力とした。現在坑口などが保存されており、国の史跡に指定されている。明治4年(1871)には南洋井坑も操業を開始したが、明治7年(1874)に炭鉱の経営権は工部省鉦山寮の管轄となり、その後藤象二郎に払い下げられた。その後、明治14年(1881)岩崎弥太郎が正式に鉦業権を取得、三菱の本格的な高島炭鉱事業が開始された。高島には各地に坑口跡や炭坑施設の跡が見られる。また、高島の南に位置する中ノ島は明治17年(1884)に、その南に位置する端島は明治23年(1890)に、それぞれ三菱が取得して経営した。高島北溪井坑跡、中ノ島炭坑跡、端島炭坑跡は近代炭鉱の発展や海底炭鉱の特性を示す遺構等が残されており、国史跡となっている。</p> <p><b>●三菱の炭鉱経営</b></p> <p>三菱は、自社の海運力を活かして上海や香港を中心に、シンガポールやサイゴン、マニラなど幅広く高島炭を出荷した。三菱はその後、明治34年(1901)に高島の蛎瀬坑(～大正12年)、明治40年(1907)に高島の二子坑と炭鉱事業を拡大した。第1次大戦後の反動不況下でも近代化を進め、やがて第2次大戦に突入すると国家の要請によって増産に励み、造船業と石炭業によって三菱の基盤が強化された。</p> <p>戦後も、石炭鉦業は日本の産業基盤を担い、長崎県の基幹産業であったが、昭和30年代に入ると石油に押されていった。高品質の石炭を産出した高島は三菱グループの中でも優良鉱として開発が進められたが、昭和37年(1962)の原油輸入自由化で急速に競争力を失い、端島炭鉱は昭和49年(1974)、高島炭鉱も昭和61年(1986)に閉山に至った。</p> <p><b>●香焼・伊王島の炭鉱</b></p> <p>佐賀藩はグラバーとの高島炭鉱開発を機に、深堀家中及び民営からなる高島における炭鉱の閉山を命じ、その代償として補償金の支払いと、近隣島嶼部の炭鉱開発を認めた。これを受けて、香焼や伊王島なども炭鉱開発が始まった。このうち、香焼は安保地区を中心に炭鉱開発が進められ、明治32年(1899)大阪舎密工業が進出、その後も、川南鉦山、香焼鉦業と発展した。また、伊王島における大手資本の参入は昭和16年(1941)日鉄伊王島炭鉱の開坑からであるが、最盛期には人口7,600人を数えた。香焼は昭和39年(1964)、伊王島は昭和47年(1972)にそれぞれ閉山を迎えた。</p>

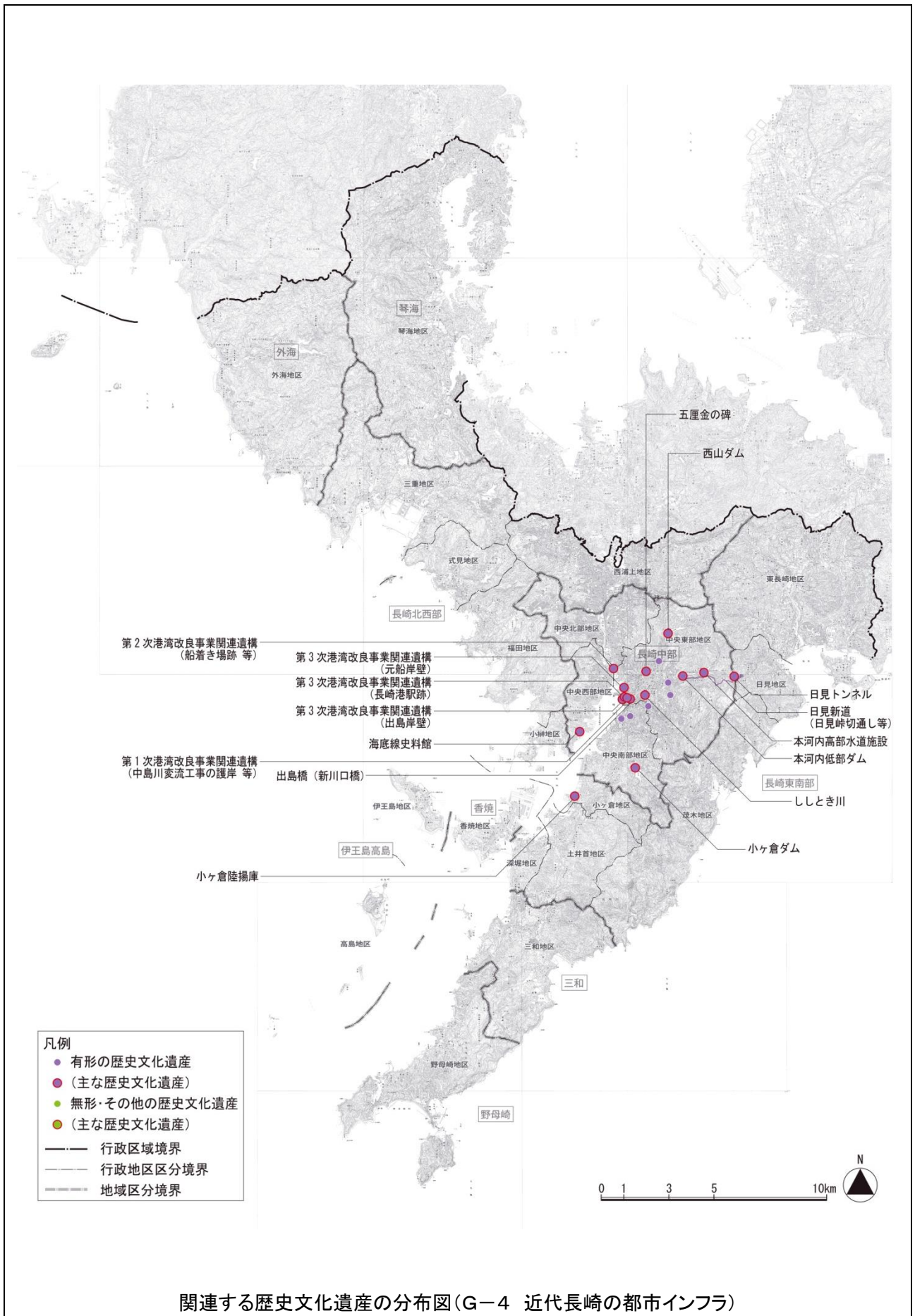
概要	<p><b>●池島の炭鉱開発</b></p> <p>池島では昭和 27 年(1952)から松島炭鉱(株)が開発を始め、同 30 年(1955)に着炭後、人工港を築造し、同 34 年から営業出炭を開始した。日本有数の炭質を誇ったことから優良鉱として資本が投下され、最盛期の昭和 45 年(1970)には採炭夫 1000 人が 3 交代で 24 時間操業し、池島の人口も 7000 人を超えた。</p> <p>しかし、石油等におされ、平成 13 年(2001)に閉山、翌年から国の炭鉱海外技術 5 カ年計画でアジア諸国の研修生に炭鉱技術を教えたが、同 20 年には終了し、島の人口は 300 人程度に減少した。現在は、トロッコ列車による坑内見学や石炭採掘の体験学習をはじめ、炭鉱跡を活用した産学官民の取組みが進められている。</p>
	<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>



テーマ	G-4 近代長崎の都市インフラ
概要	<p>明治期以降においても西日本における重要都市の一つであった長崎では、いち早く近代的都市への改造が推進された。明治15年(1882)から開始された第1次長崎港湾改良工事を皮切りに、下水道や近代水道施設、道路や橋梁などが各地で整備された。これらの建設にあたっては当時の先進技術が導入されており、我が国の土木技術史においても重要である。</p> <p><b>●近代の上下水道施設</b></p> <p>長崎市では、明治18年(1885)に死者600人を出したコレラの大流行を受けて、都市衛生に関する施策の必要性が問われ、翌年より長崎区内の下水溝の改修や水道施設の整備が進められた。</p> <p>明治19年より改修が進められた下水道は、既設の側溝を拡幅して整備された。幹線下水道6線の大溝のうち、3線の一部については、しとき川(第2線)のように、現在でも市内のいくつかの場所で見ることができる。</p> <p>また、衛生的な飲料水の確保に向けて外国人居留地の領事や住民からの激しい要求もあり、明治22年(1889)より近代水道の工事に着手した。最初の水道施設(本河内高部水道)は旧市街(旧長崎区内)及び外国人居留地を給水区域とし、中島川上流の本河内に建設された近代水道用ダムを水源とした。近代水道では横浜、函館に次いで国内3番目で、ダム式水道では日本初であった。その後も人口増などにより水道規模の拡大が求められ、明治33年(1900)から当時日本最大であった西山ダム建設する第1回長崎水道拡張事業が、大正8年(1919)から小ヶ倉ダムを水源とする第2回長崎水道拡張事業が実施された。</p> <p><b>●交通施設の近代化</b></p> <p>長崎の交通網の近代化に向け、明治10年(1877)に時津街道の改修が開始され、日見街道、茂木街道、野母街道と順次改修された。三方を山に囲まれた長崎では大規模な開削工事を伴い、特に日見峠の開削は難工事であった。明治中期には、日見街道は国道4号に、他の3線は県道になり、長崎県の主要道路となった。</p> <p>明治20年代以降、我が国においても「鉄道の時代」が本格化するが、長崎市まで鉄道が開通するのは明治30年代初頭まで待つこととなった。長崎市への鉄道敷設において最大の功労者である松田源五郎は、長崎の景況衰微を危惧し、明治18年頃には既に鉄道敷設に向けた活動を行っていたが、敷設は10年以上の月日を要し、明治30年(1897)に長崎～長与間、翌年に門司～長崎間の全線が開通した。</p> <p>また、都市内の移動手段として、路面電車が、大正4年(1915)に浦上～築町間が開通し、市街地中心部に拡大していった。路面電車の敷設は江戸時代の街区を残していた旧市街地に近代的な道路を建設することになり、都市構造を大きく変化させて近代的な沿道商店街を発展させることとなった。</p> <p><b>●港湾施設の近代化</b></p> <p>長崎奉行が管理していた長崎港は、明治維新後、管理が不十分となったため、中島川河口に膨大な土砂が堆積し、港の機能に支障が生じていた。そのため、長崎県の要請により政府の御雇外国人による調査が実施され、明治15年(1882)から約7年かけて、港の閉塞対策を中心とした第1次長崎港湾改良事業が実施された。</p> <p>その後、近代的な港湾施設を整備するために、大規模な埋立を行う第2次長崎港湾改良事業が明治30年(1897)から実施された。さらに、大正9年(1920)から大型船を接岸できる近代的な港湾施設を建設するために、第3次長崎港湾改良事業が実施された。港湾の修築後の昭和5年(1930)には長崎駅から出島岸壁に至る臨海線が開通し、長崎港駅が開業した。これにより、鉄道と航路が連絡された。</p>

概要	<p><b>●通信分野の近代化</b></p> <p>長崎市は、大陸に最も近い日本の西端の都市であることから、世界一周国際電信線の結節点となった。デンマークの大北電信会社により長崎—上海間、長崎—ウラジオストク間に海底電信ケーブルが敷設され明治4年(1871)に日本初の海外電報サービスが始められた。一方で、国内の電信では東京都国際線を結ぶ重要中継点でもあり、海底ケーブルによる国際電信の時代には、長崎市は日本で最も重要な都市であった。</p> <p>大北電信会社の施設の一部は長崎市が国際情報の近代化に果たした足跡を示す重要な近代化遺産として保存されている。</p>
	<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>

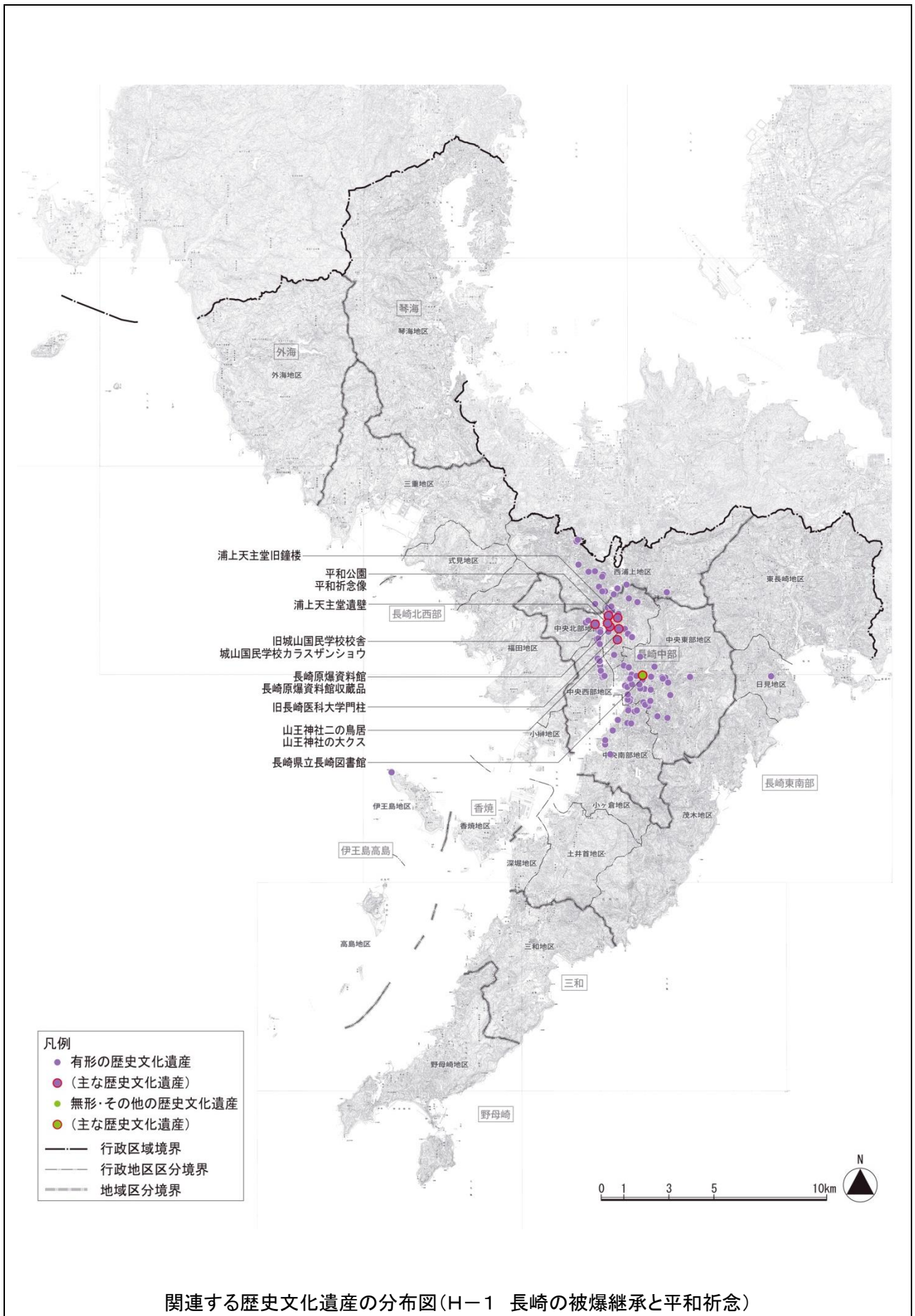




関連する歴史文化遺産の分布図(G-4 近代長崎の都市インフラ)

## H 平和都市長崎

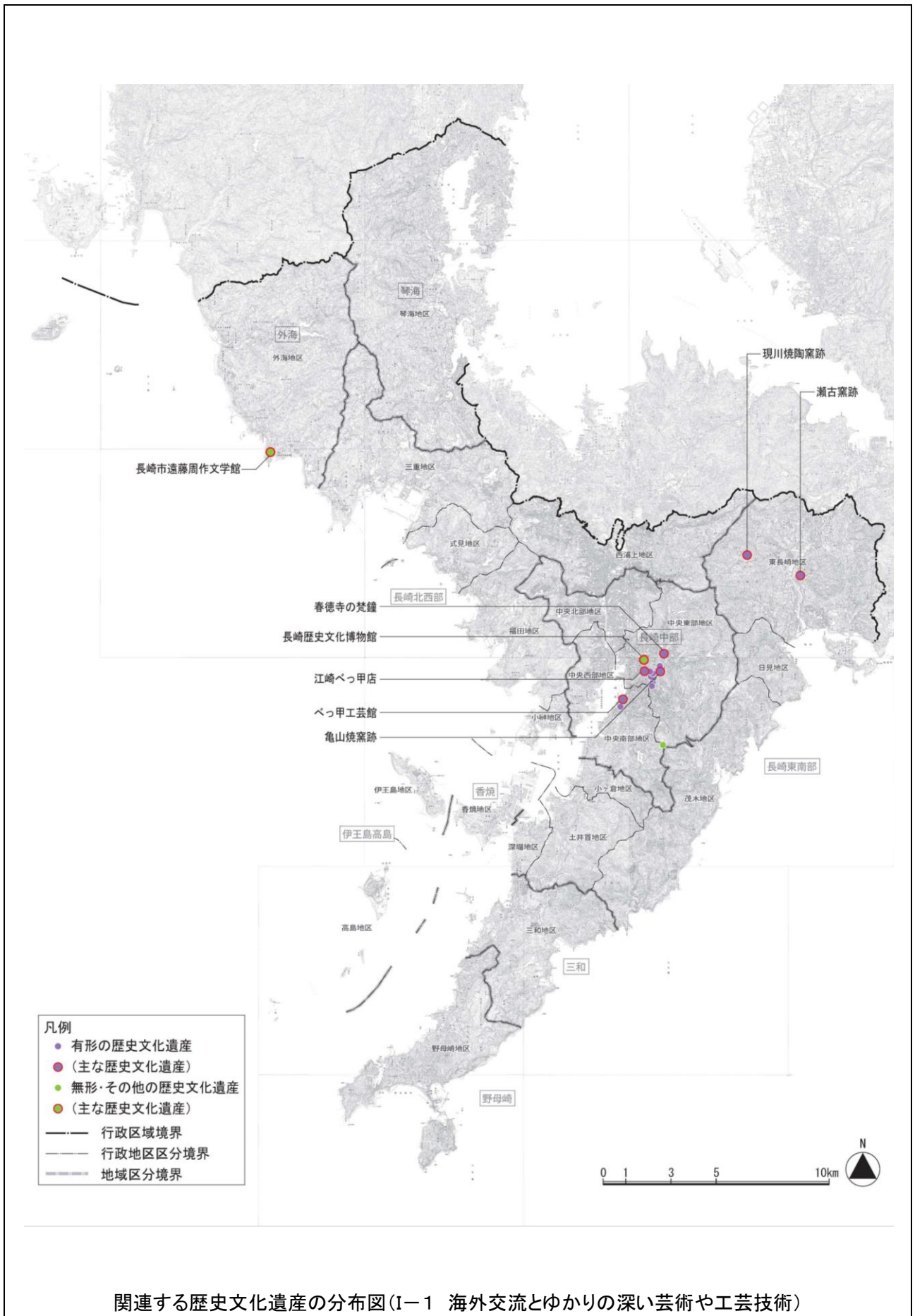
テーマ	H-1 長崎の被爆継承と平和祈念	
概要	<p>昭和20年(1945)に広島に次ぐ人類史上2発目の原子爆弾により壊滅的な被害を受けた長崎市には、被爆の実相を伝える原爆遺構が各地に残っている。</p> <p>昭和24年(1949)に原爆被災復興のための長崎国際文化都市建設法が制定され、復興事業が実施された。また、被爆の実相を伝え、世界平和と文化交流のための記念施設として、爆心地のある松山町を中心に平和公園が整備されている。</p> <p>平成元年(1989)に、核兵器廃絶と恒久平和を願う市民の総意として長崎市民憲章を制定した。</p> <p>毎年8月9日には、平和祈念像前において、原爆犠牲者を慰霊し、世界恒久平和の実現を祈って長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典を挙行している。</p> <p><b>●長崎原爆遺跡と被爆関連資料</b></p> <p>被爆の調査や資料保存は、文部省学術研究会議や市の原爆資料保存委員会によって行われ、昭和28年には広く市民に原爆資料の提供を呼びかけ、集まった資料は資料館で保存・展示されている。</p> <p>また、長崎市の原爆被爆50周年記念事業の一つとして、被爆した建造物、工作物・橋梁、植物を対象にした調査結果が平成8年にまとめられ、現存する被爆建造物等を137ヶ所、滅失した被爆建造物22ヶ所が整理されている。平成25年(2013)、「長崎原爆遺跡」として旧城山国民学校校舎を含む4件が国の登録記念物に登録された。</p> <p><b>●戦後復興と平和祈念</b></p> <p>原爆被災からの戦後復興のため、特別法として昭和24年(1949)に長崎国際文化都市建設法が公布され、道路や公園など、現行の都市計画を見直し、昭和26年(1951)平和記念施設の建設などを盛り込んだ長崎国際文化都市建設計画を新たに決定し、本格的な復興に着手した。</p> <p>爆心地周辺は平和公園として整備され、昭和30年(1955)には平和都市長崎のシンボルとなる長崎国際文化会館が4月に完成して原爆資料室を移転して開館、8月には北村西望作の「平和祈念像」が設置された。平和公園は、再整備を経て平成20年(2008)、国の登録記念物に登録された。このほか、市内の学校や公園などには、市民などにより様々な慰霊碑や記念碑が設置されている。</p> <p><b>●原爆文学と被爆の実相の記録</b></p> <p>戦後の長崎の文学は、原子爆弾を題材としたものから始まった。風木雲太郎の韻文作品「郷愁 浦上天主堂附近」(『午前』創刊)が昭和21年(1946)に発表され、その後、福田須磨子や林京子、竹山広など、記録性の高い作品や自身の被爆体験をもとにした作品が相次いで出版された。それらの中で最も強い影響を後世に残した永井隆の『長崎の鐘』は、映画化や舞台化が行われ、映画の主題歌「長崎の鐘」は、被爆地であり、平和都市である長崎のイメージを世の中に定着させた。</p> <p>被爆の実相の記録については、被爆者、被爆者団体の取組みを中心に被爆の実相を伝えるため被爆者の体験を記録した数多くの証言集が発行されている。</p> <p>また、昭和52年から昭和60年(1977～1985)にかけて、被爆の実相をあらゆる角度から正確にとらえ、正しい記録を後世に伝えるために、長崎原爆戦災誌(全5巻)が発刊された。</p>	
関連する主な歴史文化遺産等	有形	<p>関連遺跡: 旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社二の鳥居【以上国登録記念物】、山王神社の大クス【市指定天然記念物】、浦上天主堂遺壁、城山国民学校カラスザンショウ 等</p> <p>関連施設: 平和公園【国登録記念物】、平和祈念像、慰霊碑・記念碑・原爆文学の句碑 等</p> <p>原爆関連資料: 長崎原爆資料館収蔵品(被爆物、遺品、写真 等) 等</p>
	その他	<p>原爆文学: 風木雲太郎「郷愁 浦上天主堂附近」、石田雅子『雅子倒れず』、島内八郎他『長崎—十二人の原爆体験記録』、永井隆『長崎の鐘』、福田須磨子『原子野』、林京子『祭りの場』、後藤みな子「刻を曳く」、井上光晴「手の家」、佐多稲子『私の長崎地図』、山田かん『記憶の固執』、原口喜久也『現代のカルテ』、松尾あつゆき『原爆句抄』、竹山広『とこしへの川』 等</p> <p>被爆の実相の記録</p> <p>関連資料所蔵・展示館: 原爆資料館、長崎県立長崎図書館 等</p>



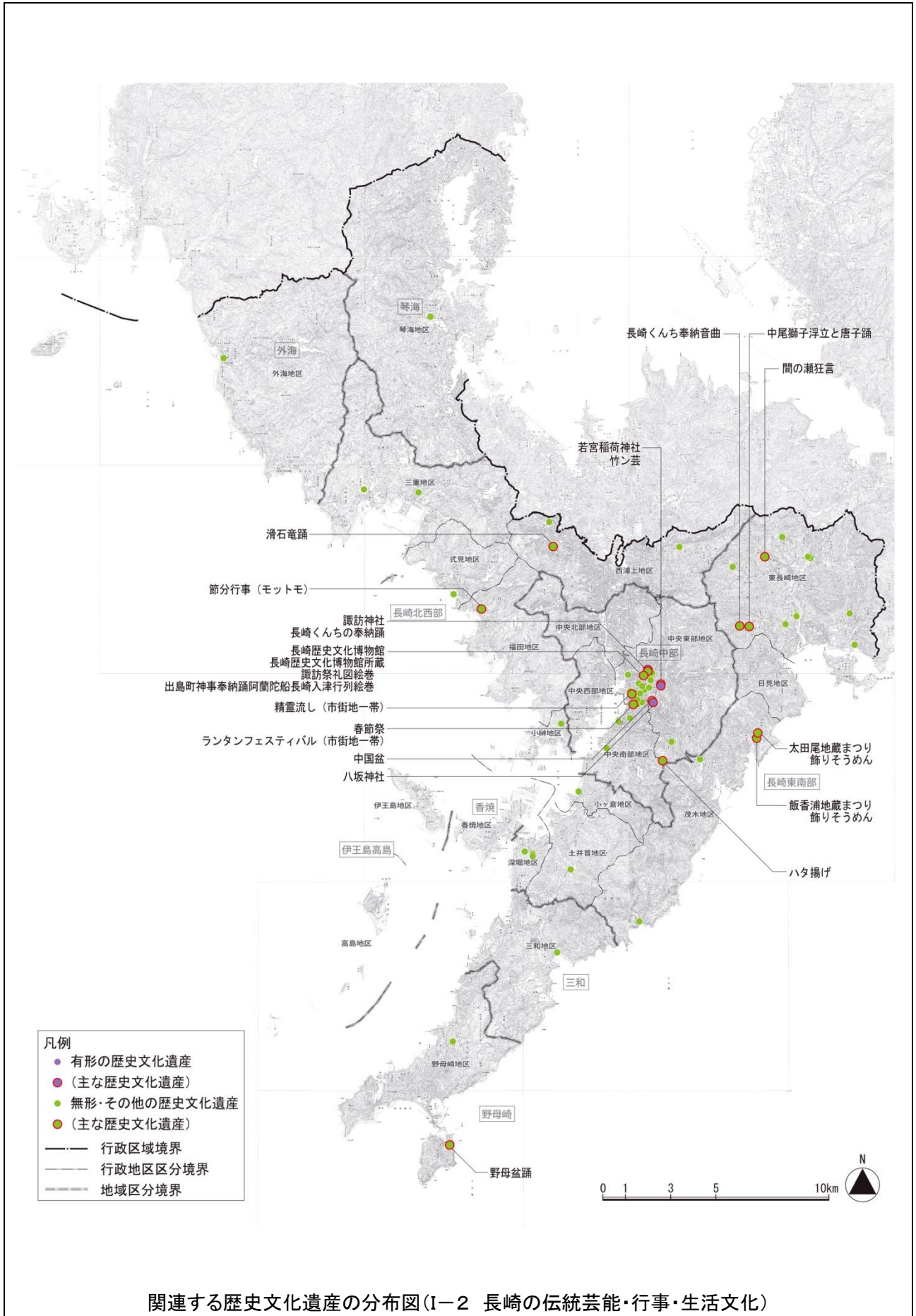
# Ⅰ 交流で培われた長崎の芸術・芸能、工芸、生活文化

<p>テーマ</p>	<p>Ⅰ-1 海外交流とゆかりの深い芸術や工芸技術</p>
<p>概要</p>	<p>16 世紀の長崎開港以来、交易のために訪れた貿易商人や渡来僧たちがもたらす大陸の新しい文化様式が受け入れられ、異国の文化に触れるために長崎に集まった多くの人々により全国に広まっていった。安土桃山時代にはキリスト教布教のための聖画をはじめとする西洋絵画がセミナリオの画学舎などで伝えられ、初期洋風画が発達し、江戸時代には中国からの影響により、長崎派絵画と総称される絵画が発達した。また、異国情緒あふれる長崎は、文学や音楽などにおいても、その題材として取り入れられていった。</p> <p>長崎の工芸品には、海外の技術の影響を受けたものや、海外向けの交易品として発展してきたもの、土産品として発展してきたものなどがある。それらのなかには、現在もその技術が継承されているものや、当時の文化を伝えるものとして作品が文化財に指定されているものなどもみられる。今日にその技術が継承されている代表的な伝統工芸としては、鼈甲や長崎刺繍などが挙げられる。長崎の異国情緒をモチーフとして人気の高い古賀人形も、起源は 16 世紀末までさかのぼると伝えられる。また、今日においては、その技術が途絶えてしまった工芸については、製品・作品が博物館等に保存されている。</p> <p><b>●長崎派絵画と長崎版画</b></p> <p>長崎派絵画は、江戸時代における日本で唯一外国に開かれた長崎の特異な地域性を反映して成立した絵画の総称であり、黄檗画派や唐絵目利派、南蘋派、洋風画派、文人画派などがあげられる。これらの画派のうち、最も早くに成立した黄檗画派は、中国から来航する黄檗僧によりもたらされた絵画で、その対象の形体表現にとらわれない自由な表現は、我が国の文人画の基礎となった。</p> <p>長崎版画は、一般に長崎絵とも呼ばれ、長崎で起こった出来事から題材を得たものが多く、船、紅毛人、紅毛人風俗、唐人、唐人風俗、動物、風景、地図などが題材となった。長崎でしか見ることができなかった異国人の風物を描いた長崎版画は、長崎を訪れた人々への土産絵として人気を博し、安政の開国まで盛んに制作された。</p> <p><b>●長崎を舞台にした文学等</b></p> <p>近代以降、長崎を舞台にした文学が多くみられる。近世では、遊女評判記『長崎土産』、藤本箕山の『色道大鏡』、西鶴の『好色一代男』『日本永代蔵』などの浮世草子類には、長崎を舞台にする作品が多数あるほか、長崎を訪れた商人、医師、俳人、画師、文人ら旅人の紀行文も多く残っている。</p> <p>近代の文学は、大正に入って活発となった。斎藤茂吉が大正 6 年(1917)に官立長崎医学専門学校(現在の長崎大学医学部)教授に赴任して阿蘭陀詩社を主宰した後、相次いで短歌結社がたてられた。また、昭和初年には『長崎文学』が創立され郷土の作家・詩人の母体となった。</p> <p>戦後の文学は、原子爆弾を題材としたものから始まり、記録性の高い作品や自身の被爆体験をもとにした作品が相次いで出版された。長崎の風土に強い関心を寄せた作家には司馬遼太郎、島尾敏雄、遠藤周作、吉村昭などがあげられる。遠藤周作は、自身のカトリックへの信仰をもとにして、禁教後のキリシタンの殉教と棄教を『沈黙』に描き出した。</p> <p><b>●長崎をモチーフにした歌謡曲</b></p> <p>国際交易都市として独特の歴史文化を持ち、異国情緒の観光地として人気があった長崎では、近代以降に長崎を素材にした流行歌謡が多く歌われた。特に、明治末期に登場したレコード、大正末期に開始されたラジオ放送の影響により、長崎の民謡・楽曲が全国に広まった。戦前では、「長崎ぶらぶら節」、「長崎港節」、「長崎行進曲」、「長崎物語」、戦後では、「長崎シャンソン」、「長崎のザボン売り」、「長崎の鐘」、「長崎の女」等が代表的なものである。</p> <p>高度成長期に入ると、有線放送やテレビ放送といった新たな媒体も加わり、長崎をモチーフとした楽曲はさらに広がりを見せた。代表的なものに「思案橋ブルース」、「長崎は今日も雨だった」、「精霊流し」等がある。</p>

概要	<p>●<b>鼈甲と長崎刺繍</b></p> <p>17世紀以降、唐船やオランダ船によって鼈甲細工の材料が長崎に輸入され、中国人から習得した技術で鼈甲細工が製作されるようになったという。明治時代にはロシア人など外国人に注目され、外国人向けの煙草入れや軍艦模型、櫛・簪・筭などが製作された。戦後は、観光地長崎の伝統工芸品として需要が高まり、置物、イヤリング、指輪、メガネのフレームなど多彩な製品が作られた。現在でも市内には鼈甲加工業者があり、鼈甲細工は長崎名物の一つとして定着している。</p> <p>長崎刺繍は、17世紀後半頃に伝えられた刺繍技術が長崎に定着したものとされている。特徴は、糸を縫って様々な太さの糸で質感を変化させていることや、縫った糸に着色して繊細な濃淡のぼかしを施していること、また刺繍の下に綿や紙縫を入れて立体感を出す「盛り上げ」がなされていることである。</p> <p>幕末から明治初期には、外国人向け製品も製作されたものの次第に衰退していったが、嘉勢照太により長崎刺繍の技術が復活・継承されている。</p> <p>●<b>技術が途絶えた工芸</b></p> <p>&lt;陶磁器&gt;</p> <p>長崎は、肥前陶磁器の主要生産地の周辺地にあたり、江戸時代には、諫早領で現川焼や瀬古焼、長崎の伊良林で亀山焼、稲佐で鵬ヶ崎焼などが焼かれていたことが知られる。これらは、国内消費地向けの日用品として生産されたものが中心であったが、中には今日において美術工芸品として高く評価されているものもある。</p> <p>&lt;金工(鋳物師)&gt;</p> <p>秀吉が朝鮮出兵の際に連れ帰った朝鮮の技術者達が、高麗町(後の鍛冶屋町)を構成し、隣に銀細工職人達の銀屋町が開かれたという。土圭(時計)細工、コンパスなどの天文道具、ポルトガルやオランダの風俗を取り入れた器物などの真鍮細工、唐物鋳物と呼ばれる中国風の花入れや卓、香炉などが作られた。鋳物師の安山一族は、数多くの寺院の梵鐘を製造した。金工の技術は、キリタン弾圧に使用した踏絵にも用いられた。</p> <p>&lt;長崎青貝細工&gt;</p> <p>17世紀前半に中国から伝えられたといわれる螺鈿技法を用いた青貝細工は、18世紀前半期には、すでに長崎で広く製作されていたと考えられ、ヨーロッパに輸出されていた。大正3年(1914)に技術者が亡くなったことにより一時途絶えたが、大正5年(1916)に二枝鼈甲店により再び螺鈿細工が開始された。</p> <p>&lt;長崎ガラス&gt;</p> <p>長崎にガラス製作の技法が南蛮人から伝わったのは、元和年間(1615～23)頃と伝えられ、「長崎ビードロ」とも呼ばれた。原料は茂木浦一帯から産する白石が使用されたという。幕末には、魚の町の傘鉾飾りなどが製作された。明治以降も生活用品などが製造されたが、戦後に幕を閉じた。</p>
	関連する主な歴史文化遺産等
<p><b>無形</b></p> <p>長崎を舞台にした文学等: 浮世草子類(『長崎土産』、『色道大鏡』、『好色一代男』、『日本永代蔵』等)、現代文学(『郷愁 浦上天主堂附近』〔風木雲太郎〕、『長崎の鐘』〔永井隆〕、『沈黙』〔遠藤周作〕等)        長崎をモチーフにした歌謡曲: 「長崎ぶらぶら節」、「長崎港節」、「長崎行進曲」、「長崎物語」、「長崎シャンソン」、「長崎のザボン売り」、「長崎の鐘」、「長崎の女」 等        工芸技術: 鼈甲工芸、長崎刺繍、古賀人形製作 等</p>	
<p><b>その他</b></p> <p>長崎派絵画や長崎版画に関連する人物: 黄檗画派(逸然性融、河村若芝、喜多元規 等)、唐絵目利派(渡辺秀石、広渡一湖、石崎元徳、荒木元慶、石崎融思 等)、南蘋派(沈南蘋、熊斐、眞村蘆江、荒木君瞻、渡辺鶴洲 等)、洋風画派(若杉五十八、荒木如元、川原慶賀 等)、文人画派(鉄翁祖門、木下逸雲、三浦梧門 等)        長崎を舞台にした文学に関連する人物: 近世の作家等(藤本箕山、西鶴 等)、現代の作家等(風木雲太郎、永井隆、島尾敏雄、遠藤周作、吉村昭 等)        関連資料所蔵・展示館: 長崎歴史文化博物館、長崎市遠藤周作文学館、べっ甲工芸館 等</p>	

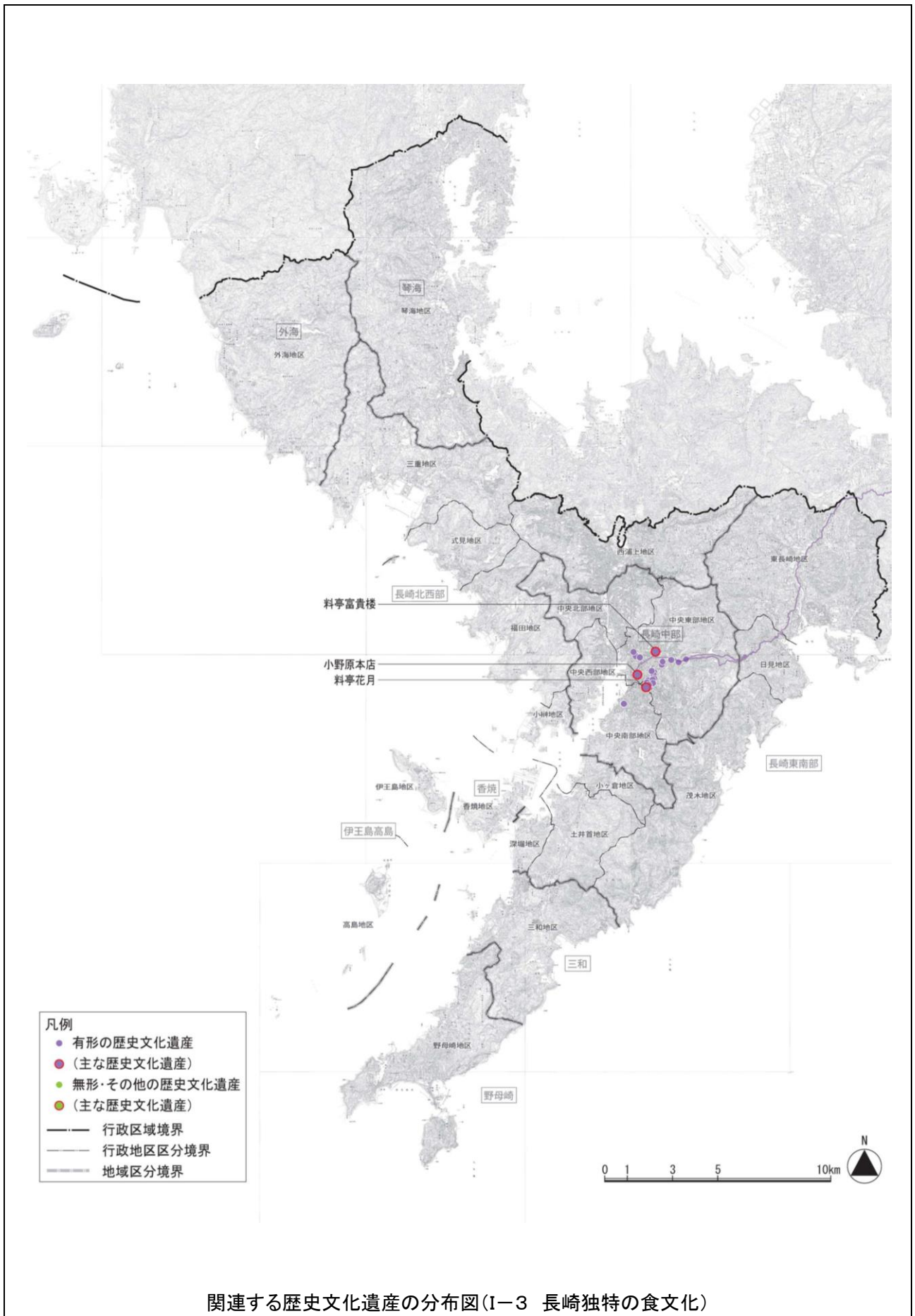


<p>テーマ</p>	<p>1-2 長崎の伝統芸能・行事・生活文化</p>	
<p>概要</p>	<p>長崎市内各地では、四季折々に様々な祭事・行事が行われているが、特筆すべき点としては、日本文化を基調としながらも、中国やオランダ等からもたらされた海外文化が融合した、異国情緒あふれる独特な祭事・行事となっていることが挙げられる。諏訪神社の大祭である「長崎くんち」をはじめ、「竹ン芸」や「滑石竜踊」、「浮立」、「地蔵祭飾りそうめん」など、各地に独特の民俗芸能が伝承されている。伝統行事としては、ペーロンやハタ揚げ、精霊流し、盂蘭盆などがあるほか、長崎の華僑の正月の祝事である春節祭は、今日「長崎ランタンフェスティバル」という、観光イベントとして定着している。</p> <p>●年中行事</p> <p>年中行事には、中国の彩舟流しの影響が見られる盆行事である「精霊流し」や、中国の競漕行事を継承し伝統的な市民のスポーツとして浸透している「ペーロン」も市内各地で行われている。また、長崎では「凧」のことをハタというが、長崎の春の風物詩となっている「ハタ揚げ」は、出島にやってきたインドネシア人から伝えられたといわれている。</p> <p>伝統的な祭事・行事以外では、中国の旧正月（春節）の祝賀行事を起源とする「長崎ランタンフェスティバル」や、16世紀末の長崎開港を記念して開催される「長崎帆船まつり」等、海外との文化交流の歴史にちなんだイベントが通年にわたって多数開催されている。</p> <p>●伝統芸能</p> <p>「くんち」と呼ばれる秋祭りは、諏訪神社の大祭である「長崎くんち」をはじめ、市内各地（40箇所近く）で「郷くんち」が行われている。「くんち」で奉納・上演される様々な民俗芸能には、国内各地の伝統芸能の影響はもちろん、海外の影響を受けて成立したと見られるものも見受けられる。</p> <p>「長崎くんち」の他にも、市内各地の秋祭りで奉納される伝統芸能には、伊良林若宮神社の秋の大祭に奉納される「竹ン芸」や、滑石くんちに奉納される「滑石竜踊」など、長崎独特のものがある。また、佐賀藩領であった地域を中心に「浮立」が伝えられており、「間の瀬狂言」や「中尾獅子浮立と唐子踊」など地域色豊かなものが見られる。その他、「野母の盆踊」や、飯香浦や太田尾の「地蔵まつり飾りそうめん」といった、各地に独特の民俗芸能が伝承されている。</p>	
<p>関連する主な歴史文化遺産等</p>	<p>有形</p>	<p>関連施設・遺跡：諏訪神社、八坂神社、若宮稲荷神社 等          関連資料：魚の町の傘鉾飾、諏訪町傘鉾垂及び下絵、万屋町傘鉾垂一式【以上市指定有形文化財】等、諏訪祭礼図絵巻、出島町神事奉納踊阿蘭陀船長崎入津行列絵巻〔甲斐宗平〕等、くんち奉納踊りの道具類、シャギリ・囃子・明清楽等に用いられる楽器類、諏訪神社の能関係資料</p>
	<p>無形</p>	<p>長崎くんち：長崎くんちの奉納踊【国指定重要無形民俗文化財】、長崎くんち奉納音曲【県指定無形民俗文化財】、長崎刺繍 等          行事：野母盆踊【県指定無形民俗文化財】、地蔵まつり飾りそうめん（飯香浦・太田尾）【市指定無形民俗文化財】、ペーロン、ハタ揚げ、精霊流し、節分行事（モットモ）、中国盆、春節祭、ランタンフェスティバル 等          伝統芸能：間の瀬狂言【県指定無形民俗文化財】、竹ン芸、中尾獅子浮立と唐子踊、滑石竜踊【以上市指定無形民俗文化財】、浮立、獅子舞、川原まだら 等          関連技術：ハタ製作技術、ペーロン船造船技術 等</p>
	<p>その他</p>	<p>関連資料所蔵・展示館：長崎歴史文化博物館 等</p>





<p>テーマ</p>	<p>1-3 長崎独特の食文化</p>	
<p>概要</p>	<p>長崎では、豊富な海の幸を活用した水産加工品の生産が盛んである。それに加え、近世や近代の海外との交流をきっかけに長崎にもたらされた各国の食文化が融合し、長崎独自の食文化が生み出されている。長崎の食文化は、外国人から直接伝えられ継承されているものや、その後の創意工夫により発展、進化したものなどが見られるが、今日、全国的に広く浸透しているものもある。このほか、長崎くんちの際のくんち料理や、節分料理、節句料理など、年中行事に関連する独特な料理や菓子も見られる。</p> <p>●海外との交流により生まれた食文化</p> <p>&lt;料理&gt;</p> <p>卓袱料理は、大皿に盛られた料理を円卓を囲んで味わう宴会料理であり、和食、洋食、中国料理の要素が互いに混じり合った、まさに長崎らしい郷土料理といえるが、もともとは唐人屋敷の料理が起源と伝えられる。旧市街地周辺には江戸や明治から続く卓袱・懐石料理の料亭が残っている。</p> <p>黄檗宗の伝統である普茶料理をはじめ、中国から伝えられた、又は中国料理を起源とするものは多く、ボラの卵巣から作るからすみも、江戸時代に中国から長崎に製法が伝来したといわれる。また、長崎ちゃんぽんは、明治中期に長崎の中国料理店が考案したのが始まりとされ、皿うどんとともに、長崎名物として、現在の我が国の食生活にも広く浸透している。なお、長崎産の新鮮な地魚を使用した蒲鉾などの伝統的な水産加工品も、ちゃんぽんなどの具として欠かせないものとなっている。</p> <p>ヨーロッパ諸国から伝えられ広く日本に広がった食文化も多い。ポルトガル人から伝わった南蛮料理には、パン、テンプラ、ヒカド、ヒロウズ、南蛮漬などがある。幕末期には西洋料理を外国人から学んだ草野丈吉ら日本人が良林亭(後の自由亭)などの洋食店を長崎に開業し、人々に西洋料理を紹介した。また、近年では、戦後間もない1950年頃に誕生したとされるトルコライスも、長崎の味覚として受け入れられている。</p> <p>その他、ド・ロ神父が授産事業の一つとして取組んだマカロニ製法を用いた「ド・ロさまそうめん」、卓袱料理から派生した豚の角煮「東坡肉」など、長崎の風土や歴史から生まれた独特の郷土料理がある。</p> <p>&lt;菓子&gt;</p> <p>長崎では、料理と同様、西洋や中国伝来の菓子も独自に改良発展させ、西洋由来のカステラ、金平糖を始め、中国由来の月餅等が、現在も多くの人々に親しまれている。</p> <p>その発展の一番の基となったのは、菓子の原材料となる白砂糖が、他地域に先駆けて唐船やオランダ船によってもたらされたことにある。長崎では輸入された砂糖を菓子作りに用いるとともに、長崎街道を通じて国内各地に輸送したことから、街道沿いでは丸ぼうろ(長崎～佐賀)、おこし(諫早～大村)、羊羹(小城)、鶏卵素麺(福岡)等の砂糖菓子が生まれ、長崎を起点とする街道が、シュガーロードとしてその文化を広げて行った。</p> <p>●年中行事にちなんだ食文化</p> <p>子供の成長を願い鯨などの大きいものを食卓にならべる節分料理、中国の影響を受けた桃の節句の桃饅頭や端午の節句の唐あくちまき、長崎くんちで振舞うくんち料理など、年中行事に関連する長崎の独特な料理や菓子も見られる。3つの海に囲まれた長崎市は、沿岸漁業から遠洋漁業まで様々な漁業が盛んで、全国有数の水揚げ量を誇り、取り扱われる種類も豊富である。そのため長崎の食文化には魚料理が大きく関わっている。節分料理や節句料理、ひな祭り、くんち料理などには、各季節や縁起物の魚が用いられる。</p> <p>また、江戸時代から捕鯨が盛んであった長崎では、戦後も全国有数の鯨肉消費地であり、鯨料理も多いのが地域の特性である。</p>	
<p>歴史文化遺産等 関連する主な</p>	<p>有形</p> <p>関連建造物・遺跡：花月【県指定史跡】、富貴楼【国登録有形文化財】、小野原本店【国登録有形文化財】等</p>	<p>無形</p> <p>海外の影響を受けた食文化：卓袱料理、普茶料理、南蛮料理(天ぷら等)、南蛮菓子(カステラ等)、西洋料理、ちゃんぽん、皿うどん、東坡肉(とんぼろうろ)、からすみ 等</p> <p>年中行事にちなんだ食文化：節分料理、節句料理、くんち料理 等</p>



# 長崎市歴史文化基本構想

発行 長崎市

編集 長崎市経済局文化観光部文化財課

〒850-0874 長崎市魚の町5番1号

TEL : 095 (829) 1193

発行日 平成27年3月